

2021 年度

徳島大学  
高等教育研究センター  
学修支援部門

---

国際教育推進班

紀要・年報



# 2021 年度 徳島大学高等教育研究センター 学修支援部門国際教育推進班 紀要・年報

## 目次

### 【紀要論文】

徳島大学 GRIP（第 1 期生・第 2 期生）の実践報告 ―新たな全学的なグローバル人材教育プログラム― 清藤 隆春、橋本 智、坂田 浩、モートン 常慈、チャン ホアンナム .....	1
オンライン留学参加学生のグローバル・コンピテンシーの傾向分析 ―BEVI を用いた測定結果に基づいて― 清藤 隆春、橋本 智 .....	11
海外大学との PBL 型国際共修 ―地元企業と連携したグローバル教育実践― 清藤 隆春、齋藤 亨子、橋本 智 .....	16
留学生向けストレス対策セミナー ―徳島大学での取り組み― 井ノ崎 敦子、チャン ホアンナム、金 成海 .....	22
Recruiting International Students and Internationalization Policies of Bulgarian Universities TRAN Hoang Nam, MARINOVA Katya .....	25
Campus's Images: Implications from a Photo Exhibition キャンパスのイメージ：写真展の結果と今後の展望 チャン ホアンナム、清藤 隆春、坂田 浩、橋本 智、金 成海 .....	32

### 【年報】

・ 外国人留学生への指導・相談関連 .....	39
新入留学生に対するガイダンス .....	39
消防訓練 .....	39
留学生のためのストレス対策セミナー .....	39
留学生のための就職支援 .....	40
・ 「留学生のための就職支援セミナー」および「留学生県内定着促進事業」 .....	40
・ 就職個別相談 .....	41
・ 「留学生就職意向動向調査」 .....	41
留学生受け入れ及び支援に関する活動 .....	42
・ 渡日前入学許可制度 .....	42
・ 外国人留学生のための進学説明会および日本留学フェア .....	42
・ 主な活動 .....	43
・ 日本文化体験・国際交流関連 .....	44
各種学外研修・国際交流イベント .....	44
・ オンライン交流会 .....	44
・ 学生サポーター制度 .....	44
・ 日本語教育 英語教育 .....	45
日本語研修コース .....	45
・ 初級コース（前・後期） .....	45
日本語研修（上級）コース .....	47
日本文化研究（後期） .....	48
総合日本語 .....	49
留学生のための英語 .....	53
・ 海外留学関連 .....	54
短期海外留学プログラム（夏期・春期） .....	54
オンライン留学プログラム（夏期） .....	54
オンライン留学プログラム（春期） .....	55

その他のオンライン国際交流.....	56
グローバル・パーソン集中プログラム（第1期生） .....	56
グローバル・パーソン集中プログラム（第2期生） .....	57
慶北大学（韓国）交換留学 .....	57
個別留学相談 .....	58
官民協働海外留学支援制度～トビタテ！留学 JAPAN～ .....	58
その他の留学支援.....	58
徳島大学外国人留学生在籍状況 .....	59
学術交流協定校一覧.....	61
徳島大学国際教育関係組織体制 .....	64
徳島大学高等教育研究センター規則 .....	65
徳島大学高等教育研究センター学修支援部門国際教育推進班会議規則 .....	71
徳島大学高等教育研究センター学修支援部門国際教育推進班運営スタッフ会議に関する申合せ .....	73
徳島大学高等教育研究センター日本語研修コース規則 .....	74
高等教育研究センター学修支援部門国際教育推進班・国際課人員名簿（2022年2月1日時点） ....	75

# 紀要論文



# 徳島大学 GRIP（第 1 期生・第 2 期生）の実践報告

## —新たな全学的なグローバル人材教育プログラム—

清藤 隆春

KIYOFUJI, Ryushun  
Research Center for Higher Education  
Tokushima University  
徳島大学高等教育研究センター

坂田 浩

SAKATA, Hiroshi  
Research Center for Higher Education  
Tokushima University  
徳島大学高等教育研究センター

チャン ホアンナム

TRAN, Hoang Nam  
Research Center for Higher Education  
Tokushima University  
徳島大学高等教育研究センター

橋本 智

HASHIMOTO, Satoshi  
Research Center for Higher Education  
Tokushima University  
徳島大学高等教育研究センター

モートン 常慈

MORETON, George  
Institute of Liberal Arts and Sciences  
Tokushima University  
徳島大学教養教育院

要旨：徳島大学高等教育研究センターは 2021 年度前期から全学的なグローバル人材育成を目的としたプログラム「グローバル・パーソン集中プログラム（Global Person Resource Intensive Program (GRIP)）」を開始した。本稿では 2021 年度前期（第 1 期生）と後期（第 2 期生）を取り上げ、その実践報告および効果を検証していく。分析は学生のアンケートを用いたが、英語力だけでなく異文化理解などの面においても一定の効果があり、GRIP にはグローバル人材育成において一定の効果があったことが明らかとなった。

キーワード：GRIP、グローバル人材育成、オンライン交流

## 1. 研究の背景と目的

徳島大学高等教育研究センターでは、グローバル化の進む現代において、その時代の変化に対応できるグローバル人材と言われるスキル・コンピテンシーを備えた学生の育成を目的として、2021 年度前期から全学的なグローバル人材育成を目的としたプログラム「グローバル・パーソン集中プログラム（Global Person Resource Intensive Program (GRIP)）」を開始した。グローバル人材については、〈要素Ⅰ〉「語学力・コミュニケーション能力」、〈要素Ⅱ〉「主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感」、〈要素Ⅲ〉「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」を兼ね備えた人物であると定義づけられている<sup>1)</sup>。本稿では、2021 年度の徳島大学 GRIP の各セッションについての実践報告をするとともに、学生のアンケート結果を用いて、そのセッションのグローバル人材育成における効果を検証していく。

## 2. GRIP について

### 2.1 GRIP 参加者

徳島大学は 2021 年度から GRIP を開始し、全学部を対象に募集を行い、前期（第 1 期生）に 14 名、後期（第 2 期生）に 14 名が参加した。参加者の内訳は以下の表 1 の通りである。

表 1 参加者の内訳

	参加者数
総合科学部	7 名
医学部	11 名
歯学部	0 名
薬学部	4 名
理工学部	4 名
生物資源産業学部	2 名
合計	28 名

### 2.2 前期（第 1 期生）の概要

前期（第 1 期生）に行ったセッション項目や時間数は表 2 の通りである。

表2 前期のセッション項目・時間数の一覧

セッション	回数	時間数
オリエンテーション・事前事後指導	3回	3時間
異文化理解講座	1回	1時間
英語集中講座	12回	6時間
グローバル講演会	1回	1時間
日本文化講座	3回	4.5時間
SIU オンライン留学	20回	40時間
合計	40回	55.5時間

前期（第1期生）は2021年6月にプログラムが開始し、「異文化理解講座」を皮切りに、基本的に週2回のペースで、「英語集中講座」、「グローバル講演会」、「日本文化講座」へと続いていた。なお、グローバル講演会には、グローバル人材として海外で活躍する徳島大学の卒業生を講師として招待して、講演してもらった。英語集中講座には、マレーシア工科大学<sup>注1)</sup>（以下、UTM）の日本語履修学生との国際交流も含まれている。また、2021年8月中旬から9月上旬（4週間）にアメリカ南イリノイ大学<sup>注2)</sup>（以下、SIU）と共同開発したオンライン留学<sup>注3)</sup>プログラムを実施し、毎日21時～23時（日本時間）の時間帯で、学生たちはネイティブの英語教員から英語を学んだり、英語を用いた学生交流を行った。徳島大学高等教育研究センターでは、このオンライン留学の期間中、学生たちのこの国際交流をサポートすることを目的に、週2回のペースで英語集中講座も実施している。

## 2.3 後期（第2期）の概要

後期（第2期生）に行ったセッション項目や時間数は表3の通りである。

表3 後期のセッション項目・時間数の一覧

セッション	回数	時間数
オリエンテーション・事前事後指導	3回	3時間
異文化理解講座	2回	2時間
英語集中講座	20回	29時間
国際共修プロジェクト	4回	6時間
日本文化講座	3回	3時間
SIU オンライン留学	20回	40時間
合計	52回	83時間

後期（第2期生）は2021年9月にプログラムが開始し、「異文化理解講座」を行った後、約1ヶ月間、日本語と英語の2言語を用いてシンガポール国立大学<sup>注4)</sup>とPBL型の国際共修<sup>注5)</sup>を

行った。10月から1月まで、基本的に週2回のペースで「英語集中講座」や「日本文化講座」を行った。なお、英語集中講座には、UTMの日本語履修学生との交流や、マレーシアマラッカ技術大学<sup>注6)</sup>（以下、UTeM）の英語教員による英語授業（UTeM 学生との交流）も含まれる。

また、前期（第1期生）同様に、2022年2月中旬から3月上旬（4週間）にSIUと共同開発したオンライン留学プログラムを実施し、毎日21時～23時（日本時間）の時間帯で、学生たちはネイティブの英語教員から英語を学んだり、英語を用いた学生交流を行った。徳島大学高等教育研究センターでは、このオンライン留学の期間中、学生たちのこの国際交流をサポートすることを目的に、週2回のペースで英語集中講座も実施している。

## 2.4 本稿で扱うセッション

上記「2.2」や「2.3」のように、2021年度GRIPでは様々なセッションを実施したが、紙幅の都合上、「国際共修」および「SIU オンライン留学」についての実践報告は別稿に譲ることとし、本稿では「グローバル講演会」、「異文化理解講座」、「英語集中講座」、「日本文化講座」を扱うこととする。

## 3. グローバル講演会

### 3.1 実施の背景と目的

グローバル人材の育成において、異文化の中で働くことで得られるやりがい、海外生活の中でのワークライフバランス実現、異文化環境の中で主体的にキャリア形成するために大切な心構えを学ぶことが重要である<sup>2)</sup>。また、海外でキャリアを積むことに対する敷居を取り払うために、学生のロールモデルになりうる身近な存在を講師に選ぶことが重要である<sup>3)</sup>。そのため、GRIPでグローバル講演会を実施する際、海外で活躍する徳島大学の卒業生を講師に選ぶことにした。

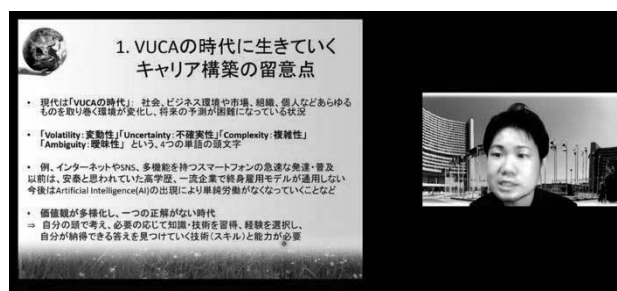


図1 グローバル講演会の様子



### 3.2 講演会の概要

新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、グローバル講演会はオンラインで実施した。国連職員で徳島大学医学部医学科の卒業生を講師に、日本語で約1時間（約15分間質疑応答を含む）、グローバルキャリアを築くために学生時代にやっておくべきこと等について自身の体験をもとに話をしてもらった。参加者を広く呼びかけ、徳島大学の教職員や学生、地域の人も含めて、約40名が参加した。

### 3.3 GRIP 学生からの感想

グローバル講演会を受講した学生から様々な感想を聞くことができた。以下に、主なものを挙げる（一部抜粋）。

- ・今回の講演で学んだことが沢山ありました。ひとつは、メンタルヘルスに対する考え方を改めるきっかけとなったことです。『無理に詰め込まない』、『あれこれやらない』、また『優先順位を絞る』ということが今の自分には出来ていないように感じました。これからメンタル面で自分を引き締めていこうと思いました。そして、国際的に働くということについて詳しく知ることが出来ました。大学生のうちに、自分の好きなこと、やりたいこと、また興味のあることを存分に研究し、社会的経験として活かせるように精進していきたいと思いました。
- ・何かすごいことをやり遂げる人は一般人の私とは違うものだと思ってしまうが、今回の講演でプロセスを教えていただいたことで、現実味が増しました。メンタルヘルスは私も大学の勉強とGRIPと部活、バイトをこなしていく中で重要だと感じていましたが、同じことをおっしゃっていて、やはりそうなのだと確認できました。
- ・実際に国連機関で働いている方からお話を聞く機会はなかなかないので、とても貴重な体験をさせて頂きました。特に印象に残ったお話は、国連機関で働くことに伴うメリットとデメリットのお話です。メリットの中に挙げてくださいたいものはどれも魅力的なもので、私がなりたいと思っている将来像にぴったりハマるものがありました。しかし、やはり国連機関となると世界規模で仕事をするため、たくさん大変なこともあるということを知り、改めて実感しました。国も文化も全く違う人達が集まって仕事をするのは魅力的である一方、コミュニケーションの難し

さという壁があるのだとお話から理解しました。私も将来たくさんの国籍の人と仕事ができれば、と思っているので、今回の講演で学んだ「今からどのような対策をすべきか」ということを自分のこれからのキャリアプランに活かすことができると考えます。今回学んだことを心に留めておき、自分の目指す将来像に近づけるように頑張りたいと思います。

- ・自分自身も同じ学科の所属であるため、興味深くお話を聞かせていただきました。世の中には様々な働き方があること、世界に視野を広げてみることを改めて感じました。国連職員は漠然とカッコいいなあという気持ちがありましたが、どこか遠い世界のようにも感じていました。しかし、実際に国連職員として働かれている講師の先生のことを知り、自分から行動すればできるんだという思いに変わりました。在学中にしておくべきことや、海外に出ていく上で知っておいたほうがいいことなど、ご自身の経験からのとても有益なアドバイスをいただけて、本当に参考になりました。これから自分のやりたいことを常にしっかり考えるようにして、その都度できることをやっていきたいと考えています。自分から行動していくためにも、ビジョンをはっきりと持つておくことが大切だと強く感じました。

### 3.4. まとめ

GRIP 前期（第1期生）では、海外で働くことで得られるやりがい、ワークライフバランス実現、キャリア形成するために大切な心構えを学ぶ機会を提供することを目的に、グローバル講演会を行い、上記「3.3」のように学生たちは多くの学びを得ることができた。その中でも印象的であったのは、「どこか遠い世界のようにも感じていました。しかし、実際に国連職員として働かれている講師の先生のことを知り、自分から行動すればできるんだという思いに変わりました。」や、「何かすごいことをやり遂げる人は一般人の私とは違うものだと思ってしまうが、今回の講演でプロセスを教えていただいたことで、現実味が増しました。」という学生たちのフィードバックにもあるように、参加学生の所属する大学の卒業生を講師に選ぶことで、講師を身近な存在と感じ、学生の良いロールモデル海外でのキャリア形成に対する敷居を下げることに繋がれたと考える。

#### 4. 異文化理解講座および英語集中講座

ここでは 2021 年度前期および後期に実施した異文化理解講座、英語集中講座についてその概要を解説することとする。具体的には、まず両支援の背景と目的を述べた後、異文化理解講座の内容ならびに英語集中講座の内容について概説する。特に、後期の英語集中講座では、UTM の学生を対象としたインタビューならびにプレゼンテーション、英語インタビュー・プレゼンテーションに対する支援、UTeM の英語教員による本学学生に対する英語集中講座などの非常にユニークな活動を行ったが、本項ではこれらの活動についても解説を行うことにする。

##### 4.1 実施の背景と目的

我々が外国語を学習する際、当該外国語を話す人たちと交流し、その人たちの文化や言語に対する近しさを感じることは重要である。

例えば、ここで韓国語を学ぶ学習者 A と B を考えてみることにしよう。韓国人の友人はゼロで、これまで大学の外国語科目として韓国語を学習してきた学習者 A の場合、韓国語は心的にやや距離を感じる「外国語」であり、自分の考えやイメージなどを表現・表出し、他者に働きかけ、その考えなどを実現する手段としての位置づけは薄いと考えられる。だが、その一方で、周りにたくさんの韓国人留学生や友人がいて、今も日常的に韓国語を使用している学習者 B の場合を考えてみると、韓国語は自分にとって友人と自分をつなぎ、自分の大切な居場所を維持するために必要不可欠なツールであり、大学の授業で単位のために学ぶ「外国語」などという位置づけではないと考えられる。このように、外国語を話す人たちとの交流が日常ベースで行われており、相手文化と自分の間にある距離が比較的近い場合、学習者もその外国語を日本語以外のもう一つの自己表現手段（つまり、第 2 言語）として位置づける可能性がかなり高まるものと考えられ、いわゆる交流を通して異文化理解を促進することにより、外国語能力の向上もかなり期待できるものと考えられる<sup>4)</sup>。

ただ、その初期段階を考えてみた場合、外国語学習や外国語能力が果たす役割は大きいと考えられる。典型的な例としては、語学教員であれば誰もが一度は経験したことのある「英語が話せないから留学生との交流はちょっと…」、「日本語しか話せないから外国人への対応は…」といったケースを挙げることができるだろう。このように外国語や英語ができないから

という理由で外国人との交流を敬遠するケースは依然として多く、本学でも国際化を阻害するひとつの根本的な要因であった。

特に、日本人大学生のように、異文化との交流経験が少なく、外国語（この場合は英語）能力にも課題がある場合、異なる文化背景を持つ人に恐怖を感じ、結果、文化差に対し防衛的な反応を呈する場合は非常に多いと考えられる<sup>5)6)</sup>。「外国人は何を言っているか分からないし、怖いから関わらない」といった反応は日本人大学生以外の誰にでも起こりうるものであり、さほど特異なものではない。事実、日本人大学生の多くは異文化に相対した際に防衛的反応を示すことが多く、異文化との共通点や近しさを見出しすまでは至っておらず、その背景には「英語が話せる彼ら VS 英語が話せない私たち」という、英語を基軸とした二元論的な世界観が大きく影響していると考えられる<sup>7)</sup>。

このことはつまり、日本人大学生の異文化理解を促進し、グローバルな場面でも十分に機能するための基盤を作るには、①異文化との交流を通して文化的な近さを体感させ、異文化との共通点に気づかせるだけでなく、②外国語の集中トレーニングを通して学生の語学力を向上させ、実際の交流を通して「自分も外国語で相手とコミュニケーションできるのだ」ということを実感させるといった、文化交流と語学学習の両面を兼ね備えた支援が求められることを意味しており、新規に異文化理解プログラムを構築する際にもこれらの点に留意する必要があると考えられる。

そこで、今回の GRIP においては、これらの知見を参考に、

- ・ 異文化との交流体験が少ない学生に少しでも異文化を自分にとって近い存在として感じてもらうとともに、
- ・ 基礎的な外国語（今回の場合は英語）能力を向上させ、「自分たちも相手と外国語でコミュニケーションできるのだ」といったことを実感してもらう

といった目的を設定し、次項に解説する異文化理解講座と英語集中講座の 2 つを並列的に提供することとした。

##### 4.2 講座の内容

前項にまとめた背景・目的を念頭に、今回の GRIP では、①異文化との交流で体験する文化差への対応について学ぶこと目的とした「異文化理解講座」、②基礎的英語力の向上を目的と

した「英語集中講座」の2つを中核としたプログラムを展開した。なお、後期（第2期生）のGRIPについては、マレーシア人学生へのインタビューを通してマレーシア文化と日本文化の比較を行い、その結果について発表することを目的とした「多文化紹介プレゼンテーション」を組み込んだため、前期とは内容面でかなり異なるものとなった。各講座の概要を以下に示すことにする。

#### 4.2.1 「異文化理解講座」

本講座は、2021年度前期・後期に実施したGRIPのオリエンテーションとして初日に行ったものである。主には、先にも述べたように、異文化との交流体験を通して自文化との共通点や近しさに気づくことの重要性を主たるテーマとして講義を行った。

本講座を準備するにあたり、まず参考にしたのは、Bennett (1993)<sup>8)</sup>、Hammer (2011)<sup>6)</sup>、Hammer, Bennett, & Wiseman (2003)<sup>9)</sup>らが提唱する「異文化感受性発達モデル (Developmental Model of Intercultural Sensitivity (DMIS))」であった。異文化感受性について、文化差を思い込みや偏見にとらわれず理解する力として考えており、その根底には個人が持つ文化世界観が大きく影響していると述べている。DMISはこの文化世界観の変容を、

- ・「違いの否定 (Denial)」
- ・「違いの二極化 (Polarization)」
- ・「違いの最小化 (Minimization)」
- ・「違いの受容 (Acceptance)」
- ・「違いへの適応 (Adaptation)」

という5段階からなる発達段階として捉えた<sup>9)</sup>点で特徴的であるが、この理論を基に日本人大学生の異文化に対する反応傾向を見てみると非常に面白いことが分かる。

日本人大学生の場合は異文化に対し防衛的な反応をすることが多いことは先にも述べた通りだが、坂田 (2004)<sup>7)</sup>の分析を参考に考えると、例えば「道で困っている外国人に英語で話しかけたが通じなかった」などの英語にまつわるネガティブな異文化体験が原体験となり、英語力を基軸とした「英語ができる彼ら VS 英語ができない自分たち」といった二元論的な文化世界観を作り上げてしまった (Polarization) 結果、「みじめな思いをするかもしれないから、外国人とは関わらない方が身のため」といった自己防衛的な理由で異文化との接触を回避す

るに至っている場合が多いものと想定される。

この例からも分かるように、日本人学生を対象とした異文化理解プログラムを設計する際には、英語を基軸とした二元論的な文化世界観から如何にして脱却するか、そして脱却した後にどのような世界観を獲得するのが望ましいのかという2点が重要な意味を持つ。この中でもDMISは2つ目のポイントに対する重要な示唆を提示しており、今回の「異文化理解講座」では前後期共にこのDMISを基に講義内容を設定した。具体的には、

- ・今現在持っている二元論的な文化世界観 (Polarization) から「違いの最小化 (Minimization)」に到達することを今回のGRIPにおける目標としてもらいたい
- ・そのためにも、異文化との交流体験を通して自文化との共通点や近しさに気づくことが肝要である

といった2点について講義を行った。なお、この「異文化理解講座」は、後述する英語集中講座のオリエンテーションと併せて実施した。

#### 4.2.2 「英語集中講座」

英語集中講座は、GRIPに参加学生の基礎的英語力向上のために前後期共に開講したものであり、いわゆるオンライン型の短期留学の事前指導に相当するものである。全体としては、

- ・継続的英語学習への導入に関する講義
- ・オンライン学習システムによる継続的英語学習支援
- ・レベル別英語学習・英語プレゼン支援
- ・オンライン型の短期留学に向けた英語ディスカッション指導

という内容で講座を構成し、最後のディスカッション指導は後期のみ提供した。

最初の「継続的英語学習への導入に関する講義」は、英語集中講座全体のオリエンテーションとして先述の異文化理解講座と併せて前後期共に初回に実施したものである。内容としては、「英語力を実用的なレベルまで向上させるには長期間の学習が必要」、「そのためにもGRIPをきっかけに、プログラム終了後も継続的に英語学習を行うことが求められる」、「日ごろの授業と同じように受け身的に受講するのではなく、自ら積極的かつ主体的に学ぶことが大事」などを主に取り扱った。

次の「オンライン学習システムによる継続的英語学習支援」に関しては、本学内に導入されている英語オンライン学習システム「スーパー



英語」を用いて行った（前後期共に実施）。システム内に組み込まれている問題（語彙・読解）を上級・中級・初級のレベルに分けて編成し、GRIP 参加者に約 40 日間自動配信した。毎日配信する課題は毎回約 30 分で完了するものを選択し、参加者が自分で好きなレベルを選択するように指導し、継続的な自律学習を実践するための一助とした。

3 つ目の「レベル別英語学習・英語プレゼン支援」は、本支援講座の前半部分に相当するもので、いわゆる「英語で意思疎通をすることに慣れる」ための導入的講座である。少人数クラスとするために、事前に行ったオンラインの英語能力判定テスト「CASEC」<sup>注 7)</sup>の結果に基づき、複数のクラスに分けて指導を行った。前期は成績に応じてクラスを 4 つに分け、1 時間の講座を 3 回提供した。上位 2 クラスを外国人講師が、下位 2 クラスを日本人講師が指導を担当し、フリーディスカッションを中心とした基礎的な英会話の指導を行った。後期も成績に応じてクラスを 4 つに分け、上位 2 クラスを外国人講師が、下位 2 クラスを日本人講師が指導を担当した。

ただ、後期に関しては、講座回数を 6 回に増やし、UTM で学ぶ学生へのインタビュープロジェクトおよび英語プレゼンテーションを中核としたものに講座内容を変更した。インタビュープロジェクトの仕上げとして本学参加学生によるマレーシア文化と日本文化の比較を英語で発表するイベント（「多文化紹介プレゼンテーション」）を組み込んだ（図 2）ことから、支援講座については「インタビューの方法やまとめ方を学ぶ」、「英語プレゼンテーションの方法を学ぶ」といった内容を取り入れた。後期の英語集中講座の内容については表 4 を参照してもらいたい。また、UTeM の英語教員に協力してもらい、基礎的な英語力を向上させるために英会話を中心とした講座を同時進行で展開した。

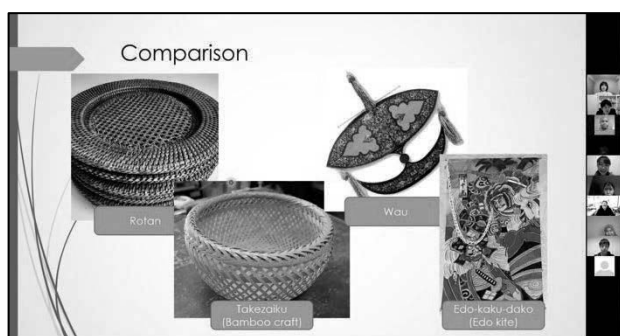


図 2 「多文化紹介プレゼンテーション」の様子

表 4 英語集中講座概要

回数	内容
1	インタビューの方法・まとめ方を学ぶ
2	英語プレゼンの方法を学ぶ
3	日本文化を説明してみよう
4	インタビュー実践①
5	インタビュー実践②
「多文化紹介プレゼンテーション」	
6	お礼状を書こう

最後の「オンライン語学研修に向けた英語ディスカッション指導」に関しては、オンライン留学で取り上げられると想定されるテーマを講師側で選定し、実際のオンライン留学を想定した形で支援を行った。左記の「レベル別英語学習支援」同様、CASEC の成績に基づき 4 つのグループに分け、上位 2 クラスを外国人講師が、下位 2 クラスを日本人講師が指導を担当した。なお、少人数化を図るため 1 回の支援を 30 分とし、各グループを 2 つに分けて合計 9 回実施したが、最下位のクラスについては 1 時間×9 回の支援を提供した。

#### 4.3 GRIP 学生からのフィードバック

上記の講座を受講した学生から様々な感想を聞くことができた。以下に、主なものを列挙することとする。

- ① 異文化理解講座・英語集中講座（継続的英語学習への導入に関する講義）について
  - ・ 「DMIS モデルで異文化感受性が段階分けされていて非常に興味深かった。自分は今どここの段階にいるのだろうかと考えながら講義を聞くことができた。」
  - ・ 「「自己表現の手段としての英語」という言葉が印象的だった。英語は人と自分を繋げてくれるものだと考えると、英語がより身近なものに感じることができた。」
  - ・ 先生が「講義の様に受けて終わりではなく、その経験を反省して何か発見はないか考えることをしなければ、このプログラムを受けた意味は全くない。」と言われ、それは確かにそうだったと思った。反省をどうやってするかについては、用意されている振り返りシートを丁寧に書くことで行いたい。もう一つ「アクセサリにするために英語を学ぶと、どうしても限界がある。」と言われていたが、これは聞いたことがない話だった。確かに、日本語では言いたい

ことが言えるのに、英語では言えないのは「自分の言いたいことを英語にしたらこんな感じになるけど、変な英語だったら恥ずかしい。」と考えてしまうからだと思う。私が英語を用いる目的は、英語を日本語が通じない人に対するコミュニケーションツールにすることなので、アクセサリーにする際に気にすべき「間違っていたら恥ずかしい。」という考えには意味がない。「とりあえず言ってみて、間違っていたら直そう。」くらいの方が、気が楽になりそう。すぐに考えを変えることは難しくても、このプログラムの期間に少しずつ挑戦してみようと思う。

## ② 英語集中講座（オンライン学習システムによる継続的英語学習支援）について

- ・ 毎日の課題があったので、より英語に触れることができました。
- ・ スピーキング以外の力を身につけることが出来たから
- ・ リスニング力がついたから。
- ・ 難易度が三段階ある点。予定が立て込み課題ができる時間が少ない日が多々あったため、普段の難易度より少し落としたりなど調整できたのが助かった。SIU プログラムが終わった後も復習できる機会があればいいと思った。
- ・ 毎日英語に触れる習慣がついたから。
- ・ 自分のペースで進めることができたから。毎日英語を学習する習慣が身についたから。
- ・ スーパー英語を活用して隙間時間にコツコツと学習できたから。
- ・ 現地に留学していない分英語漬けということではできないので、スーパー英語で英語に毎日一定の時間触れられたのはよかった。でも、自分で選ぶとどうしても簡単な方に取り組んでしまったり、時間がなくてただの作業のように淡々と終わらせてしまうこともあったので、そこは難しかった。

## ③ レベル別英語学習・英語プレゼン支援、オンライン形の短期留学語に向けた英語ディスカッション指導について

- ・ 英語を話す機会が増え、さらに同じグループの人が話しているのを聞いて考えが深まるとともに、私ももっと自分の意見を英語で言えるようになりたいと思ったから。
- ・ 細かい言い回しや、発音を教えてもらえたところ、そして、レベルや時間、話の内容

などもすごくよかったからです。

- ・ その日ごとに新しいトピックについて自分の意見を考え、話す練習ができる点がよかった。日常的な会話や自分の意見を言う練習が出来て SIU の授業を受ける上で、とてもよかったと思います。
- ・ 事前に指定されたトピックに関して、自らの意見がある程度準備して発表する形式で行われたため、自らの知っている単語だけでなく、新しい単語やフレーズを使う機会になったため。躊躇わず発言できる環境だったため、英語を使って会話をすることを楽しめた。
- ・ 毎回トピックを提示してくれてそれについてなんでもいいので一つでも意見を言うという姿勢が身に付けられた。また、文法面や単語面でより良い回答が作れるようにいつもアドバイスをしてくれたのがとてもありがたかった。
- ・ 少人数で発言する機会やお互いに質疑応答する時間もありとても楽しかった。

## 4.4 まとめ

今回の GRIP では、異文化理解と外国語（本稿の場合は英語）学習を促進するための支援を同時並行的に提供した。ここでは、プログラムを構築する際に参考とした異文化感受性モデルについて解説を行い、各々の講座について今年度の活動について解説を行った。

参加学生からの感想は概ねポジティブなものが多かったが、オンライン学習システムによる継続学習支援に関しては、若干内容ややり方を再考する必要があると思われる。今後の課題として取り組んでいきたいと考える。

## 5. 日本文化講座

### 5.1 概要

GRIP プログラムの中、3 回の「日本文化講座」が設けられて、日本だけでなく、四国の文化や社会（特に四国遍路）に詳しいモートン常慈が担当した。2021 年の前期（第 1 期生）では 90 分×3 コマ、後期（第 2 期）では 60 分×3 コマの授業があり、担当教員が参加していた徳島大学の学生（前期プログラムには徳島県内の 3 人の高校生も参加）やマレーシアにある UTeM 大学の学生に日本のインバウンド対策の歴史、日本のタブー、や四国の魅力、（例えば、名所、名別、祭り、イベント、伝統工芸等）を教えて、そのような事を英語で説明できるように指導した。また、視点をさらに絞って、徳島県のこ

と、例えば、阿波踊り、眉山、浄瑠璃、藍染、鳴門渦潮等も紹介した。さらにこの講座では徳島や四国の観光協会等が作成した動画も紹介して、それに出てくる単語、例えば、和三盆、遍路等を説明してから、徳島大学の学生は英語でマレーシアの大学生に説明した。この講座の主な狙いは日本や四国の魅力等に（再）認識してもらったことだった。

この3回の講座では、日本とマレーシアの学生は話し合う機会があったが、時間が限られていたので十分に練習することができなかった。しかし、GRIP 終了後、徳島大学の学生はSIUのオンライン留学プログラムで、この「日本文化講座」で習ったこと、マレーシア大学生と話したことを、今度このプログラムで使う機会があった。日本人の学生は日本、四国等について他国の人に説明する経験はあまりないので、このようなスキルを身に着くために、GRIP プログラムが非常に役に立つだろう。でもこの講座について受講者の声を聞くことが重要なので、第1期生と第2期生の「日本文化講座」後、徳島大学やマレーシアの受講生に「何を学びましたか」というアンケートを取った。ここで、いくつかのコメントや感想を紹介する。（強調のため下線を引いた）

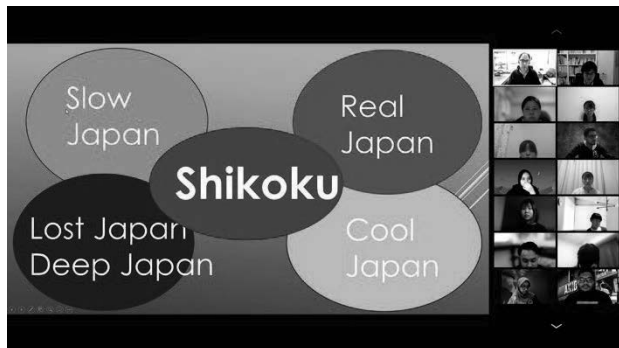


図3 日本文化講座の様子

## 5.2 参加者からのフィードバック

### ① 徳島大学の学生

- ・徳島の歴史や文化が知れたこと。まだ徳島に来て3ヶ月しかたっていないので、単純に嬉しかったのと、日本語に加えて英語のスク립トがあったので、英語ではこういう言い回しができるんだと勉強になった。
- ・この取り組みで印象に残ったことは、私よりもモートン先生が日本文化を、徳島の文化を知っていたということだ。それと同時に自分の住んでいる町のことくらいは、十分説明できるようにしたいと思うようになった。
- ・日本のものについて英語で説明する練習をし

たことが印象に残った。日本のものを説明するにはまずそのものや場所について知識を十分持っていないといけないし、加えて英語で説明するとなるとさらに難しかった。生まれてから住み続けている徳島のことさえも知らないことの方が多くて、もっと知りたいと興味を持つことができた。

- ・日本の文化について英語で説明するのが思っていた以上に難しく、海外の方に聞かれたときにちゃんと答えられるようにもっと勉強しないといけないと感じた。徳島の文化では特にお遍路についてのお話が興味深かった。
- ・昔から日本ではやさしい英語という本があり、外国人を受け入れる体制を整え、歓迎していたところ。読み方や例文までしっかりと書いてあり、おもてなしの心が強い国だということに改めて感じた。
- ・徳島は田舎で誇れるものがあまりないと思っていましたが良い意味で日本らしさがたくさん残っていると再発見することができた。
- ・主に徳島の文化、名産品、観光名所などについて様々なことを知ることができた。また、四国には四国八十八か所巡り、真珠、和紙、日本酒など日本を代表する多くの文化があり、海、川、山など自然に恵まれた、豊かで穏やかな場所であることを再認識した。
- ・今まで何気なく過ごしていて見過ごしていた日本の文化をモートン先生の授業を通して改めて知ることができ、日本が素敵だなと思った。いざ説明するとなると日本語から英語にできずに、ブレイクアウトルームで狼狽えることも多かったがそれもまたいい経験で、今後日本のことを外国人の友人に紹介するときの糧になったと思う。
- ・徳島県に魅力あふれる場所や誇れる文化がたくさんあったこと。先生のお話やみんなの発表を聞いて、素晴らしい場所やモノがたくさんあるんだと感心した。特に自然豊かな山や川、神社などにはぜひ行ってみたいと思う
- ・自分の知らない四国の魅力についてたくさん知ることができた。私はまだ徳島に来て日が浅いが、今回学んだ四国の伝統文化や食材、自然にたくさん触れてみたいと思う。
- ・3週にわたって行われた日本文化の講義で私は自分が思った以上に日本文化について知らないことを学びました。3回の講義でしたが、とても濃い内容で面白かったです。
- ・私はあまり日本の文化を知らなかったのですが、徳島や昔の文化をみんなで知れて、話し合っ



たりして楽しかったです。

## ② マレーシア学生コメント（和訳）

- ・先生から日本文化、特に日本の伝統文化について多くを学んだ。
- ・このプログラムに参加する前は、日本の文化、特に徳島の文化についてあまり知りませんでしたが、このプログラムに参加してから、より深く学ぶことができた。いつか徳島に行き、その地を訪れることができたと思う。
- ・この講座に参加できてうれしい。徳島の文化や人々がどのように美しい生活を作り出しているのかに惹かれ、徳島を訪れたいと思うようになった。いつか徳島の自然を堪能したいと思います。この講座に感謝している。
- ・先生方をはじめ、このプログラムを企画された皆様、ありがとうございました。全く新しい経験をもたらしてくれたので、私にとって有意義なものだ。

## 5.3 まとめ

受講生のコメントを見ると、日本または四国の物事について英語で説明することが難しかったようだが、授業で習ったことが役に立ったり、他の学生と話し合うことが楽しかったという感想を抱いている。また、徳島や四国の素晴らしいことや魅力に再認識または再確認ができたことも分かる。そして、国外の参加者もこの授業で日本、四国や徳島について多く学んだことも明らかであり、このような講座が設けられたことに感謝していることも分かる。このような良いフィードバックを見ると、GRIPの中にあるこの3回の「日本文化講座」はグローバルパーソンになるためには、かなり役に立った講座だと証明された。

## 6. 全体のまとめおよび今後の課題

本稿では2021年度前期（第1期生）および後期（第2期生）で実施したセッションの中で、「グローバル講演会」、「異文化理解講座」、「英語集中講座」、「日本文化講座」を取り上げた。

まず、「グローバル講演会」については、徳島大学の卒業生を講師に選ぶことで、講師を身近な存在と感じ、学生の良いロールモデルとして海外でのキャリア形成に対する敷居を下げただけでなく、学生のモチベーションアップに繋げることができた。

「異文化理解講座」や「英語集中講座」については、参加学生からの感想は概ねポジティブなものが多く、異文化コミュニケーションや英

語学習における知見について学習体験をもとに深められたと考える。オンライン学習システムによる継続学習支援に関しては、若干内容ややり方を再考する必要がある。

「日本文化講座」については、授業で習ったことが役に立ち、他の学生と話し合うことが楽しかったという感想を抱いている。また、徳島や四国の魅力に対する再認識または再確認を促すことができた。

このように、学生のアンケートを用いて分析を行ったが、英語力だけでなく異文化理解などの面においても一定の効果があり、GRIPにはグローバル人材育成において一定の効果があったと考えられる。

## 注

### 1. マレーシア工科大学（Universiti Teknologi Malaysia）

（<https://www.utm.my>）は本学の協定大学である。交流会では、日本語履修学生と英義を用いて交流を行っている。

### 2. アメリカの南イリノイ大学（Southern Illinois University）は本学の協定大学である。プログラムの共同開発には、英語センター（Center for English as a Second Language (CESL)）

（<https://cesl.siu.edu>）がいち早く柔軟に対応してくれた。CESLの英語プログラムには、コロナ禍以前には毎年本学から学生たちを複数派遣している。

### 3. オンライン留学は、バーチャルに海外の学生と繋がって課題解決型のプロジェクト等を行う（Collaborative Online International Learning (COIL)）とは区別される。本稿では、オンライン留学を、

「一定期間オンラインで海外大学の授業を受けたり、海外大学生と交流を行う国際交流プログラム」と定義する。

### 4. シンガポール国立大学（National University of Singapore）

は本学の協定大学ではないが、定期的にオンライン交流会を行っている。交流会では、日本語履修学生と日本語や英語の二言語を用いている。

### 5. 国際共修とは、本稿では「異文化間の相互理解を促すことを目的に仕掛けられたプロジェクト等の協働活動」（末松 2019; 松村 2016）<sup>10) 11)</sup>と定義する。なお、シンガポール国立大学との国際共修については、その実践報告および効果について、「第17回大学教育カンファレンス in 徳島」で口頭発

表している（清藤・齋藤・橋本 2022）

<sup>12)</sup>。

6. マレーシアマラッカ技術大学 (Universiti Teknikal Malaysia Melaka) (<https://www.utem.edu.my>) は本学の協定大学である。
7. 「CASEC」とは、Computed Assessment System for English Communication の略で、JIEM (株式会社教育測定研究所) (<https://casec.evidus.com>) の提供するオンラインによる英語コミュニケーション能力判定テストで、このテストを受験することで TOEIC 等の換算スコアを得ることができる。

## 引用文献

- 1) 文部科学省 (2012) . グローバル人材育成戦略 (グローバル人材育成推進会議 審議まとめ) . p8.
- 2) 大岡栄美 (2016) 「関西学院同窓生と連携したグローバルキャリア教育の開発」 関西学院大学高等教育研究. 6号. pp. 17-28.
- 3) 友松篤信 (2012) 『グローバルキャリア教育—グローバル人材の育成』 ナカニシヤ出版.
- 4) 坂田浩 (2017) 「Self-Access Learning Center (SALC) における英語学習プロセス再考」 2017年度徳島大学国際センター紀要・年報. pp20-31.
- 5) Bennett, M. J. (2004). Becoming interculturally competent. In *Toward Multiculturalism: A Reader in Multicultural Education* (2nd ed., pp. 62–77). Newton, MA: Intercultural Resource Corporation.
- 6) Hammer, M. R. (2011). Additional cross-cultural validity testing of the Intercultural Development Inventory. *International Journal of Intercultural Relations*. <https://doi.org/10.1016/j.ijintrel.2011.02.014>
- 7) 坂田浩 (2004) 「日本人大学生の異文化感受性レベルに関する一考察」 異文化コミュニケーション, 7, 137–158.
- 8) Bennett, M. J. (1993). Towards ethnorelativism: A developmental model of intercultural sensitivity. In *Education for the Intercultural Experience* (2nd ed., pp. 1–51). Yarmouth, ME: Intercultural Press.
- 9) Hammer, M. R., Bennett, M. J., & Wiseman, R. (2003). Measuring intercultural sensitivity: The intercultural development inventory. *International Journal of Intercultural Relations*, 27(4), 421–443. [https://doi.org/10.1016/S0147-1767\(03\)00032-4](https://doi.org/10.1016/S0147-1767(03)00032-4)
- 10) 末松和子ほか(2019)『国際共修: 文化的多様を生かした授業実践へのアプローチ』 東信堂.
- 11) 松村真宏 (2016) 『仕掛学』 東洋経済新報社.
- 12) 清藤隆春・齋藤亨子・橋本智 (2022) 「シンガポールの大学との PBL 型国際共修～地元企業と連携したオンラインによるグローバル教育実践～」 第 17 回大学教育カンファレンス in 徳島 発表抄録集. pp42-43.



# オンライン留学参加学生のグローバル・コンピテンシーの傾向分析 －BEVI を用いた測定結果に基づいて－

清藤 隆春

KIYOFUJI, Ryushun  
Research Center for Higher Education  
Tokushima University  
徳島大学高等教育研究センター

橋本 智

HASHIMOTO, Satoshi  
Research Center for Higher Education  
Tokushima University  
徳島大学高等教育研究センター

要旨：徳島大学高等教育研究センターでは、2020 年度の夏休みから長期休暇を利用して、米国の南イリノイ大学と連携してオンライン留学プログラムを実施している。BEVI で効果測定をしたところグローバル人材育成の観点から一定の効果のあることが明らかとなったため、コロナ禍後にも継続することを検討している。本稿では、学生の特質に合ったオンライン留学プログラムを開発することを目的に、夏休みと春休みの参加学生たちのグローバル人材としての資質の違いを BEVI によって明らかにした。分析の結果、夏休み参加学生は異文化に関心がより強い傾向にあり、春休み参加学生は、海外に関心はあるものの、他者理解をしながら課題解決に取り組む複雑な思考については消極的な傾向があることも明らかとなった。

キーワード：オンライン留学、グローバル・コンピテンシー、BEVI

## 1. はじめに

新型コロナウイルスが 2020 年の春頃から世界的に急激に拡大し、移動に制限がかかったことでオンライン化が進み、グローバル化に一層拍車がかかっている。大学の現場ではグローバル人材育成がコロナ禍以前から求められており、異文化理解活動や海外留学プログラムが積極的に取り入れられている。これまでは留学といえば長期留学が主流であったが、長期休暇（夏休みや春休み）に実施する短期留学プログラムの開発が加速的に進み、各大学で参加者数が大幅に増えてきている<sup>1)</sup>。徳島大学高等教育研究センターでも、毎年夏休みと春休みの長期休暇を利用して、全学部学科の学生を対象に 1 ヶ月以内の短期海外留学プログラムを企画し、海外の大学・教育機関へ学生たちを派遣しており、コロナ禍後には再開する予定である。

学生の海外留学の主な目的は、グローバル人材育成である。グローバル人材の定義としては、〈要素Ⅰ〉「語学力・コミュニケーション能力」、〈要素Ⅱ〉「主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感」、〈要素Ⅲ〉「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」を兼ね備えた人物とされている<sup>2)</sup>。短期留学プログラムでは、上記〈要素Ⅰ〉の語学力は測定可能であるが、〈要素Ⅱ〉や〈要素Ⅲ〉の面（異文化理解や日本人としてのアイデンティティの変化）の測定は非常に難しく<sup>3)</sup>、留学後に行われるアンケート等の満アイデンティティ評価が主にその効果測定に使われているのが現状だ<sup>4)</sup>。そのような中で、情動的・心理的变化を客観的に評価するオン

ラインアンケート「BEVI」<sup>注 1)</sup> (The Beliefs, Events, and Values Inventory) を海外留学の効果測定のために使用する大学が増えてきている<sup>5)</sup>。

徳島大学高等教育研究センターにおいても、グローバル人材育成を目的として、毎年夏休みと春休みに全学部学科の学生対象として海外の大学・教育機関に派遣しているが、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点で、2020 年度は全ての海外留学プログラムが中止となった。そこで、2020 年度は米国の南イリノイ大学<sup>注 2)</sup> (以下、「SIU」) に相談を持ちかけ、オンライン留学<sup>注 3)</sup> プログラムを開発し、夏休みと春休みに実施したところ、オンライン留学には一定の効果のあることが明らかとなった<sup>6)</sup> ため、2021 年度の夏休みと春休みも同様に SIU のオンライン留学を実施しており、コロナ禍後にも継続したいと考えている。本稿では、2020 年度と 2021 年度に参加した夏休みおよび春休みのプログラム参加学生たちのグローバル人材としての能力 (= グローバル・コンピテンシー) の傾向について、BEVI を用いて明らかにし、参加学生の傾向に合わせたオンライン留学プログラム開発の参考とする。

## 2. 理論的枠組み

文化を表層文化と深層文化の 2 つに分ける二層構造説がある<sup>7)</sup>。表層文化とは、料理、服装、ジェスチャー、挨拶の仕方など、文化の表層部分に位置していて、外部から容易に捉えることができるものをさす。それに対して、深層文化

とは、外部の観察者が、相手の文化に入っても容易に把握できない価値観や思考法などを含む倫理的、精神的、道徳的、心理的な文化の側面などをさしている。なお、単純に服装などの目に見える様子のみを見れば表層文化であるが、その行動の背景の理由については深層文化に含まれる。このような文化構造を理解するために、「冰山モデル」(図 1) が使われる。このモデルでは、海に浮かんでいる氷山のうち海面から出ている部分が表層文化、海面の下に隠れている部分が深層文化であり、隠れていて目に見えない深層文化の方が圧倒的に大きい<sup>4)</sup>。

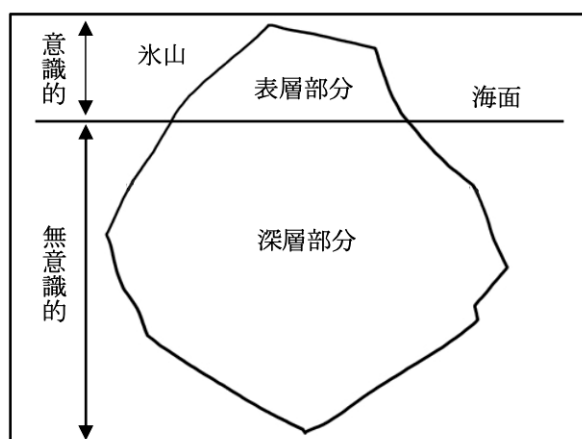


図 1 文化の「冰山モデル」(著者作成)

### 3. 研究方法

#### 3.1 BEVI

今回使用するオンライン型の心理尺度測定ツール「BEVI」は、1990 年初頭にアメリカの臨床心理学者 Craig N. Shealy らにより開発されている<sup>5)</sup>。価値、信念、そして人生の出来事に関する質問がなされ、その回答をもとに、「誰が、なぜ、どのような状況で、何を学習したのか」を明らかにすることができ、異文化交流や海外留学の体験の効果測定に使用可能とされている。日本では、2017 年度に広島大学が BEVI-J として日本語版を開発したことで多くの大学で採用され、日本人学生を含めて数万件のデータが蓄積されている<sup>5)</sup>。本学が使用したのもこの日本語版の BEVI である。なお、BEVI の受検はオンライン上で行われ<sup>注 4)</sup>、40 項目の個人についての背景質問と 185 のテスト項目の質問で構成され、所要時間は約 30 分である。テスト項目の回答の選択肢は、すべて 4 段階リッカート尺度となっており、受検者は「強く同意する」「同意する」「同意しない」「強く同意しない」から 1 つ選択していくようになっている。

表 1 BEVI のスケールの解説と解釈

I 形成的指標 (Formative Variables)	
スケール 1	人生におけるネガティブな出来事 (Negative Life Events)
II 中核的欲求の充足度 (Fullfillment of Core Needs)	
スケール 2	欲求の抑圧 (Needs Closure)
スケール 3	欲求の充足度 (Needs Fulfillment)
スケール 4	アイデンティティの拡散 (Identity Diffusion)
III 不均衡の許容 (Tolerance of Disequilibrium)	
スケール 5	基本的な開放性 (Basic Openness)
スケール 6	自分に対する確信 (Self Certitude)
IV 批判的思考 (Critical Thinking)	
スケール 7	基本的な決定論 (Basic Determinism)
スケール 8	社会情動的一致 (Socioemotional Convergence)
V 自己とのかかわり (Self Access)	
スケール 9	身体的共鳴 (Physical Resonance)
スケール 10	感情の調整 (Emotional Attunement)
スケール 11	自己認識 (Self Awareness)
スケール 12	意味の探究 (Meaning Quest)
VI 他者とのかかわり (Other Access)	
スケール 13	宗教的伝統主義 (Religious Traditionalism)
スケール 14	ジェンダー的伝統主義 (Gender Traditionalism)
スケール 15	社会文化的オープン性 (Sociocultural Openness)
VII 世界とのかかわり (Global Access)	
スケール 16	生態との共鳴 (Ecological Resonance)
スケール 17	世界との共鳴 (Global Resonance)

BEVI の回答結果については、サーバー上で自動的に統計的処理がなされ、教員等の管理者はオンライン上で管理者アカウントから分析結果を確認できる。その中の「全体プロフィール」(Aggregate Profile)を見ると、グループ全体のプログラム前の受検結果 (T1) とプログラム後の受検結果 (T2) について、表 1<sup>注 5)</sup>のように 17 のスケールで測定され、それらのスケールは理論・概念で 7 つ (I ~ VII) の領域に分けられている。各スコアは 100 点満点で表されており、50 点を平均としている。数値を比較する際、差が 5 点以上出ると有意性があるとされる<sup>5)</sup>。また、「一貫性」(Consistency) と適合性 (Congruency) の項目については、受検結果自体の妥当性を表す指標で、8 割程度の点数があることが望ましいとされている<sup>8)</sup>。本調査の対象となっているプログラムはいずれも、「一貫性」と「適合性」がすべて 8 割程度であったため、分析するのに妥当な数値であると言える。

### 3.2 分析方法

本稿では紙面の都合上、上記の 17 のスケールの全てを扱うことはできないため、グローバル人材の定義<sup>2)</sup>の中でも、著者らが最も関心を寄せる「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」に関連する「スケール 8」(社会情動的一致)と「スケール 15」(社会文化的オープン性)の 2 つに絞り、プログラム開始前の BEVI の結果「T1」の分析を行うこととした。この「スケール 8」(社会情動的一致)は、7 つの領域のうち「IV 批判的 思考」の領域に入っている。これは、自分だけでなく他者をよく理解し配慮ができる傾向を示す項目である。グローバル人材の育成においては、異文化の人へ配慮ができると同時に、自分自身と自文化への理解が深い学生を育成したいと思っており、その点でこの項目は重要なものの 1 つである。「スケール 15」は、7 つの領域のうち、「VI 他者とのかかわり」の領域に入っている。社会や文化の様々な要素に興味や関心があり、その差異に気づくことができる特質を表すが、グローバル人材には不可欠なものである。

### 3.3 調査対象者

本調査の対象者は、SIU オンライン留学の 2020 年度夏休み参加学生 27 名、2020 年度春休み参加学生 14 名、2021 年度夏休み参加学生 21 名、2021 年度春休み参加学生 7 名、合計 69 名である。

### 3.4 倫理的配慮

オンライン留学参加希望者は、担当教員と個別面談をして、詳細説明に同意した上で参加した。また、個人情報の取り扱い方法に同意した上で、BEVI を受検している。BEVI の数値結果は、受検者には表示されず、教員などの管理者のみが閲覧できるようになっており、また管理者のアカウントにはグループ全体の結果が表示されるだけで、個人は特定されない。

### 4. 分析結果および考察

図 2 は、2020 年度の夏休み参加学生と春休み参加学生がプログラム開始前に受検した BEVI の「スケール 8」と「スケール 15」の 2 つの Aggregate Profile の数値である。縦軸は BEVI の数値(点)を表している。

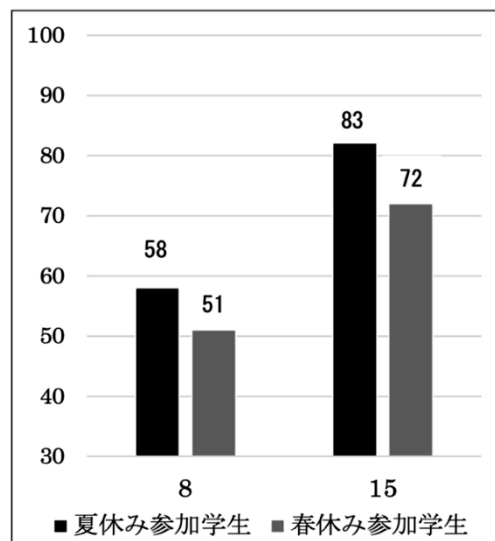


図 2 2020 年度参加学生のスケールの数値

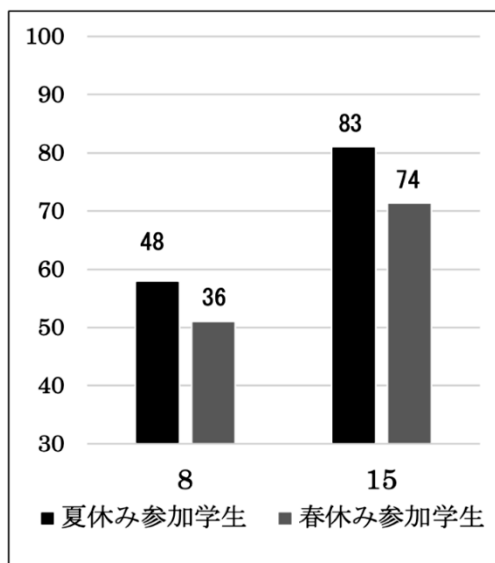


図 3 2021 年度参加学生のスケールの数値



図 3 は、2021 年度の夏休み参加学生と春休み参加学生がプログラム開始前に受検した BEVI の「スケール 8」と「スケール 15」の 2 つの Aggregate Profile の数値である。縦軸は BEVI の数値(点)を表している。

#### 4.1 スケール 8「社会情動的一致」

「スケール 8」は、7つの領域のうち「IV 批判的思考」の領域に入っており、自分だけでなく他者をよく理解し配慮ができる傾向を示す項目である。グローバル人材の育成においては、異文化の人へ配慮をしながら、自分自身と自文化への理解のできる学生を育成したい。その点でこの項目は重要であるが、図 2 を見ると、2020 年度の夏休み参加学生は 58 点、春休みは 51 点で、どちらの参加者も高い数値ではなく、さらに春休み参加学生は夏休み参加学生と比べて有意に低い。図 3 を見ると、2021 年度の夏休み参加学生は 48 点、春休み参加学生は 36 点で、どちらの参加者も 50 点を切っていて低く、さらに春休み参加学生は夏休み参加学生に比べて有意に低い。

2020 年度、2021 年度のいずれも、春休み参加学生は、海外に関心はあるものの、他者に配慮して課題解決に取り組む複雑な思考を積極的に行わない傾向があると考えられる。SIU オンライン留学では、画面上で異文化の学生達とディスカッションをしたりする機会が多いため、「スケール 8」の数値の低い学生達にはハードルが高いと思われる。今後の春休みの SIU オンライン留学プログラムを開発にあたっては、オンライン留学前に、異文化交流をスムーズに取り組めるための学内サポートプログラムを多めに用意するなどの工夫がいと考える。

#### 4.2 スケール 15「社会文化的オープン性」

「スケール 15」は、7つの領域のうち、「VI 他者 とのかかわり」の領域に入っており、社会や文化の様々な要素に興味や関心があつてその差異に気づくことができる特質を表す。これはグローバル人材には不可欠なものであるが、図 2 を見ると、2020 年度の夏休み参加学生は 83 点で、春休み参加学生は 72 点と、夏休み参加学生は春休み参加学生に比べて有意に高く、80 点以上ある。図 3 を見ると、2021 年度の夏休み参加学生は 83 点で、春休み参加学生は 74 点と、こちらも夏休み参加学生は春休み参加学生に比べて有意に高く、80 点以上ある。

2020 年度、2021 年度のいずれも、夏休み参

加学生は元々異文化に強い関心があると考えられるので、SIU のオンラインだけの異文化体験だけでは満足せず、数値を更に伸ばすことは難しいと考えられる。オンライン留学の期間中に、学内の留学生との異文化間協働学習などの学内プログラムを融合させることで、学生達により深い学びの機会を提供する必要がある。

#### 5. 今後の課題

2020 年度と 2021 年度の SIU オンライン留学の夏休み参加学生と春休み参加学生の BEVI の結果から、夏休み参加学生は異文化に関心が高い傾向にあり、春休み参加学生は海外に関心はあるものの、他者理解をしながら課題解決に取り組む複雑な思考は積極的に行わない傾向があることが明らかとなった。2 年分のデータを分析したことで夏休みと春休みのオンライン留学に興味を持って参加する学生の傾向はある程度明らかになった。2022 年度以降の傾向分析を継続するとともに、今回の分析結果をもとにして、学生の傾向にあった効果的な学内プログラムをオンライン留学プログラムに融合させて、より良いグローバル教育プログラムを提供していく。

#### 注

8. Beliefs, Events, and Values Inventory (2018). About the BEVI. Retrieved March 1, 2021, from <https://thebevi.com>
9. アメリカ南イリノイ大学 (Southern Illinois University) は本学の海外学術交流協定校である。プログラムの共同開発には、英語センターの CESL (Center for English as a Second Language) (<https://cesl.siu.edu>) が協力してくれた。なお、CESL の現地での英語プログラムには、コロナ禍以前には毎年本学から学生を複数派遣している。
10. オンライン留学は、バーチャルに海外の学生と繋がって課題解決型のプロジェクト等を行う COIL (Collaborative Online International Learning) とは区別される。本稿では、オンライン留学を、「一定期間オンラインで海外大学の授業を受けたり、海外大学生と交流を行う国際交流プログラム」と定義する。
- 4) BEVI の日本語版は以下のサイトからログインして受検できる。  
<http://jp.thebevi.com/test-admin/>
- 5) 上記「注釈 4」の「BEVI の日本語版 (<http://jp.thebevi.com/test-admin/>)」受検

の際に表示される結果「BEVI のスケールの解説と解釈」の表を元に著者が作成した。

## 引用文献

- 1) 奥山和子 (2017) 「留学経験がもたらす効用としての自己効力感の形成プロセス：質的研究手法を使って」『大学教育研究』 25, pp. 83-101, 神戸大学教育推進機構.
- 2) グローバル人材育成推進会議 (2012) 「グローバル人材育成戦略 (グローバル人材育成推進会議 審議まとめ)」  
<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/1206011matome.pdf>, (最終アクセス日：2021 年 11 月 1 日) .
- 3) 永井敦 (2018) 「BEVI によるショート・ビレッジ型留学プログラムの効果分析—『グローバル人材』は育成できるのか?—」『広島大学留学生センター紀要』 22, pp.38-52, 広島大学留学生センター.
- 4) 大西好宣 (2019) 「短期留学及びその教育効果の研究に関する批判的考察：満足度調査を超えて」『JAILA JOURNAL』 5, pp.51-62, JAILA 事務局.
- 5) 西谷元 (2017). 留学効果の客観的測定・プログラムの質保証-The Beliefs, Events, and Values Inventory (BEVI-j)-. 広島大学高等 教育研究開発センター高等教育研究叢書. 137, 45-70
- 6) 清藤隆春・橋本智 (2021) 「BEVI を用いたオンライン留学の効果測定-コロナ禍でのグローバル人材育成の試み-」徳島大学高等教育研究センター学習支援部門国際教育推進班紀要：12-21 .
- 7) 石井敏ほか (2013) 「異文化コミュニケーションの基礎概念」第 1 章. 石井敏ほか (2013) 『初めて学ぶ異文化コミュニケーション—多文化共生と平和構築へ向けて—』 pp.11-36, 有斐閣.
- 8) 東矢光代・當間千夏 (2019) 「世界の捉え方に見る学習者の特性とクラス・ダイナミクス：BEVI の結果に基づく分析」『言語文化研究紀要：Scripsimus』 28, pp.23-45, 琉球大学法文学部国際言語文化学科欧米系.

# 海外大学との PBL 型国際共修 ー地元企業と連携したグローバル教育実践ー

清藤 隆春

KIYOFUJI, Ryushun  
Research Center for Higher Education  
Tokushima University  
徳島大学高等教育研究センター

齋藤 亨子

SAITO, Yukiko  
Center for Language Studies  
National University of Singapore  
シンガポール国立大学語学教育研究センター

橋本 智

HASHIMOTO, Satoshi  
Research Center for Higher Education  
Tokushima University  
徳島大学高等教育研究センター

要旨：2021 年度前期より、徳島大学高等教育研究センターでは、全学的なグローバル人材育成に着手し、「グローバル・パーソン集中プログラム（GRIP, Global Person Resource Intensive Program）」を開始した。GRIP のプログラムの 1 つとして、シンガポール国立大学の日本語履修学生達と約 1 ヶ月間のオンラインによる PBL 型（問題解決型学習）の国際共修を行ったが、本稿ではこの国際共修プログラムを取り上げ、本学の学生たちが回答した振り返りシートの内容を KJ 法で分析し、プロジェクトの効果検証を試みた。語学面以外でも幅広い側面での成長を学生たちが実感していることが確認でき、グローバル人材としての能力・資質を育む機会として一定の効果があったのではないかと考えられる。

キーワード：グローバル人材育成、国際共修、KJ 法、オンライン

## 1. 研究の背景と目的

徳島大学高等教育研究センターでは、2021 年前期より「グローバル・パーソン集中プログラム（GRIP, Global Person Resource Intensive Program）」<sup>注 1)</sup>を開始し、全学的なグローバル人材育成に着手した。本研究では、2021 年度後期（第 2 期生）GRIP のプログラムの 1 つとして実施したシンガポール国立大学の学生たちとのオンラインによる PBL 型（問題解決型学習）の国際共修<sup>注 2)</sup>を取り上げる。

グローバル人材<sup>1)</sup>の素養でも特に、「コミュニケーション能力」、「協調性」、「積極性」、「多文化（自文化・多文化）に対する理解」を育むことを目指し、GRIP では、多民族国家であるシンガポールの大学であるシンガポール国立大学の協力を得て、国際共修を実施した。

本稿では、まず、研究を行う上で用いた理論的枠組み、プロジェクトの概要説明を行っている。その上で、本学の学生たちが回答した振り返りシートを KJ 法で分析し、プロジェクトの効果検証を試みていく。

学生たちに「深い学び」を提供する枠組みとして、「経験学習モデル」<sup>2)</sup>を用いる。「経験の変容を通じて知識を創造するプロセス」であり、4 つのサイクル、「①具体的に経験する」、「②経験を客観的に振り返る」、「③振り返りからの学びを概念化する」、「④学びを次に活かすように実践する」、を繰り返すことが学びを深めるとされている。このプロジェクトでは、主要な体験の直後に学生たちが振り返りをして、その省察を次につなげる仕組みを設けている。

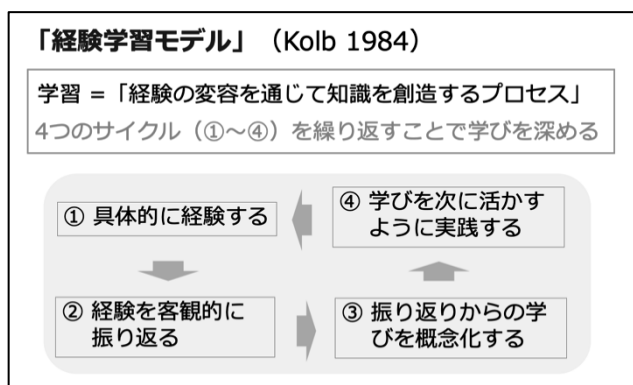


図 1 「経験学習モデル」(著者作成)

## 2. 理論的枠組み

### 2.1 経験学習モデル

## 2.2 異文化接触理論

「異文化接触理論」<sup>3)</sup>によると、国際交流で異文化間の相互理解を促すには、4つの条件、①「共通の目標」、②「協力的な関係性」、③「平等な立場」、④「制度的なサポート（ルール）」、が保証されていることが重要である。今回のプロジェクトでは、これらを踏まえて、ルール作りやチーム編成を行うように努めている。

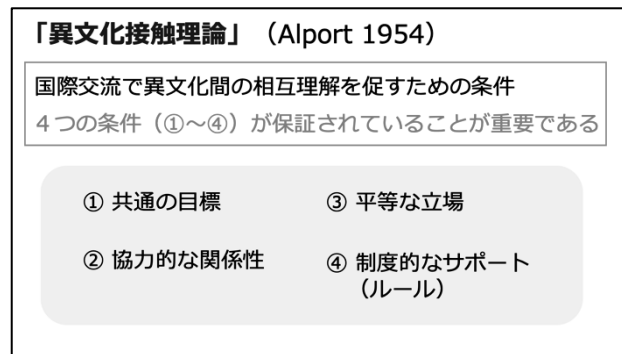


図2 「異文化接触理論」(著者作成)

## 3. 国際共修プロジェクトの概要

徳島大学の GRIP 参加学生(以下、「TU 学生」と)、シンガポール国立大学の日本語履修(中級レベル)学生(以下、「NUS 学生」)が、チームを組んでオンライン上で協働学習をしながら、地元企業の市岡製菓株式会社<sup>注3)</sup>の協力のもと、学生たちがシンガポールで売り出す徳島に因んだ新商品を考案(更に「社会を良くする」という観点も盛り込む)し、最終的に製菓会社の社長や聴衆(両大学の任意の教職員や学生たち)へプレゼンテーションを行う。このプロジェク

トの実施スキームは図3の通りである。

使用言語は、日本語もしくは英語(中国語も可)とし、状況に応じて切り替えながらコミュニケーションを行う。TU 学生は 26 名、NUS 学生は 34 名(合計 60 名)で、混合チーム(1 チーム 6 名、各大学 2～4 名ずつ、計 10 チーム)を組んでいる。

参加者全員での交流の時間としては、下記の通りであり、基本的に NUS の日本語の授業の時間帯である 19:00～20:30(シンガポール時間では 18:00～19:30)に TU 学生がオンラインで参加をするという形を取っている。

表1 国際共修スケジュール

	日程	内容
第1回	9/24	オリエンテーション
第2回	10/1	初顔合わせ・アイスブレイク
第3回	10/2	製菓工場見学・菓子試食
第4回	10/9	社長プレゼン
第5回	10/15	中間発表会
第6回	11/12	最終発表会

10月1日には市岡製菓株式会社の工場見学を行った。工場見学には、TU 学生が参加して、実際の市岡製菓の菓子の作られる工程を見学したり、併設のショップで菓子の包装やどのように売られているかを見学した。また、市岡社長から会社の特徴やこだわりなどについて講

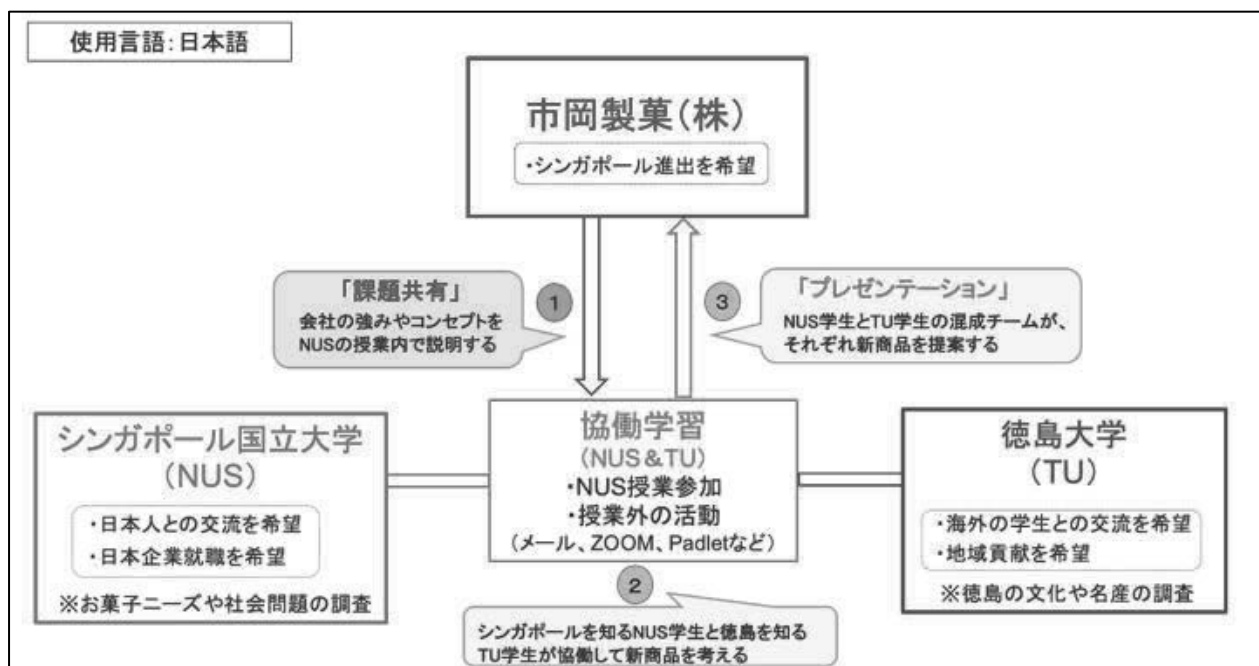


図3 プロジェクトの実施スキーム(著者作成)



義を受けた。この工場見学を今後の新商品開発にいかすために、TU 学生はチームごとに NUS 学生と情報の共有を行っている。また、両大学で菓子を送り合って、学生達が双方の国の菓子の試食をする機会も用意した。



図4 NUS との交流会の様子 (著者撮影)



図5 工場見学の様子 (著者撮影)

学生たちは Zoom 等を用いたオンライン会議や、教員の管理可能な掲示板アプリ Padlet (図 6)、WhatsApp などの SNS を用いた交流を通じて、プロジェクトを進めるようにデザインされている。なお、第 1~6 回の交流会の直後に「振り返りシート」を提出させて、学生の省察の機会を設けている。



図6 Padlet の交流の様子 (著者撮影)

10 月 15 日に中間発表を行って、教員や他のグループから受けたフィードバックをもとに、11 月 12 日の新商品開発のプレゼン大会本番へ向けて学生達はグループごとに作業を行った。中間発表後、各グループのリーダー (TU 学生のみ) がオンラインで集まり、徳島大学の指導教員のもとでそれまでの活動を振り返る機会を提供した。また、学生達は交流会以外に、平均して毎週 3 時間ほどグループごとに会議等を行っていることを確認している。

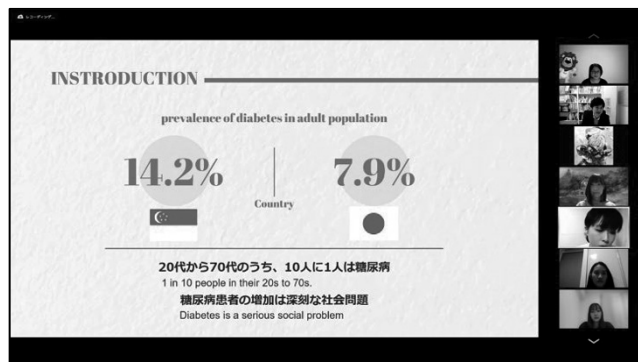


図7 最終プレゼンの様子 (著者撮影)

#### 4. 調査対象者

書面による研究協力への同意を得られた TU 学生 26 名に対して質問紙調査を行った。質問紙の実施は、中間発表後のタイミング (第 3 回交流会 10/15) と最終発表会の後 (第 6 回 11/12) で行い、「自分自身で特に変化を感じた点」について自由に記述 (字数は 50 字以上、上限なし) してもらった。

#### 5. 研究方法

分析には、KJ 法を用いた質的分析を行い、手順は川喜田 (2018)<sup>4)</sup>に従った。具体的には、関連項目を収集した後、同等や類似点を集約してカードに記載して命名した (小ラベル)。その後、意味の近いカードを集めてグループ化してラベルを付け (中ラベル)、さらにその中で意味の近いカードを集めて、グループにラベルをつけた (大ラベル)。最後に、空間配置を行って、各カテゴリー間における相互関係を示し、分析、叙述を行った。

#### 6. 分析結果および考察

調査対象者の回答データから抽出された 71 枚のカードに対して、KJ 法を用いて質的分析をした結果、以下の表 2 のように、3 つの大カテゴリー、9 つの中カテゴリー、および 29 の小カテゴリーが生成された。また、各カテゴリー間における相互関係は図 8 のように示される。



表2 結果図（ラベル一覧）

大ラベル	中ラベル	小ラベル
交流に関する 気づき	自身の積極的な態度	・グループワークでの積極的な発言
		・グループリーダーへの挑戦
		・外国人学生との会話での緊張の軽減
	国際交流や国際共修 に関する気づき	・国際共修の楽しさの気づき
		・国際交流の楽しさの再認識
		・学内の国際交流参加への動機付け
		・国際共修の成功による大きな自信
		・やり遂げた達成感
	相互理解・尊重への姿勢	・相手を尊重しながら意見を言う姿勢
		・相手が不安にならないように配慮した姿勢
	オンライン上での工夫	・雑談を増やして距離を縮める
		・画面共有などをうまく活用する
文化に関する 気づき	異文化に関する関心	・シンガポール文化理解を深めようとする意識
		・シンガポール文化に対する関心の高まり
		・海外文化理解への意識の高まり
	自文化に関する関心	・日本と海外文化の共通点への関心の芽生え
		・自身の文化への関心の高まり
		・外国人へ日本文化を知ってもらいたい欲求の高まり
	社会問題やマーケティング への関心	・文化や社会問題に対する関心の芽生え
		・マーケティングへの関心の芽生え
言語に関する 気づき	多言語使用に関する学び	・メールでの日英に言語の同時使用
		・できるだけ易しい日本語を使おうとする意識の芽生え
		・日本語力の低い学生とのコミュニケーションの仕方の習得
		・日本語が通じない時に英語に切り替える方法の取得
	英語に関する学び	・英語学習の動機付けの高まり
		・英語をツールとして捉える意識の芽生え
		・英語リスニング力の大切さへの気づき
		・英語スピーキング力の大切さへの気づき
		・英語での円滑なコミュニケーション方法の模索

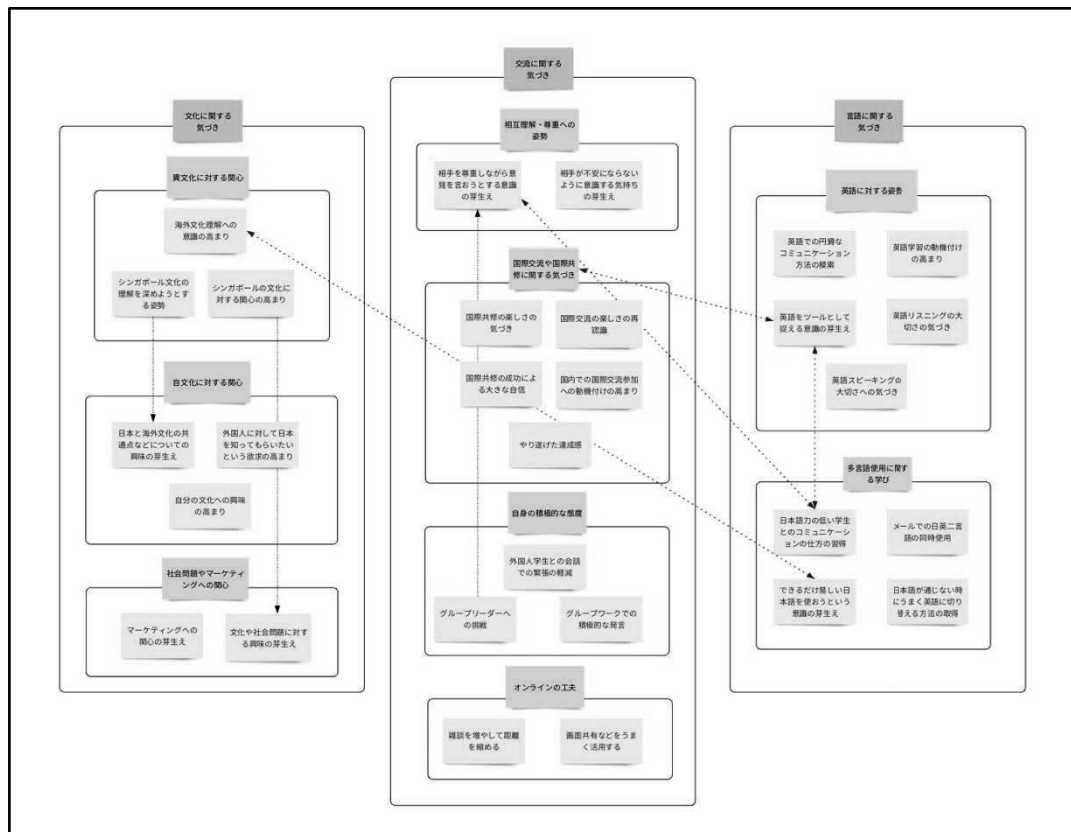


図8 KJ法の結果図

この学生達の成長実感を分析から、以下のことが明らかとなった。なお、記述中における【 】は分析で得られた大カテゴリー、《 》は中カテゴリー、〈 〉は小カテゴリー、「 」は振り返りシートの研究協力者の生のデータである。

## 6.1 【交流に関する気づき】

「異なる文化の人と話すときにあまり緊張しなくなった」や「伝えようとする気持ちがあればなんでも伝わるものだ」と気づき、あまり身構えなくなった」の記述のように、交流がオンラインであっても〈外国人学生との会話での緊張の軽減〉の効果が見られたことが確認できた。今回の交流では英語に苦手意識を持つ学生も多く参加していたため、第1回交流の顔合わせで日本語のみでの交流時間を設けたが、良いアイスブレイクの機会となっていた。その意味でも、国際共修の交流相手を日本語学習者にするのは一定の効果があると考えられる。

「相手の意見を尊重しながら、自分の意見を述べる力が向上したとを感じる」の記述のように、学生達は異文化間での協働学習を通じて、《相互理解・尊重への姿勢》が身につけていることが確認できた。また、「初めは不安でいっぱいでしたが今は達成感でいっぱいです」の記述にあるように、国際共修のプロジェクトで〈やり遂げた達成感〉を得ており、また、「失敗を恐れず、とりあえずやってみることで見えてくるものがあると学んだので、今までのように自信を失って何もしないのではなく、様々なことに挑戦していきたいと思う。」の記述のように、〈国際共修の成功による大きな自信〉を得ていることが確認できた。コロナ禍で海外渡航に制限があったとしても、オンラインであっても1ヶ月におよぶPBL型の国際共修に取り組むことで、学生たちに達成感や自信を得る機会を提供することができたと考えられる。

今回のプロジェクトでは、「初めは、周りが言う意見に頷くことしかできなかったが、徐々に主体的にプロジェクトに関わるようになった。」の記述のように、《自身の積極的な態度》の変化を自覚している学生が極めて多かった。これは、国際交流で異文化間の相互理解を促す「異文化接触理論」の4つの条件のうちの「協力的な立場」「平等な関係性」について、この重要性に参加学生たちにも共有できたためであると考えられる。実際に、「シンガポールの学生が主導でプロジェクトを進めてくれていたが、それではお互いの関係として良くないと感じ、もっと貢献できるようにミーティングでしっかり議論を回したり、意見を言ったりと受動的な参加か

ら、もっと能動的に参加しようと思い毎週取り組むようになった」という記述や、「役割分担などで当てられたらする、という感じのことが多かったけれど、今回のプロジェクトを通して、一人ひとりがチームに貢献することがとても大事だったため、「何かできることはないか」と考えてどんどん動くことが出来るようになった。」の記述からも、その点を理解できる。

オンラインによる交流の制限もあると考えられるが、「チャットや画面共有を有効活用することでオンライン上でもコミュニケーションを上手にとることが出来たので、この力も今後役立てることが出来ると思います」の記述のように、学生たちは《オンラインの工夫》を行いながら前向きにプロジェクトを進めていたことが確認できた。社会のあらゆる現場でオンライン化が進み、コロナ禍後も海外とのオンライン会議も当たり前になる可能性を踏まえると、このようなオンラインでのPBL型の国際共修には教育的な意義があると考えられる。

## 6.2 【言語に関する気づき】

「このプロジェクトに参加する前から、積極的に物事に取り組む姿勢は持っていた。しかし、それは日本語を使う機会に限定され、英語を使う場面になると黙ってしまうことが多かった。しかし、このプロジェクトでの話し合いを通じて、単語を1つでも思い付けばコミュニケーションができる可能性があること、テストのように綺麗な英語を話す必要がないことを学んだ。」の記述にあるように、〈英語をツールとして捉える意識の芽生え〉が生じたことが確認できた。グローバルな場で活動を行う場合、仮に流暢な英語ではなかったとしても英語をツールとして捉えてコミュニケーションを取る意識が重要であると言われるが、この国際共修ではこの点を学ぶ機会として一定の効果があつたと考えられる。

また、「簡単な日本語を使わねばならず、自分の中の日本語の引き出し、説明力が上がったと思う」の記述のように、〈できるだけ易しい日本語を使おうとする意識の芽生え〉が生じていることが確認できた。グローバルな現場では英語が共通の使用言語になることは多いが、外国人との協働は日本の地域社会でも求められており、その際の使用言語は日本語が主である。英語をツールとして使用するのと同じように、日本語も外国人からツールとして用いられることを踏まえると、この〈できるだけ易しい日本語を使おうとする意識の芽生え〉を学生に持たせることは重要であると考えられる。

### 6.3 【文化に関する気づき】

「交流の中で自分があまり徳島のことや日本のことに詳しくない事を感じたので、自文化についても学ぶ必要性を感じました。」の記述のように、《自文化に対する関心》の高まりが確認できた。グローバル人材には、自文化を理解し、尊重する姿勢が求められているが、その力を身に付けさせることは容易ではない。しかし、「今まで私は日本文化、特に地元の文化についてわかっていたつもりでした。しかし、ここで求められるのは徳島の文化がメインであるため日本の文化について知っているつもりでも具体的な地域の文化については近くでも知らないことがあまりにも多いということを知りました。」という記述にもあるように、このプロジェクトでは、TU 学生が徳島の文化を十分に理解していないとプロジェクトが進まないという仕掛けを作っていたが、それが非常に効果的だったと考えられる。

また、「相手の文化や習慣について理解を深めようと質問したり調べたりするようになったと思います。」の記述にあるように、《異文化に対する関心》が高まっていることも分かった。さらに、「自分が今まで知らなかったシンガポールのことを詳しく調べるようになり、文化や社会的な問題についても興味を持つようになった。」の記述にあるように、《文化や社会問題に対する興味の芽生え》が生じたことも確認できた。このプロジェクトに参加をしている時点で参加学生は海外文化に理解を示したり、尊重をする姿勢はある程度持ち得ていると考えられるため、その一歩先の深い理解を促す工夫がデザインする教員側には求められる。生たちに《文化や社会問題に対する興味の芽生え》を持たせることができたのは、新商品の開発のルールに「新商品によって社会がどのように良くなるのかを説明する」ことを加えていたことが効果的だったと考えられる。

### 7. 今後の課題

本プロジェクトを通じて、広義でのコミュニケーション能力や多様性の受容、チームで協働する力、問題解決力など、語学面以外も含めた幅広い側面での成長を学生たちが実感していることが確認できた。グローバル人材としての能力・資質を育む機会として、一定の効果があつたのではないかと考えられるが、今後は、本プロジェクトの改善点についても調査を行って、より良い国際共修プログラムの運営および実施の参考としたい。

### 謝辞

今回の PBL 型の国際共修を実践するにあたり、市岡製菓株式会社の社長はこちらからの申し出に対して快諾してくれただけではなく、TU 学生の工場見学の手配をしてくれたり、TU 学生や NUS 学生が菓子の試食ができるように多くの菓子を提供してくれた。多大な協力をして下さった市岡製菓株式会社の市岡社長をはじめ関係の皆様に、心より感謝いたします。

### 注

11. 徳島大学高等教育研究センターでは、2021 年度から全学的なグローバル人材育成を開始した。自国および他国の文化を尊重し、外国語による高いコミュニケーション能力を持って、多様な人と協働できる力を養うことを目的としている。
12. 本稿では、国際共修を「異文化間の相互理解を促すことを目的に仕掛けられたプロジェクト等の協働活動」（末松 2019；松村 2016）<sup>5) 6)</sup>と定義する。
13. 市岡製菓株式会社 (<http://www.ichioka-seika.co.jp>) は、1973 年に設立された徳島に拠点を置いている。ベトナムにも工場があり、シンガポールでの商品販売の展開を検討しているとのことで、今回の本学からの協力の申し出に快く引き受けてくれた。

### 引用文献

- 1) グローバル人材育成推進会議(2012)「グローバル人材育成戦略（グローバル人材育成推進 会議審議まとめ）」  
[https://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/1206011\\_matome.pdf](https://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/1206011_matome.pdf)(最終アクセス日:2021 年 10 月 30 日)。
- 2) Kolb,D.A.(1984). *Experiential Learning: Experience as the Source of Learning and Development*. FT Press.
- 3) Allport, W.G. (1954). *The nature of prejudice*, Cambridge, MA:Addison-Wesley. (オールポート W.G. 原谷達夫・野村昭共訳(1961).『偏見の心理』培風館.)
- 4) 川喜田二郎 (2018)『発想法 創造性開発のために (改版)』中公新書
- 5) 末松和子ほか(2019)『国際共修:文化的多様を生かした授業実践へのアプローチ』東信堂.
- 6) 松村真宏 (2016)『仕掛学』東洋経済新報社.

# 留学生向けストレス対策セミナー ー徳島大学での取り組みー

井ノ崎 敦子  
INOSAKI Atsuko  
徳島大学  
キャンパスライフ健康支援センター

チャン ホアンナム  
TRAN HoangNam  
徳島大学  
高等教育研究センター

金 成海  
JIN Cheng Hai  
徳島大学  
高等教育研究センター

要旨：2020年からのコロナパンデミックの影響を受けて、日本の大学生は学生生活の縮小を余儀なくされた。中でも留学生は日本人学生以上の学生生活の縮小と多大なストレスを経験した。そこで、筆者らはこれらのストレスへの対処を手助けするため、2021年に留学生を対象としたストレス対策セミナーをシリーズ形式で実施した。これらのセミナーの目的は、コロナ・ストレスに対処するのに役立つ様々な簡単なスキルの習得であった。学生の反応、質疑応答、アンケート結果、一般感情尺度を含むセミナーの記録を分析した結果、セミナーの理解度と満足度が高く、感情スコアもわずかに上昇したことが見出された。これらの結果から、留学生にストレス対策セミナーを提供することは、個別相談支援等を行うことに加えて留学生のレジリエンスを向上させるために効果的な取り組みになる可能性があることが示唆された。

キーワード：留学生、新型コロナパンデミック、オンラインセミナー、ストレス対策、一般感情尺度

## 1. はじめに

2020年2月から始まった新型コロナ・ウィルスの感染拡大は、高等教育環境に大きな変化をもたらした。学生の学生生活は一変し、感染予防のために友人、家族及び教職員との接触が制限され、授業や課外活動等において、他者と同じ空間にいながら様々な体験を共有する機会が著しく減少した。特に留学生は、日本人学生に比べて、もともと慣れない土地や文化の中で見知らぬ人と囲まれている上に、新型コロナ・ウィルスの感染拡大によって、数少ない交流のある人との接触を制限され、生活不安も増大し、新型コロナ・ウィルス感染拡大によるストレスが大きくなっていることが予想される。

2020年11月に徳島大学が実施した調査(第8回大学院生生活実態調査報告書、2021)において、留学生の80%が何らかの心配や不安を抱えていると回答している。また、留学生の70%が「経済状況」についての不安を挙げている。さらに、留学生の約10～20%は、心配・不安について誰にも相談していないと回答しており、留学生の中には、誰にも相談できずに一人で不安なことを抱え込んでいる者が少なからず存在していることが推察される。

そこで、本研究では、2021年度に徳島大学において留学生のコロナ・ストレスへの対処能力とレジリエンスの向上を目的として4回にわたり実施したストレス対策セミナーの効果と意義について

検討することを目的とした。

## 2. 方法

### (1) 調査対象者

2021年5月から2022年1月にかけて実施したストレス対策セミナーに参加した徳島大学在学の留学生のべ35名。

### (2) ストレス対策セミナーの概要

これらのセミナーは、コロナ感染予防のためと、コロナ感染拡大のために日本に入学できず母国で留まっている留学生の参加しやすさを考慮して、Microsoft Teamsを用いたオンライン形式によって実施された。各テーマと内容は次のとおりである。

#### ①第1回「心身の免疫機能の強化」

ストレスは適度に存在することが健康的であり、そうしたストレスにうまく対処するために求められる心身の免疫機能の強化方法について解説した。

#### ②第2回「アサーショントレーニング」

自分自身も相手も尊重した姿勢でのコミュニケーションスタイルである、アサーティブ・コミュニケーションについて、簡単なワークを交えながら解説した。

#### ③第3回「心の健康を保つ人間関係」

心の健康を保つためには、他者との良質な関係をもつことが重要であると伝え、3つのタイプの



良質な関係を解説した。

#### ④第4回「友達をつくるためのコツ」

慣れない環境において新たに友人関係を構築するための心構えやスキルについて解説した。

なお、セミナー講師は日本語を用いていたが、留学生の中には主に使用している言語が英語や中国語である者も存在していたことから、英語と中国語での並行通訳も行った。

#### (3) 分析方法

対象者にセミナーの事前と事後に対象者に回答させたアンケート結果および対象者から寄せられた意見を分析対象とした。

### 3. 結果

1.

#### (1) 参加者

表1に各セミナーの参加人数を示した。表1のどのセミナーにおいても大学院生および研究生の参加者が学部生の参加者よりも多かった。

また、中国人留学生のための中国語通訳も準備していたが、彼らは日本語で聞くことを選んだ。

表1 参加者の特徴

	第1回 (n=8)	第2回 (n=14)	第3回 (n=6)	第4回 (n=7)
学部生	2	2	0	1
院生他	6	12	6	6

#### (2) 満足度・理解度

表2に各セミナーについての対象者の満足度と理解度を示した。

表2 アンケート結果

	第1回 (n=5)	第2回 (n=12)	第3回 (n=3)	第4回 (n=7)
満足度	100%	95%	93.4%	97.1%
理解度	92%	93.4%	93.4%	97.1%

対象者の多くは、満足の理由として、目新しい知識を習得できたことや、興味深く、シンプルな方法で実用的であり、日常生活に役立つ内容である点を挙げていた。また、対象者の中には、お互いのコミュニケーションを改善し、特に目上の人々とのコミュニケーションに自信をつけ、日常のコミュニケーションの困難を解決するのに役立ったと回答した者もいた。

#### (3) 感情測定結果

筆者らは、セミナーの効果を検討するために、セミナーの事前と事後において対象者の感情を測定した。

第3回セミナーでは、一般感情尺度（小川ら、2000）を使用して、イベントの前後の参加者の肯定的な感情を測定しました。対象者の肯定的な感情がセミナー後に高まったが、有意差は見られなかった（T検定、 $p > 0.05$ ）。さらに、対象者の肯定的な感情の平均値は、小川らの研究結果より高いでした（小川の研究では、肯定的な感情=11.34）（1サンプルT検定、テスト値=11、34、 $p < 0.05$ ）。

続く第4回セミナーでは、一般感情尺度（小川ら、2000）の安静状態という下位尺度を使用して、セミナーの前後の対象者の安静状態を測定しました。（表3）。

表3 安静状態

	N	平均値	標準偏差	$\alpha$ 係数
事前	7	20.00	2.646	.857
事後	7	22.43	4.577	.952

セミナーの事前事後を比較すると、事後において、有意差は見られないものの、対象者の安静状態が少し上がりました（ペアサンプルT検定、 $p=.096 > 0.05$ ）。参加者の安静状態の平均値がかなり高い（小川 2000 一般感情尺度の研究では12.39）、統計的に有意差がある。（1サンプルT検定、テスト値=12.39、 $p=0.00 < 0.05$ ）。事前・事後の尺度の信頼性は十分ある（ $\alpha = > 0.8$ ）

#### (4) 参加者の意見

対象者からは「とても興味深い『コツ』を理解できた」、「ストレスを防ぐ方法を学べた」、「日本で友達をつくるさいに考慮すべき文化や考え方についてもっと知りたい」、「コロナ禍でとても有意義セミナーだった」といった声が聞かれた。また、アンケート結果から、対象者の多くがオフラインよりもオンラインを好むことを示した。なお、開催希望時間について尋ねたところ、参加しやすい時間は平日18:00時以降との回答が多く寄せられた。

#### (5) 課題

一人でも多くの留学生が参加しやすくするためにオンライン形式で実施したが、実際の参加は留学生の総数の10%に満たなかった。この結果から、深刻なストレスの問題を抱えて何らかの支援

を要する留学生を漏れなくセミナーに参加させることは困難であると推察される。今後、支援を要する留学生が参加しやすい形態を模索する必要がある。

これまで実施したセミナー同様、今後のセミナーにおいても、留学生に役立つよう、簡単かつ実践的で、だれでも使いやすいストレス解消テクニックやスキルを提示し、留学生のレジリエンス向上を目指すことが重要である。また、今まで試行的に行ってきたセミナーを踏まえて、体系立ててセミナーを開催することも検討する必要がある。

さらには、留学生のストレス免疫の改善によるレジリエンスの変化を的確に捉える測定方法を検討することも、筆者らにとって困難であるが重要な課題である。

#### 4. 終わりに

パンデミック発生してからほぼ2年間、高等教育に影響を与え続けている。

オンライン学習への切り替えやDxに伴い、留学生は自宅で長時間滞在、外出制限、コミュニケーションの不足、社会活動の著しい減少、孤立、生活不安に適応することを余儀なくされた。

このような状況下において、留学生の中には強いストレスや不安を感じる者も存在することが予想される。留学生の潜在的なストレスへの対処を支援するため、2021年に4回のストレス予防セミナーを実施した。本研究において、学生が個別に問題について話し合うカウンセリングサービスに加えて、これらのセミナーは留学生に効果的なコミュニケーションを改善に有効であることがわかった。心と体の免疫力と断定的なコミュニケーションを改善するための実践的なアプローチと実践的な技術を適用することにより、留学生はパンデミックの間にストレスに対処する方法を習得できたと推察される。

今後、大学の国際化に向けて、留学生への支援を強化することが求められている。本研究から、留学生にセミナーを提供することは、個別のカウンセリングやその他の支援活動を提供することに加えて、留学生の長期的なストレスに対する免疫力を改善するための効果的な事業の一つであったと考えられる。

#### 引用文献

- ACQ. (2021). *Causes of Stress in College Students - Q&A With Dr. Traci Lowenthal and Dr. Steve Langerud*. Affordable Colleges.
- Broderick, T. (2021). *The Student's Guide to Managing Stress*. BestColleges.
- <https://www.bestcolleges.com/resources/balancing-stress/>
- Keyserlingk, L. von, Yamaguchi-Pedroza, K., Arum, R., & Eccles, J. S. (2021). Stress of university students before and after campus closure in response to COVID-19. *Journal of Community Psychology*.
- Medlicott, E., Phillips, A., Crane, C., Hinze, V., Taylor, L., Tickell, A., Montero-Marin, J., & Kuyken, W. (2021). The mental health and wellbeing of university students: Acceptability, effectiveness and mechanisms of a mindfulness-based course. *International Journal of Environmental Research and Public Health*, 18(11).
- Rosowsky, D. (2020). *How do we build resilience in universities?*. University Business.
- Sovic, S. (2008). Coping with stress: the perspective of international students. *Art, Design & Communication in Higher Education*, 6(3), 145-158.
- USC Student Health. (2021). Workshops and Programs. University of Southern California. <https://studenthealth.usc.edu/workshops-and-programs/>
- 昱龍陳, 好平島本, 隆男坂東, & 裕睦土屋 (2021). 在日留学生のライフスキル獲得の実態調査. *体育学研究*, 66(0), 691-701.
- 徳島大学 (2021) 第8回大学院生生活実態調査報告書. 70-72.
- 近藤 佐知彦 (2020). 新型ウィルス禍中においての留学生をはじめとする外国人ケアについて 2020. 留学生教育学会 (JAISE).
- 西浦 太郎 (2021). 危機状況・パンデミック下での留学生とのカウンセリング・コミュニケーションに関する. 甲南大学学生相談室紀要, 28, 49-61.
- 小川 時洋、門地里絵、菊谷麻美、鈴木直人 (2000). 一般感情尺度の作成. *心理学研究*, 71, 241-246.
- 丹野 健一郎 (2020). 外国人留学生に与える新型コロナウイルスの影響. 第一工業大学研究報告 第32号 (2020) pp. 128-133

# Recruiting International Students and Internationalization Policies of Bulgarian Universities

## ブルガリアの大学での留学生のリクルートと国際化政策

チャン ホアンナム

TRAN Hoang Nam

Research Center for Higher Education –

Tokushima University

徳島大学高等教育研究センター国際教育推進班

マリノヴァ カーテヤ

MARINOVA Katya

Center for Japanese Language and Culture -

Veliko Tarnovo University

ヴェリコ・タルノヴォ大学

要旨：ブルガリアの高等教育は、EU への統合と教育サービスの世界市場に関連するいくつかの大きな課題に直面している。本稿は、ブルガリアの高等教育機関（大学）の国際化の戦略的計画から見た、留学生を引き付ける問題を探索することを目的としている。ブルガリアでの国際化政策の文献レビューを行った。ブルガリアの大学にとって留学生リクルートは重要であると考えられているようですが、この問題に十分に対処するための明確な具体的な対策は国レベルではない。機関レベルでは、留学生のリクルートの目標と目標は、各教育機関の計画では十分に具体的ではないようです。多くの大学にとって、留学生のリクルートは戦略的手段と見なすことができますが、優先度の低いにする大学もある。ブルガリアの高等教育機関のほとんどはすでに国際化の戦略的計画を策定しているが、これらの計画の実現可能性は疑問視されているようです。

キーワード：ブルガリア、高等教育機関、国際化、留学生リクルート、戦略計画

**Abstract.** Bulgarian higher education today is facing some major challenges related to the integration to EU and global market for educational services. This paper is aiming to explore the issue of attracting international students in the context of internationalization of higher education in Bulgaria as seen from strategic plans for internationalization of Bulgarian HEIs. We conducted a literature review of strategic planning documents for internationalization of selected HEIs in Bulgaria. We found that recruiting international students seems to be considered an important for Bulgarian HEIs, however, there is no clear specific measures at national level to sufficiently address this issue. At institutional level, the goals and target of recruiting international students seem not specific enough in the plan of each institution. For many HEIs, recruiting international students could be considered as a strategic measure, while for other HEIs it could be a low priority issue. Although most of the HEIs in Bulgaria already develop strategic plan for internationalization, the feasibility of these plans seems to be questioning.

## Introduction

Bulgaria locates in the Balkan Peninsula with about 7 million population with various ethnic groups and diverse cultures. Bulgaria was a socialist country during the cold war. After 1989, Bulgaria transitioned into a democracy with market economy and became a full EU member in 2007. Although enjoying EU integration, the country suffers from severe demographic crisis, massive emigration, and low birth rate, which may hamper the country's prospective economic development (Manolov, 2021). In fact, Bulgaria has one of the lowest GDP per capita among EU members nowadays. Bulgarian higher education today is facing some major challenges related to the integration to EU and global market for educational services (Andonova, 2008). The Bulgarian higher education institutions (HEIs) have to face challenging factors such as reduced number of future students, disbalanced labor market, underfunding of higher

education and science, decreased interest in the Bulgarian higher education, lack of well-trained specialists in priority areas, deficit of academic staff, and lack of interest among young people to pursue academic careers (MES, 2014).

Tokushima University (TU) has academic exchange agreement with 98 universities worldwide, including 16 universities in Europe (figure of May 2021). Expanding and strengthening academic cooperation with universities in Europe could be a potential direction for academic internationalization of TU. After the outbreak of Covid-19 pandemic, in an effort to set up new possibilities for international exchange, some initial online interactions between staff and students of TU and Veliko Tarnovo University (VTU) have been successfully carried out, opening a potential academic exchange and cooperation. As a result, both universities signed an agreement for academic exchange and cooperation in December 2021 (Tran & Marinova, 2021). This cooperation is expected to be implemented

as a university-wide level, including exchange of students and scholars, short-term study visits, joint research, and education collaboration. As internationalization of higher education is one of the most important modern trends in economic development and academic transformation, we consider working on joint research about internationalization process of HEIs across different countries including Bulgaria and Japan, which could be a starting point for implementing the academic cooperation agreement between two universities.

This paper is aiming to explore the issue of attracting international students in the context of internationalization of higher education in Bulgaria as seen from development plans of Bulgarian HEIs in Bulgaria and implications for internationalization possibilities in the future.

## Method

By collecting related literature, mainly from Bulgarian sources, we conducted a literature review of data from research papers, reports, publications, and internet articles related to internationalization of higher education in Bulgaria, plans and reports of activities from the home page of Bulgarian HEIs were being reviewed. Table 1 lists the Strategic documents and plans for internationalization of selected HEIs that we had a look at.

*Table 1. List of strategic documents on for internationalization reviewed by the authors*

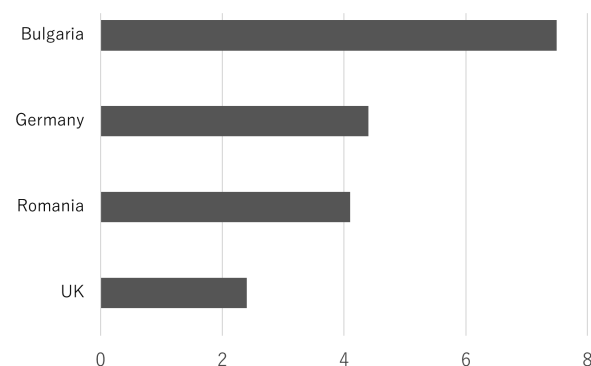
<i>Title</i>	<i>Period</i>	<i>Institution</i>
Strategy for development of higher education in the Republic of Bulgaria	2014-2020	Ministry of Education and Science
Strategy for development of higher education in the Republic of Bulgaria	2021–2030	Ministry of Education and Science
Strategy for Internationalization	2020-2023	Veliko Tarnovo University
Strategy for Internationalization	2020-2030	Sofia University "Kliment Ohridski"
Strategy for internationalization	2021-2027	Technical University - Varna
Strategy for internationalization	2015-2020	College for management - Varna
Strategy for internationalization	2019-2024	Medical University "Dr Paraskev Stoyanov" - Varna
Strategy for internationalization	2020-2030	Technical University - Gabrovo
Strategy for internationalization		Transport University "Todor

		Kableshekov" - Sofia
Strategy for internationalization	2021-2027	Economic Academy DA Tzenov - Svishtov
Strategy for internationalization	2021-2025	Higher Airforce School "Georgi Benkovski" - Dolna Mitropoliya

## Results

### *Situation of Bulgarian Higher Education*

Higher education system in Bulgaria includes 51 HEIs, including 37 public and 14 private HEIs. The total capacity of Bulgarian HEIs is relatively high per population compared to other EU countries (Figure 1). This high capacity may influence the recruitment process and affects quality of education. In 1989, the admission capacity was less than 30,000 in all universities in Bulgaria, but in 2017, this capacity was increased to more than 74,000. While in the 1990s there were 3.5 candidate students competing for 1 admission slot, today there are 2 admission slots for 1 high school graduate. For compensating the capacity of admission, the HEIs should consider recruiting more international students, or to lower examination threshold of local students, which may downgrade the quality of education (Zhelev & Peneva, 2018).



*Figure 1. Number of HEIs per 10,000 population, based on data from (MES, 2021)*

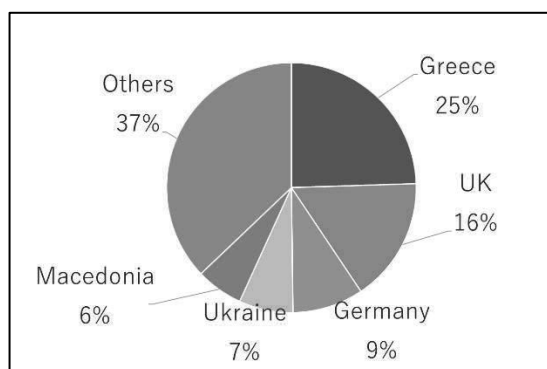
Bulgarian HEIs have problems such as low quality of the education and discrepancy in the training and the needs of the labor market, growing trend of study abroad and competition in the Europe, poor recognition of universities as a means of career development, lack of promotion of research, inadequate internal and external academic mobility, worsening infrastructure. To overcome these obstacles, amendments to the Higher Education Act (*Higher Education Act*, 1995), Strategies for Development of Higher Education 2014-2020 (MES, 2014) and 2021-2031 (MES, 2021) aims to optimize the HEIs network and achieve institutional accountability (Petrov, 2021). The Higher Education Act (*Higher Education Act*, 1995) requires adoption of



European Credit Transfer System by HEIs for better academic harmonization and student mobility (Zhelev & Peneva, 2018). The introduced Rating System of HEIs in Bulgaria (RSVU) in 2021 notices an increase in the number of students, including international students, as well as a continuing trend for increasing the number of publications. Although spread of COVID-19, a significant increase in the income of graduates in vocational training, health, and education sectors. The number of students in higher education in 2021 has increased by more than 4,000 compared to the previous year. In 2021, Sofia University has the highest student number at 22,250, while 12 universities has less than 1000 students each (Osis, 2021). The three most popular professional fields in 2021 are economics with 29,321 active students, pedagogy (16,719) and medicine (13,186).

### ***Situation of international students in Bulgaria***

In the 2020/2021 academic year, 211,800 students are enrolled in bachelor's and master's degrees in higher education in Bulgaria, including 12.3% are enrolled in private HEIs, and 16,700 (7.9%) are international students (Radio Bulgaria, 2021), which is 2.4% more than the previous academic year and 29.1% more than the academic year 2016/2017. The largest number of international students is from Greece (24.5%), followed by from UK (16.1%), Germany (9.2%), Ukraine (7%), and Macedonia (6.1%). The most preferred specialties for them are the fields of healthcare, as 62.1% of them preferred such (Radio Bulgaria, 2021).



*Figure 2. International students by country in 2020/2021 academic year*

The share of international students in Bulgaria is increasing from about 4% of the number of current students in 2013 to over 8% in 2021. Most international students' study in the fields of Medicine (58%), Dentistry (43%) and Veterinary Medicine (31%). International students exceed 10% in the fields of Pharmacy (12%), Transport, Shipping and Aviation (12%) and Music and Dance (12%) (Osis, 2021).

Table 2 shows the transition of number of international students enrolled in Bulgarian HEIs. Notably, number

of international students from Asian countries such as Japan and China are almost in an insignificant number, although this number somehow is gradually increasing.

*Table 2. Transition of number of international students enrolled 2015–2020 (Source: VTU)*

Year / Degree		All countries	Japanese	Chinese
2015/16	BS*	4,489	5	10
	MS*	7,288	14	9
2016/17	BS	4,477	9	33
	MS	8,824	12	18
2017/18	BS	4,675	5	57
	MS	9,993	13	20
2018/19	BS	5,074	4	81
	MS	10,943	18	38
2019/20	BS	5,416	3	131
	MS	11,608	37	27
2020/21	BS	5,488	3	114
	MS	12,025	36	51

\*BS: Bachelor degree, MS: Master degree

The impact of COVID-19 and online transformation was shown by the results of a survey among nearly 25,000 students, conducted for the purposes of the Rating System of HEIs in Bulgaria in period April-June 2020. During the COVID-19 pandemic, in the spring of 2020, 95% of the students in Bulgarian HEIs studied in specialties that switched to online education, and over two thirds of them remained satisfied with the successful completion of the school year. Dissatisfaction with various aspects of online learning is expressed between 14 ~21% of students participating in this form of learning. The most significant challenge in online training is the creation of appropriate conditions for teamwork. (Osis, 2020b)

### ***Internationalization of Bulgarian HE***

Internationalization of higher education is one of the most important modern trends in economic development. Cooperation between universities is related to the organization of exchange of programs for students and teachers, special programs for international students, development of research projects. One of the most common forms of internationalization of higher education is student mobility. Mobility itself is stimulated through various programs (international, national, and regional). This leads to the need to conclude bilateral and multilateral agreements in the field of education with different countries. One of the most widely used European academic exchange programs is Erasmus, which has now grown into the Erasmus + program. It was launched in 1987, with the main aim of helping to create a common European market. The program already allows for the expansion of exchanges with countries outside the European Union.

The 1999 Bologna Declaration (Bologna, 1999) was the starting point of the EU internationalization of

higher education, the process aiming at comparability of higher education systems. This declaration set out the principles of a three-level structure of higher education. A European system for the portability of educational credits has been introduced and funds have been invested to promote student and teacher mobility. Measures have been taken to improve internal systems for the recognition of academic degrees and qualifications and to strengthen cooperation in the field of quality assessment. One of the basic principles adopted by the European Parliament is the establishment of the right to equal education and training throughout the EU. Joint programs with foreign universities in Bulgaria seem to gain popularity. A HE degree from a foreign HEI can be obtained in Bulgaria in 88 joint programs, as 23 Bulgarian universities offer joint programs in 25 professional fields. Nearly 3,400 students and 28 Ph.D. students are studying in joint programs with a foreign university in the spring of 2020. (Osis, 2020a)

Bulgarian higher education today is facing some major challenges related to integrating to the EU and global market for higher education. Regarding university ranking, Bulgarian HEIs are still left behind in the international higher education arena. There are no Bulgarian universities present in the top 500 most prestigious universities. Although there is a tendency of increasing the number of visiting students under the Erasmus program, the presence of Bulgarian universities in the European network of universities is insignificant. Except the five Bulgarian universities participate in one of the consortiums of "European universities", the low participation of other universities shows that Bulgarian higher education is still absent from European trends (Petrov, 2021).

In the Strategy for development of higher education in the Republic of Bulgaria for the periods 2014–2020 (MES, 2014), there was no clear goal set out for internationalization of HE. However, in the Strategy for development of higher education in the Republic of Bulgaria and 2021–2030 (MES, 2021), internationalization of HE was set up among priority areas and goals for HE. In the Goal 4. Internationalization of HE and inclusion in international educational and scientific networks, specific targets and outcome indicators were set out as below: (1) At least 50% of the Bulgarian HEIs included in networks of European universities; (2) Increased share of students studying in joint educational programs between Bulgarian and foreign universities, as well as in specialties and programs in a foreign language; (3) Increased number of international students, including from Bulgarian communities abroad, and teachers in Bulgarian universities; (4) Increased number of mobilities by Bulgarian students and lecturers in foreign universities and colleges; (5) Increased number of textbooks, teaching aids and monographs in foreign languages.

### *Strategy for Internationalization of HEIs*

Most of the Bulgarian HEIs have already developed its own strategic plan for internationalization. In Table 1 we showed some the plans collected. Most of the HEIs' strategic internationalization plan have prepared in a format similar to the national strategy, which consist of background, situation, SWOT analysis, priority areas, goals, targets and indicators. Here we will look at some of the strategies for making sure the goals and specific activities related to international students are in place. As a common feature, all of these HEIs have already joined Erasmus + programs, which allows for student mobility in academic institutions-partners of the Universities within EU. Partnership with universities provides an opportunity to implement a number of activities such as: sharing experience for curricula, programs for different disciplines; development of joint research projects, educational and scientific literature; participation in the scientific conferences; giving lectures and training; participation of lecturers, doctoral students and students in international forums; annual exchange of students, doctoral students and lecturers in international practices etc.

#### *Technical University Varna*

Technical University Varna (TU-Varna) is a major center for science and technology education. In its strategy for internationalization 2021-2017 (TU Varna, 2021), the Goal 2 for Internationalization of the academic community and curricula set up the targets related to accepting international students. Target 1 was to increase the number of foreign students at TU-Varna to 10% of the total number students by optimizing the marketing strategy and online presence of TUV; and Target 3 is to increase the number of countries from which foreign students come to TU-Varna to a minimum of 10 by improving the quality of teaching, developing new educational markets and the creation of new academic partnerships. In its SWOT analysis, it also specified several weaknesses related to accepting international students: limited region of origin of available international students, lack of scholarships, unbuilt culture of communication in a multilingual and multicultural environment, and limited use of new technologies in attracting international students. It identified the following as threats to the internationalization process: Increase investment in attracting students nationally and internationally competitors, new emerging competitors in the market of international students, other competitors to improve their positions on the national and international market, complex procedure and high costs of issuing a type D visa for training in Bulgaria, a lack of a unified national advertising strategy for the promotion of higher education in Bulgaria abroad, unrecognizability of Bulgaria as an educational destination abroad, lack of international traditions of Bulgarian higher education, relatively difficult procedure for admission of

international students in Bulgaria. Moreover, this strategic plan also assigned responsibilities to TU-Varna's departments as shown in Table 3.

Table 3. Plan of activities related to international students (Source: TUV, 2021)

<i>Activity</i>	<i>Department in charge</i>
<i>Internationalization of the student community</i>	
Increasing the number of international students enrolled for full course of study at TU-Varna	Department of International Education program
Increasing the number of exchange students from partner universities at TU-Varna	International Cooperation Department
Creating a network of students and alumni as recruiting ambassadors' international students.	Department of International Education program
Activating the representation of the university in social networks to attract the interest of international students and their parents.	Department of International Education program
Activities related to the adaptation and integration of international students at TU-Varna	International Affairs and International Students Directorate
<i>Institutional commitment to internationalization</i>	
Create a program for relatively modest scholarships for international students.	Business Council

#### *Higher Airforce School "Georgi Benkovski"*

Higher Airforce School "Georgi Benkovski" (HAS) is a specialized state higher military school, providing training for the acquisition of various degrees of higher education in accredited military and civilian specialties for the needs of the Airforce, Navy etc. The main goal of internationalization for the period 2021 - 2025 is "to turn it into an attractive educational and research center for international students, teachers and researchers, which develops professional competencies and personal qualities and develops research and innovation" (HAS, 2021). When the SWOT analysis and plan of activities looks similar to the plan of TU-Varna, this plan did not specify specific indicators for numbers of international or scholars to be admitted or exchanged.

#### *Todor Kableshkov Transport University*

Todor Kableshkov Transport University (TKTU) is a state university with 96 years of tradition in transport education, the largest educational and research transport center in the country (Todorova et al., 2018). TKTU is a partner of over 55 foreign universities, with

which we have agreements for cooperation in education and research, exchange of teachers and students, for student internships, for various scientific events and more. However, the plan for internationalization of TKTU does not specify specific goals and target indicators regarding international and researchers.

#### *Economic Academy DA Tzenov*

Economic Academy DA Tzenov has a strategy that clearly specify the current problems such as having small number of foreign students and doctoral students with full and partial term of study, low mobility of students and staff and lack of scholarship for full term international students, low interest of undergraduate and graduate students in the fields of economics and business, weak interest of agents and intermediaries to attract international student to Bulgaria, due to relatively low annual tuition fees, lack of job positions for foreigners in Svishtov, lack of active national policy and strategy for attracting foreign students to Bulgaria etc.

#### *Medical University Varna*

Medical University Varna is a major institution for medical education in eastern Bulgaria. The strategic plan for internationalization 2019-2024 (MU Varna, 2019) has specified goals and specific activities for achieving the goals. Although this plan has emphasized strengthening collaboration with foreign institutions and increasing mobility, it has not mentioned about attracting international students as a measure or objective for internationalization.

#### *Technical University Gabrovo*

At Technical University Gabrovo (TU-Gabrovo), the strategy for internationalization 2020-2030 put international student issues into the Goal 2.4. Attracting more foreign students at TUG-Gabrovo for training and internships; and 3.2. Attracting foreign researchers to work in scientific infrastructure of TU-Gabrovo (TU Gabrovo, 2020).

#### *Sofia University "Kliment Ohridski"*

Sofia University "Kliment Ohridski" (SU) is the top and biggest HEI in Bulgaria, having 10% national share of students and over 30% of doctoral students. Strategy for Internationalization 2020-2030 said "The strategic goal is the development of SU as an internationally recognized and recognized research university with a prestigious place in international rankings, an attractive place for foreign professors, researchers and students". Some of the specific goals are directly addressing international students and researchers, such as "3.3. Attracting more international students for full or part-time study", "2.4 Attracting more foreign researchers and lecturers to work at SU and for short-term visits", the plan seems lack of specific activities, responsibility and targets for implementation. Nevertheless, taking the huge scale and complicatedness of SU, it may need



an independent analysis outside the scope of this paper (SU, 2021).

### ***Strategy for Internationalization of VTU***

Similar to the other HEIs, the VTU also approved its Internationalization Strategic Plan for the period 2020-2023 (VTU, 2020). According to this document, one of the visions of the VTU is to achieve a “high degree of internationalization of the academic community and the educational content”. In the Strategic Objective 1: International mobility of students, academic and non-academic staff, the 4<sup>th</sup> task is clearly mentioned about the importance of attracting foreign students, as it said “Attracting students from foreign countries to complete a full course of study is an important aspect of the internationalization of higher education. Foreign students in the respective countries should be attracted by authorized representatives of VTU, who provide extensive information about the offered educational programs”. In the Strategic Objective 4: Campus Internationalization and institutional capacity, several tasks to serve foreign students were specified such as the 3<sup>rd</sup> task “Improving and increasing the number of specialties in which foreign students’ study”, and the 9<sup>th</sup> task “Providing opportunities for internships for foreign students in the Erasmus office, as well as in other units of VTU”.



*Figure 3. Japan's Culture Festival 2019 at VTU*

For international student exchange, the VTU is heavily put emphasis on the collaboration within the Erasmus framework for integrating into the European Higher Education Area. Table 4 shows specific activities specified in the Internationalization Strategic Plan for the period 2020-2023 of VTU, which mainly aims to receive short-term exchange students from Erasmus program.

*Table 4. Activities of VTU for promoting short-term inbound student mobility*

#	Tasks
1	Increasing the number of foreign students under the Erasmus program
2	Validation and promotion of the mentor system at the VTU for foreign students
3	Providing more opportunities for incoming

	students to conduct internships at VTU, such as: Foreign Language Centers, Department of Foreign Language Learning, Erasmus Office, Distance Learning Center, etc.
4	Creating social networks of the foreign students of Erasmus at VTU.
5	Provide better conditions for accommodation and training of Erasmus foreign students and increase the number of students in bilateral exchange cooperation.
6	Organizing short-term art workshops for foreign students. Inviting of foreign lecturers in order to conduct such at VTU

Although VTU has experienced collaboration with countries outside Europe, including Japan, China, Korea and so forth, the actual number of students from these countries are still insignificant (Table 2). In case of collaboration with Japan, the Center for Japanese Language and Culture has been active since 1993 and contributes to promoting exchange activities with Japan (Tran & Marinova, 2021). Figure 3 shows a scene of the Japan's Culture Festival organized in 2019, prior to the COVID-19 pandemic outbreak, which is a regular event. However, the VTU's Strategic Plan is not specified any specific actions for increasing inbound student mobility or collaboration with HEIs from outside Europe.

### **Conclusion**

From the strategic plans for internationalizations of various Bulgarian HEIs as shown above, it seems that some of the HEIs such as the TU-Varna has developed very specific implementation plan with clear objectives and target indicators with regards to the issue of attracting international students and researchers. The plan of VTU set up some specific tasks to promote internationalization, however it lacked specific contents to address collaboration with countries outside Europe. The plans of other HEIs seems comprehensive and broad but may not specific enough for implementation.

With the rapid development of technology and increasing demand for more qualified staff in the labor market, the last decades, there was a trend of massification of higher education, which in many countries, including Bulgaria, has led to an increase in the number of students. (MES, 2014). In future, decreasing population pose the need to admit more international students to compensate for high capacity of Bulgarian HEIs. Looking for effective strategies to attract students from Asian countries and other parts of the world could be an alternative but challenge for Bulgarian HEIs in the future.

The internationalization of universities must address the quality, visibility, and mobility. The establishment of the European educational space, which will enable

more students to come to Bulgaria, is of key importance for Bulgarian foreign policy. In practice, international students come to Bulgaria are mostly from EU or other European countries, and mostly under short-term exchange scheme. From our review, it could be concluded that although attracting and accepting international students seems to be an important for Bulgarian HEIs, however, there is no clear strategy and specific measures at national level to sufficiently address this issue. At institutional level, the goals and target of recruiting international students seem not specific enough in the plan of each institution. For many HEIs, recruiting international students could be considered as a strategic measure, for other HEIs it could be a low priority issue. Although most of the HEIs in Bulgaria already develop strategic plan for internationalization, feasibility of these plans seems to be questioning. It may need further research to look at the implementation of internationalization plans of HEIs.

## References

- Andonova, Y. (2008). Issues and Challenges of Bulgaria's Integration into the European Union. *Hermès, La Revue*, 51, 113–118. <https://www.cairn-int.info/journal-hermes-la-revue-2008-2-page-113.htm>
- Bologna. (1999). *Bologna Declaration on the creation of a pan-European higher education area*. <https://accrreditation.org/explore-accrreditation/accords/bologna-declaration-1999>
- HAS. (2021). *Higher Airforce School "Georgi Benkovski": Strategy for Internationalization 2021-2025*. *Higher Education Act*. (1995). <https://lex.bg/laws/ldoc/2133647361>
- Manolov, R. (2021). *Can the European Green Deal solve Bulgaria's demographic crisis?* EURACTIV Bulgaria. <https://www.euractiv.com/section/climate-environment/news/can-the-european-green-deal-solve-bulgarias-demographic-crisis/>
- MES. (2014). *Strategy for development of higher education in the Republic of Bulgaria for the periods 2014 - 2020*. <https://www.mon.bg/en/143>
- MES. (2021). *Strategy for development of higher education in the Republic of Bulgaria and 2021 – 2030*. <https://www.mon.bg/bg/143>
- MU Varna. (2019). *Medical University Varna: Strategy for Internationalization 2019-2024*. <https://www.mu-varna.bg/BG/InternationalActivity/Pages/Дейности.aspx>
- Osis. (2020a). *Joint programs with foreign universities in Bulgaria*. <https://osis.bg/?p=3628>
- Osis. (2020b). *Opinion of students about online training amidst COVID-19 in spring 2020*. Osis. <https://osis.bg/?p=3637>
- Osis. (2021). *More students and scientific publications, but also more unemployed graduates*. Osis. <https://osis.bg/?p=3980>
- Petrov, P. (2021). Internationalization of Universities in the Context of Bulgarian Foreign Policy. *Educational Alternatives*, 19(1), 313–320. [www.scientific-publications.net](http://www.scientific-publications.net)
- Radio Bulgaria. (2021). *Most foreign students in Bulgaria choose healthcare*. Radio Bulgaria. <https://bnr.bg/radiobulgaria/post/101459461/povec-heto-chujdestranni-studenti-v-balgaria-izbirat-zdraveopazvaneto>
- SU. (2021). *Sofia University "Kliment Ohridski": Strategy for Internationalization 2020-2030*. <https://www.uni-sofia.bg/index.php/bul/content/download/228010/1522817/version/2/file/Strategy+Internationalization+2020-2030.pdf>
- Todorova, D., Kolev, P., & Gergova, N. (2018). *Internationalization of HE: development through cooperation in training future staff for the transport system*. Mechanics Transport Communciation. <https://mtc-aj.com/article.1596.htm>
- Tran, H. N., & Marinova, K. (2021). Experiences of Veliko Tarnovo University in Academic Exchange and Cooperation with Japan. *Research Center for Higher Education Yearbook*, 2020, 1–6. <https://repo.lib.tokushima-u.ac.jp/115853>
- TU Gabrovo. (2020). *Technical University Gabrovo: Strategy for Internationalization 2020-2030*. <https://www.tugab.bg/mezhdunarodno-satrudnichestvo/strategiya-za-internatzionalizatziya>
- TU Varna. (2021). *Technical University Varna: Strategy for Internationalization 2021-2027*. <https://www1.tu-varna.bg/tu-varna/>
- VTU. (2020). *Veliko Tarnovo University: Strategy for Internationalization 2020-2023*. 1–7.
- Zhelev, P., & Peneva, M. (2018). Challenges to Internationalisation through Foreign Students' Attraction – A Case Study of A Bulgarian Public University. *Conference Paper*, 24–36. [https://www.researchgate.net/publication/344689430\\_Challenges\\_to\\_Internationalisation\\_through\\_Foreign\\_Students'\\_Attraction\\_-\\_A\\_Case\\_Study\\_of\\_A\\_Bulgarian\\_Public\\_University](https://www.researchgate.net/publication/344689430_Challenges_to_Internationalisation_through_Foreign_Students'_Attraction_-_A_Case_Study_of_A_Bulgarian_Public_University)

# Campus's Images: Implications from a Photo Exhibition

## キャンパスのイメージ：写真展の結果と今後の展望

チャン ホアンナム\*  
TRAN, Hoang Nam

清藤 隆春\*  
KIYOFUJI, Ryushun

坂田 浩\*  
SAKATA, Hiroshi

橋本 智\*  
HASHIMOTO, Satoshi

金 成海\*  
JIN, Cheng-Hai

\*Research Center for Higher Education, Tokushima University  
徳島大学高等教育研究センター

要旨：本稿は、パンデミックが発生してからほぼ2年後の2021年12月から2022年1月に徳島大学で開催された写真コンテスト兼展示会の結果と展望を示しています。このコンテスト兼展示会は、徳島大学の学生とスタッフ全員に、キャンパスライフの思い出に残る体験と魅力を伝える機会として開かれました。写真の内容、説明テキスト、フィードバックフォームを分析しました。その結果、写真は大学の学生やスタッフの自己表現の潜在的なツールとなり、写真展はデジタルトランスフォーメーションの時代に大学のイメージを広げるための効果的なアプローチとして使用できることが実証されました。

キーワード：展示会、写真コンテスト、留学生、写真要素分析、感情分析

**Abstract.** This paper shows the results and implications of a photo contest cum exhibition conducted at Tokushima University during the period from December 2021 to January 2022, nearly two years into the pandemic. This contest cum exhibition was open to all students and staff at Tokushima University as an opportunity to convey their memorable experience and attractiveness of the campus life. We analyzed the photos' content, description texts, and feedback forms. The results demonstrated that photography could be a potential tool for self-expression of university's students and staff, and photo exhibition could be used as an effective approach to broadening the university's image during the era of digital transformation.

Keywords: exhibition, international student, photo contest, photo element analysis, sentiment analysis

### Introduction

COVID-19 pandemic has made a serious impact on the higher education sector in Japan (Murata, 2021), especially on international students' academic life (Tanno, 2020). The impact of the pandemic was clearly observed during the first year after the outbreak, as the campus life had to undergo changes due to lockdown, restricted communication and limited social activities. These circumstances contributed to acceleration of ICT and digital transformation of higher education (Kano, 2020). At Tokushima University (hereafter, TU), like the other higher academic institutions, almost every kind of interactions including extracurricular activities and international exchange activities were cancelled. In 2020, a photo contest cum exhibition was held with the aim to encourage international students and foreign researchers to use photography to show what they have been experiencing during the COVID-19 pandemic and how they have been coping with the restrictions of daily life and campus life. The selected photos were being displayed at exhibition in December 2020. We already reported results of qualitative analysis of the text data

under four major categories including restriction, enjoyment, self-confidence, motivation (Tran, 2020), and results of data analysis using sentiment analysis approach, which clarified the sentiment of underlying messages by the international students who participated in the photo contest (Tran, 2021).

After the first event in 2020, we conducted the second photo contest cum exhibition "My Tokushima Campus Life 2021" during the period from December 2021 to January 2022, nearly two years into the pandemic (TU, 2021). This time, taken the fact that the students and staff are already get used to the pandemic situation and new normality is already somehow established, we changed the theme of the photo contest into showing viability and attractiveness of campus life during the pandemic. We also expanded the target groups for involving more students and university staff into this activity.

Photo contest has been implemented by many higher institutions as an effective tool for various purposes including image promotion and multicultural exchange. Regardless of the successful outcomes of these contests,

little has been known about the characteristics of the photos displayed, the underlying messages and sentiments of the images being displayed and the associations of the related factors, as well as the potentials of using photos and photo contests during digital transformation.

In this paper, we aim to describe the characteristics of the photos and clarify the contents of the photos displayed at the Photo contest and Exhibition “My Tokushima Campus Life 2021”, in order to shed some more light to understand what are the messages and sentiments that the participants want to convey. This could help to understand the needs of participants and the possibilities to design more effective international exchange activities and campus promotion for the future.

## Method

### *Participants and procedure*

The paper analyzed the cross-sectional data obtained from the photo contest cum exhibition in 2021. The recruitment of photos was openly announced to all students and staff via the TU’s International Office homepage. Participants submitted their data via email. The data for analysis was collected from the following sources: (1) photographic works submitted by international student-participants; (2) work title and description text; (3) feedback forms of the participants. Figure 1 shows the sample of photo and description text needed for submission.

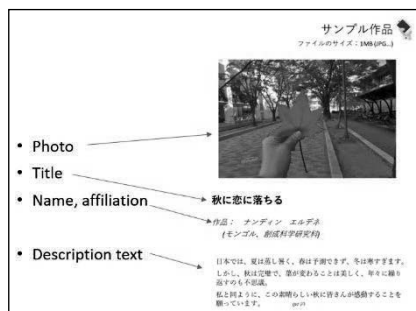


Figure 1: Requirement for exhibition

### *Photo element analysis*

We conducted a visual photo element analysis of the photos according to some common criteria (Dhan, n.d.; National Archives, n.d.). As shown in Figure 2, these criteria were similar to the criteria we used to analyze the results of the previous photo contest (Tran, 2021). Criteria for analysis were the focus (human, non-human), the group (human in groups, no group), the timing (day, night, indoors), the angle (wide, narrow), the sky (yes, no), the warm color (main color of yellow or red, none) etc. We used the following independent variables for correlation analysis: the campus (Kuramoto, Josanjima), the status (staff, undergraduate,

graduate), the nationality (Japan, others), the field of study (medical, dental, pharmaceutical, nutrition, engineering), the gender (female, male).

### *Sentiment analysis*

We also analyzed the text data collected from photo descriptions by using Sentiment Analyzer web tool (Soper, n.d.-a). Since it works only with English text, the texts in Japanese were translated into English. After inputting the text, the tool automatically calculates the score describing overall sentiment, tone, emotion of input text. The score is displayed in a range from (-100) to (+100), whereas (-100) indicates very negative/serious sentiments, while (+100) shows very positive/enthusiastic sentiments. Word cloud was created using the combined English description text data of all photos (Soper, n.d.-b). Data from post-contest feedback forms from participants are being analyzed qualitatively. Quantitative data was processed using SPSS statistics version 27.0 for Windows (IBM Corp., Armonk, NY, USA).

## Results

### *Characteristics of participants*

There were 14 participants sent their works to the exhibition, including a TU’s staff, 2 undergraduate students and 11 graduate students (Figure 2). The participants were from 6 countries (Japan, Indonesia, China, Bangladesh, Vietnam, Mongolia). Female participants consisted of a half of the participants (7/14).

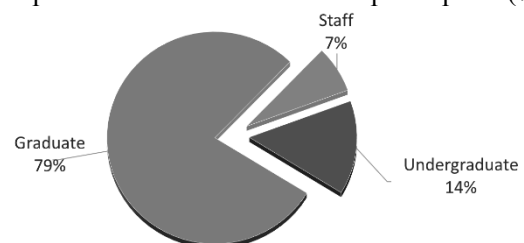


Figure 2: Breakdown of participants

By the language of photo title and description, 16% (4/14) of participants were submitted in Japanese, while the others were submitted in English.

### *Photo element analysis*

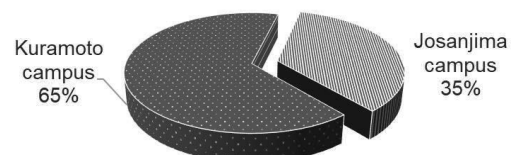


Figure 3: The campus where the photo is taken

Figure 3 shows if the photos were taken inside the Josanjima campus or Kuramoto campus. The fact that two third of photos were taken at Kuramoto campus reflected the location of affiliation of the participants.







## Discussion

Throughout its history, photography has helped people to understand and interpret the reality. It has been reinvented continually through technological advancements and by the diverse ways in which not only professionals but also almost any person has used it. Taking, sharing, and viewing photographs has become nature for many. As there is always a gap between seeing and understanding photographs (MoMA, 2020), we took a step to look at the elements of the photos displayed and going behind the scenes of the exhibition.

Regarding the methodology of analysis, in this study, we intended to use the sentiment analysis approach for analysis of the image and text data. Predicting the sentiment of an image in terms of positive and negative polarity has been studied (Ortiz et al., 2019) and reliable tools for image sentiment analysis are on the way to be developed (Gajjala & Gupta, 2020). Due to difficulty to find applications for image sentiment analysis, we used the text sentiment analysis instead. Nevertheless, text sentiment analysis is still a difficult task because it involves human emotions (Soper, n.d.-a). We used a simple tool for general-purpose sentiment analysis on English text only. The application uses algorithms of linguistics and text mining to automatically determine the sentiment or affective nature of the text being analyzed. The overall sentiment score produced by this tool is for general-purpose use, then it may have disadvantages regarding accuracy and bias.

Regarding potential of photography as a tool for conveying experiences and reflection of the participants have shown that they have enjoyed the event and think that photography exercises, when conducted in the form of contest could work well during pandemic because of its simplicity. Busy with studies and experiments, some stated that they probably will not be able to participate in any time-taking event which needs long preparation. As hobbies and preferences varied widely by individual, all agreed that during pandemic, activities should be conducted online or with as less physical contact as possible. Participants shared that via photography, they could be able to express themselves and to describe changes that the pandemic has resulted in. This photo contest was conducted during the COVID-19 seems to be a major factor that strongly affect the sentiment. Regardless of the restrictions, most of the photos described about enjoyment of daily life, such as spending time relaxing with the landscapes, sunrise, buildings, and trees. The scenes of TU were well described, as during pandemic, there is more time to calm down and to see the campus in a new light.

This contest was implemented at almost two years into the COVID-19 pandemic. Therefore, the photos would

somehow consciously or sub-consciously convey messages reflecting this period. Regarding the association of the photos' messages and the impact of pandemic on campus life, our findings were consistent with the results of previous contest conducted in 2020, where we found messages about restriction, changing the study pattern and lifestyles, as well as enjoyment and motivation (Tran, 2020). Figure 9 shows a tendency of more presence of human and indoors photos, which may imply that the human contact and communication has increased in 2021.

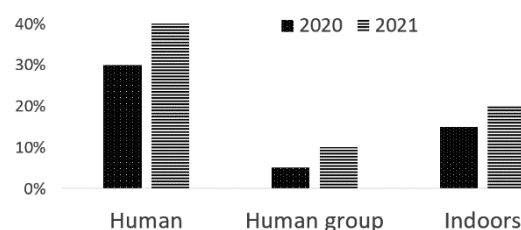


Figure 9: Comparison with previous contest

Regarding potential of photo contest which uses photography to involve participants, there have been many examples of conducting successful events. Photo contest is proven to be a simple but effective tool for extracurricular exchange activities. Many institutions have used photography contests as a form of exchange activities. These contests attract high number of participants including international students, Japanese students, and staff, and visitors to the Exhibition or to SNS. (JASSO, 2019). The contest organized at Tokyo University had attracted many photos promoting multicultural images of the campus created by students and staff (UTokyo, 2016). Photo contests could be organized for attracting potential students (Nippon Photography Institute, 2020), or for disseminating local images (Iwate International Student Exchange Promotion Council, 2020). Sometimes, photo contest also could be used for education and research purpose such as to engage students into investigating a specific issue (Taguchi, 2015). Photo contests can be organized during the pandemic for promotional purposes (Kagawa University, 2020). If being supported by local institutions, even partly, photo contest could be a powerful tool for promoting image of a school, university, or town. Moreover, our results also might show that for the international students who arrived in Japan after the outbreak of pandemic, who had no opportunities to experience Japanese culture, photography could be a potential tool for engagement.

Regarding photo contest as a tool for broadcasting the positive image and attractiveness of the campus life, we could see a gap between the achieved results of the event and the potential impact that it could bring. As referred to the participants' constructive feedback, we found the needs from the participants to improve this kind of events to be more inclusive and attractive. For implementing the contest cum exhibition, we faced many challenges due to the pandemic situations. In

future events, we may consider a live session at the exhibition hall, where the participants stand-by their works and explain to the visitors about their context and feeling when taking the photograph. We also may consider making online voting and online exhibition using a social network platform. Meaningful and attractive themes should also be considered, as well as to seek sponsorship for giving more awards in an award conferring ceremony.

This report's results should be interpreted considering its limitations. A dominant portion of participants consisted of international graduate students, who tent to use English in their study. In 2021, the fact that the targets of participants had been expanded compared to the previous contest, as well as the recruitment notice was shorter could be the reasons for low participation rate, especially with regards to university staff and Japanese students' engagement. As such, these results should be carefully interpreted. There will be also a potential bias in translation of description text to English. The capacity of the tools employed for image and text sentiment analysis was also a limitation. The low number of participants also hinder us from producing statistically significant associations of the results with independent variables. While COVID-19 seems to be a major factor that strongly affect the sentiment, within this study, the evidence is still insufficient, so we leave it to a future investigation.

## Conclusion

The results of the Photo Contest Exhibition "My Tokushima Campus Life 2021" have shown that photography and photo contest exhibition could be used as an effective approach to engage students during the pandemic situation when it is not possible to conduct the traditional face-to-face exchanges events. While the participants could enjoy taking photographs as a part time hobby and a way for self-expression, a photo contest exhibition could be used as an effective approach to engage students and staff and for broadcasting widely the image and the attractiveness of campus life beyond the pandemic. Possibilities of photo contest are still open for future exploration, as it could contribute to effective international exchange and campus promotion.

## Acknowledgement

Special thanks to all participants to the Photo Contest Exhibition "My Tokushima Campus Life 2021". The Exhibition was supported by the Galleria Shinkura Information Dissemination Project, Tokushima University.

## References

Dhan. (n.d.). How to Analyze a Photograph : 7 Steps - Instructables. Retrieved November 28, 2021, from <https://www.instructables.com/How-to-Analyze-a->

- Photograph/  
Gajarla, V., & Gupta, A. (2020). Emotion detection and sentiment analysis of static images. *2020 International Conference on Convergence to Digital World - Quo Vadis, ICCDW 2020*. <https://doi.org/10.1109/ICCDW45521.2020.9318713>
- Iwate International Student Exchange Promotion Council. (2020). "What about international students in the corona era?" *Composition contest*. [In Japanese] [http://iuc.iwate-u.ac.jp/cgi-bin/sui\\_news.cgi?f1=1608796072&f2=staff](http://iuc.iwate-u.ac.jp/cgi-bin/sui_news.cgi?f1=1608796072&f2=staff)
- JASSO. (2019). *Tokyo International Exchange Center Photo Contest 2019*. <https://www.jasso.go.jp/ryugaku/kyoten/tiec/event/photoc/2019.html>
- Kagawa University. (2020). *Photocontest 2020*. <https://www.kagawa-u.ac.jp/hiroba/photocontest/>
- Kano, H. (2020). Possibility of online lessons in higher education during pandemic - A survey on communication environment and ICT device ownership. *44th Japan Society for Science Education Meeting*, 521–524. [In Japanese] [https://doi.org/10.14935/JSSEP.44.0\\_521](https://doi.org/10.14935/JSSEP.44.0_521)
- MoMA. (2020). *Seeing Through Photographs*. Coursera. <https://www.coursera.org/learn/photography/home/welcome>
- Murata, F. (2021). Higher education during Covid-19 pandemic. *Bulletin of Taisei Gakuin University*, 23, 99–107. [In Japanese] [https://doi.org/10.20689/TAISEIKIYOU.23.0\\_99](https://doi.org/10.20689/TAISEIKIYOU.23.0_99)
- National Archives. (n.d.). *Analyze a Photograph*. Retrieved November 28, 2021, from <https://www.archives.gov/education/lessons/worksheets/photo>
- Nippon Photography Institute. (2020). *7th Photo Grand Prix for High School / International Students*. [In Japanese] <https://npi.ac.jp/photograndprix/>
- Ortis, A., Farinella, G. M., & Battiato, S. (2019). An Overview on Image Sentiment Analysis: Methods, Datasets and Current Challenges. *SIGMAP 2019 - 16th International Conference on Signal Processing and Multimedia Applications*. <https://doi.org/10.5220/0007909602900300>
- Soper, D. (n.d.-a). *Free Sentiment Analyzer*. Retrieved November 28, 2021, from <https://www.danielsoper.com/sentimentanalysis/default.aspx>
- Soper, D. (n.d.-b). *Free Word Cloud Generator*. Retrieved November 28, 2021, from <https://www.danielsoper.com/wordcloud/default.aspx>
- Taguchi, M. (2015). Raise interest in meteorological phenomena among college students through a cloud photo contest. *The 39th Meeting of the Japan Society for Science Education Yamagata*, 252–253. [In Japanese] [https://doi.org/10.14935/JSSEP.39.0\\_252](https://doi.org/10.14935/JSSEP.39.0_252)
- Tanno, K. (2020). [Impact of the new coronavirus (COVID-19) on international students]. *Daiichi Institute of Technology Research Report*, 32, 128–133. [In Japanese].
- Tran, H. N. (2020). Motivation of International Students

through a Photo Contest. *Bulletin of International Education Promotion Group, Study Support Division, Research Center for Higher Education*), 2020, 7–11.

Tran, H. N. (2021). *Photography: A Potential Tool for Self-actualization of International Students during Pandemic*. The Kyoto Conference on Arts, Media & Culture 2021: Official Conference Proceedings. <https://papers.iafor.org/submission60579/>

TU. (2021). *Announcement of Results of the Photo Contest Exhibition “My Tokushima Campus Life 2021.”* International Office. <https://www.isc.tokushima-u.ac.jp/english/announcement/3910/>

UTokyo. (2016). *UTokyo Photography Contest*. The University of Tokyo. <https://www.u-tokyo.ac.jp/en/academics/contest.html>





# 紀要論文



## 外国人留学生への指導・相談関連

本学に在籍中の留学生だけでなく、留学生の家族、外国人研究者及び学外の徳島大学入学希望する留学生を対象とした指導・相談を、常三島地区の「国際教育推進班・国際課」と蔵本地区の「国際交流室・国際課蔵本分室」の二か所で行っている。面談、オンライン、電話、メールの形式で日本語、中国語、英語、韓国語、ベトナム語の五ヶ国語で対応できる体制が整っており、メンタルヘルスに関するカウンセリングが必要な場合は、キャンパスライフ健康支援センター及び専門医と連携することで対応している。

相談内容で最も多いのは、一般的な進学・修学、授業料・奨学金、住居、生活、日本での就職などであるが、他機関・学内関係部局及び関係者と連携しながら対応しないと解決できない内容（例えば、窃盗事件、交通事故、家賃未納（不納）、不動産のトラブル、メンタルヘルスなどに関するもの）もあり、これら比較的複雑な相談に対しても対応している。特に、近い将来必ず発生するとされている南海トラフ巨大地震への備えとして、緊急地震速報の内容や地震発生の際の避難方法について詳しく説明を行っている。

今年は特に、新型コロナ禍の中、感染対策、日常生活の中で対応する方法について学生たちに情報提供を行った。

### 新入留学生に対するガイダンス

新入留学生ガイダンスは、本学に入学した留学生に対し、修学・生活に関する指導を行い、留学生生活の円滑化を図ることを目的としている。今年度前期ガイダンスは、4月23日（金）に6名の留学生がオンラインで参加した。後期は、10月15日（金）には5名、10月25日（月）には1名、11月30日（火）には2名、12月21日（水）には2名、2月末には2名、合わせて12名の留学生参加があった。ガイダンスでは教員から、防災、交通安全、在留資格や、日本での生活に関わる注意事項について説明があり、新入留学生は熱心に耳を傾けていた。対面で参加した学生には、終了後、徳島地域留学生交流推進協議会の関係機関から寄付いただいた日用品等の配付を行った。オンラインで参加した留学生には、来日後に配付を行った。

### 消防訓練

2021年11月10日（水）に、留学生等を対象に地域創生・国際交流会館で消防訓練を実施した。本消防訓練には、会場で北島国際交流会館、日亜会館に居住する留学生8人、オンラインで今後入国を予定している留学生8人のあわせて16人が参加した。この訓練は、外国人留学生の防火に関する意識や消防対策スキルの向上を目的として実施した。徳島市消防局の講師から日本の火事に関する事情、119番通報、火事の予防方法や、火事が起こったときの対応について説明があり、そのあと訓練用の消火器で消火器の使い方を指導した。訓練終了後には、災害時に使える防災備蓄品を参加者に配付し、防災意識の向上についても呼びかけた。



### 留学生のためのストレス対策セミナー

2021年3月に行ったコロナ禍における本学留学生への影響に関する調査によると、留学生の半数以上が様々なストレスや不安を抱えていることが分かった。そこで、このような状況の留学生をサポートするため、「ストレス対策セミナー」を開催した。

2021年5月28日（金）に第1回留学生のためのストレス対策セミナーはオンラインで開催し、本学留学生8人が参加した。コロナ禍で留学生が抱えやすいストレス、ストレスを感じやすい思考パターン、免疫機能を高める方法などについて多くを学ぶことができた。

2021年7月16日（金）に「留学生のためのストレス対策セミナー：アサーショントレーニング」をオンラインで開催し、本学外国人留学生14人が参加した。このイベントは、留学生のためのストレス対策セミナーの2回目として、専門的な立場からコロナ禍における本学留学生をサポートするために実施した。キャンパスライフ健康支援センターの井ノ崎敦子先生を講師にお迎えし、自分を大切にしつつ、相手も大切にコミュニケーション・スキル「アサーション」を身につける方法などについて学ぶことができた。

2021年10月25日（月）に「留学生のためのストレス対策セミナー：心の健康を保つ人間関係」をオンラインで開催し、本学留学生6人が参加した。今回は、「人に頼ること」の大切さや良い人間関係をつくり、それを維持する方法などを学ぶことができた。



2022年1月17日（月）に「友達を作るためのコツ」をオンラインで開催し、本学外国人留学生7人が参加しました。このセミナーは「友だちをつくること」の大切さや友だちと良い関係を続ける方法などを学ぶことができた。

## 留学生のための就職支援

### ● 「留学生のための就職支援セミナー」および「留学生県内定着促進事業」

昨年同様、「留学生のための就職支援セミナー」と「県内留学生定着支援事業」を共同開催する形でセミナーを行った。昨年度は13回のセミナーを開催したが、今年度はそこから精査した9回のセミナーを実施した。なお、新型コロナウイルス感染防止のため、ジョブフェア&交流会以外のイベントをすべてオンラインで行った。

参加合計人数は81名。開催した日付、タイトル、参加人数は次のとおり。

セミナータイトルなど	徳島大学	他大学	不明	総計
第1回「日本での就職活動について学ぼう」 5/14	5	0	0	5
第2回「インターンシップについて学ぼう」 6/11	7	0	0	7
第3回「ジョブフェア&交流会」 7/8	11	4	0	15
第4回「卒業生の就職体験を聞こう」★ 10/8	5	5	0	10
第5回「面接対策とビジネスマナー」★ 10/27	3	3	0	6
第6回「ジョブフェア&交流会」★ 11/18	4	5	0	9
第7回「就労ビザについて学ぼう」★ 12/15	11	4	0	15
第8回「日本企業バスツアー」★ 1/21	4	3	0	7
第9回「就職合同説明会について学ぼう」 2/16	6	1	0	7
総計	56	25	0	81

★：「県内留学生定着推進事業」

今年度は、県内留学生定着推進事業の予算が10月以降にずれ込んだため、同事業を連動した取り組みに関しては遅れて実施することとなった。



今年度の活動で特筆すべき点としては、(1) 新型コロナウイルスの影響下ではあったが、対面形式で「ジョブフェア&交流会」を2回実施した、(2) 第9回目の「日本企業バスツアー」では、企業紹介動画と人事担当者へのライブインタビューを組合せてイベントを実施した、これら2点を挙げることができる。7月8日の「ジョブフェア&交流会」では、県内企業5社（富士ファニチア株式会社、株式会社アルボレックス、富士スレート株式会社、ダイトー工業株式会社、貞光食糧工業株式会社）に参加頂き、11月18日の同イベントには県内企業4社（有限会社高木建設、株式会社阿部鐵工所、天満病院グループ、喜多機械産業株式会社）に参加頂いた。

コロナ対策ということもあり、ほとんどのセミナーをオンラインで提供したが、特に第9回「日本企業バスツアー」では、徳島県内の企業3社（株式会社西精工（徳島市）、船場化成株式会社（石井町）、株式会社GF（阿南市））の協力頂き、紹介動画の撮影を行い、その動画にあわせて企業の採用担当者などにライブで質疑応答する新しい試みも行った。

昨年度は147名の留学生が参加したが、今年度はセミナーの回数を減らしたため、参加人数が81名に減少した。ただ、日本での就職に必要な必要最低限の支援は提供することができたと考えている。日本の就職活動のシステムをよく知らないために日本人学生と比べて後れを取ってしまうことがあるが、インターナショナルオフィスでは、日本での就職を希望する留学生に必要な情報を得られる機会を設け、安心して就職活動を行えるよう支援していきたいと考えている。

### ● 就職個別相談

2021年4月～2022年2月末までで、98件の相談に対応した。相談内容としては、応募する企業の選び方、エントリーシートの作成・添削、面接対策、筆記試験対策といった就活に直結する相談に加え、ビザ更新の方法やアパートの探し方、それに引っ越しの方法に関する質問などがあった。

昨年度の131件に比べると多少減少したが、今年度は2名の留学生の就職を支援することができた。

### ● 「留学生就職意向動向調査」

今後の留学生を対象とした就職支援事業を検討するために「留学生就職意向動向調査」を実施した。本学で学ぶ115名の留学生に調査を実施し、最終的には75名（65.2%）の留学生が回答した。結果を報告書としてまとめ、必要な委員会に報告を行った。

## 留学生受け入れ及び支援に関する活動

### ● 渡日前入学許可制度

2015 年度にベトナムドンズー日本語学校（ホーチミン市）と協定を結び、徳島大学の学部への入学を目的とする「渡日前入学許可制度」を創設した。本制度はドンズー日本語学校からの推進を受け、書類審査、遠隔面接などを経て入学を許可するものであり、受験者の入学前日が必要となる。本制度で入学が許可された留学生に対しては、検定料・入学料・授業料免除と初年度の奨学金（288,000 円/6 ヶ月）を支給する。また、対象留学生の日本語力を強化するため、入学前に本学で半年間の日本語等予備教育を実施する。留学生の受け入れ部局は理工学部と生物資源産業学部に加え、2018 年度には新たに総合科学部が加わった。また、2017 年度に新たに韓国時事日本語学院と協定を締結し、渡日前入学許可制度による入学試験を実施した。

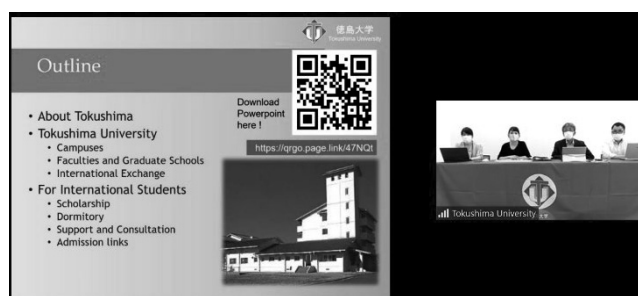
2022 年度および 2023 年度の「渡日前入学許可制度による私費外国人留学生選抜」（Ⅱ型（日本語等予備教育なし）、Ⅰ型（日本語等予備教育あり））については、新型コロナウイルスの影響で本学の教職員が現地に渡航出来ない状況の中、本学の卒業留学生同窓会と連携しながら、一次選考および二次選考を実施しました。韓国の時事日本語学院からの応募者は 4 名で全員が理工学部希望であった。選考の結果 3 名が合格し、4 月入学予定である。

下図に示すように、2016 年から毎年本制度により学部留学生を受け入れている。なお、2022 年 4 月には 3 名の韓国人留学生学生が理工学部に入學を予定している。

	合格者数	来日	入学	内訳
第一期	2（Ⅰ型）	2016 年 10 月	2017 年 4 月	理工学部（1 名） 生物資源産業学部（1 名）
第二期	3（Ⅰ型）	2017 年 10 月	2018 年 4 月	理工学部（2 名） 生物資源産業学部（1 名）
第三期	3（Ⅰ型）	2018 年 10 月	2019 年 4 月	理工学部（1 名） 生物資源産業学部（2 名）
第四期	2（Ⅱ型）	2019 年 4 月	2019 年 4 月	理工学部（2 名）
	2（Ⅰ型）	2019 年 10 月	2020 年 4 月	生物資源産業学部（2 名）
第五期	8（Ⅱ型）	2020 年 4 月	2020 年 4 月	生物資源産業学部（1 名） 理工学部（7 名）
第六期	3（Ⅱ型）	コロナの影響で未定	2021 年 4 月	理工学部（3 名）
第七期	3（Ⅱ型）	コロナの影響で未定	2022 年 4 月（予定）	理工学部（3 名）

### ● 外国人留学生のための進学説明会および日本留学フェア

・2021 年度 JASSO 主催の日本留学オンラインフェア「英語フェア」（8 月 29 日（日）、9 月 4 日（土））に参加した。国内・海外からの参加者 225 名に対して、パワーポイント、動画、Q&A などの資料による大学紹介を行いました。質問はチャット形式で行い、内容としては殆どが奨学金、住居、授業料などに関するものであった。



## ● 主な活動

- 4 月 新入学生に対するガイダンスの実施（常三島）
- 5 月～1 月 留学生のためのストレス対策セミナー
- 7 月～2 月 外国人留学生のための就職支援セミナー
- 8 月 JASSO 主催の日本留学オンラインフェア「英語フェア」（1 回目）
- 9 JASSO 主催の日本留学オンラインフェア「英語フェア」（2 回目）
- 9 月 「渡日前入学許可制度」における入試面接の実施（韓国）（遠隔面接）
- 10 月 新入学生に対するガイダンスの実施（常三島、蔵本）
- 11 月 大阪大学日本語日本文化教育センター主催の国費学部留学生への大学進学説明会
- 11 月 消防訓練の開催
- 2 月 新入学生に対するガイダンスの実施

## 日本文化体験・国際交流関連

### 各種学外研修・国際交流イベント

今年度の各種学外研修に関しては、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、すべて中止した。国際交流イベントについては、同ウイルス感染防止のため、以下のオンラインでの活動を実施した。

#### ● オンライン交流会

2021年5月26日（火）20時から、オンラインでブルガリアのヴェリコ・タルノヴォ大学との交流会を開催した。現在は新型コロナウイルス感染症拡大のため海外渡航ができないため、Zoomを使って遠隔での交流を行った。今回は、本学学生11人と本学教員2人、VT学生8人及び同学教員1人が参加し、合計22人で1時間ほど日本語を用いて交流を行った。両大学の教員が簡単な挨拶をした後、学生達もそれぞれ自己紹介をした。その後、VT学生たちのブルガリア文化（お祭り・イースター等）についてのプレゼンテーションの内容をもとに質疑応答を行った。交流会後のアンケートでは、本学学生からは「ブルガリアの文化に興味を持ったので、ぜひ一度行ってみたいです」

「私も彼らのように母語以外の言語をもっと話せるようになりたいと思いました」等のコメントがあり、VT学生からは「日本語のネイティブスピーカーと久々に話せてとても楽しかった」「日本の文化についてもっと知りたいので次の交流が楽しみです」等のコメントがありました。このオンライン交流を通して、双方の学生が多くの刺激を得ていることが伺えた。

なお、ヴェリコ・タルノヴォ大学との交流は継続的に行っていく予定です。



#### ● 学生サポーター制度

本学外国人留学生をサポートし、交流活動を支援する「学生サポーター」（本学日本人学生）がある。センターが実施する日本語教育には集中講習型の日本語研修コース、外国人留学生・研究者・研究生とその家族対象の総合日本語コースがあり、各クラスの要請に応じて学生サポーターに授業や日本文化体験イベントへの参加を要請している。また、サマースクールをはじめ、センターで行われる事業のサポートも依頼している。

学生サポーターには73人（2022年3月3日現在）が登録している。



# 日本語教育 英語教育

## 日本語研修コース

### ● 初級コース（前・後期）

- ・ 文部科学省大学院入学前予備教育（大使館推薦）、教員研修生、学内公募生を対象とし、大学内外での生活を一人で、成人として乗り切れる日本語力を身につける。
- ・ 集中コースで実施する。日本の文化・習慣・社会規範・日本人のコミュニケーションの仕方などを授業に盛り込み、日本人学生や地域住民との活動を含む学内外の場での日本語・日本文化学習を実施する。
- ・ コース全体を 10 のプログラムに分け、それぞれのプログラムで筆記試験と口頭試験を行い、学習評価を行う。また、毎日の授業の初めに小テストを行い、事前学習を確認する。
- ・ 語彙や活用の動画を事前に視聴・学習し、授業ではコミュニケーションの習得を重視することで、反転授業の形式を取り入れる。

### 2021 年度

- ・ 全てのクラスをオンラインで実施した。
- ・ コースを 10 に分けて、適宜オンラインでの小テストや筆記テストを行った。
- ・ 教科書は電子テキストを無料で配布し、漢字はハンドアウトを作成した。
- ・ 著作権の問題があるため、宿題で市販の問題集を使用せず、自作でワークブックを作成し使用した。
- ・ クラスを 2 つに分け、オンラインでも学生の発話時間を増やすなど工夫した。

### 期間と日程、時間割

#### <2021 年度前期>

新型コロナウイルス感染症の拡大で新入留学生が在籍せず、開講しなかった。

#### <2021 年度後期>

期間： 2021 年 10 月 1 日（金）～ 2022 年 3 月 16 日（水）

日本語授業 186 コマ（279 時間）

日本文化・交流授業 14 コマ（21 時間）

	月	火	水	木	金
12:50-14:20	グループ A	A		A	A
14:35-16:05	グループ A、B	A、B	合同	A、B	A、B
16:20-17:50	グループ B	B	合同	B	B

### 受講生

#### <2021 年度後期>

身分	国籍
高等教育研修センター 研究生 教員研修生	フィリピン
高等教育研修センター 研究生 教員研修生	ソロモン諸島
高等教育研修センター 研究生 教員研修生	ナイジェリア
高等教育研修センター 研究生 教員研修生	モザンビーク
高等教育研修センター 研究生 教員研修生	モロッコ
高等教育研修センター 研究生 教員研修生	マレーシア
高等教育研修センター 研究生 教員研修生	モンゴル
薬科学教育部 研究生	エチオピア
先端技術科学教育部 博士課程 1 年	モンゴル

創成科学研究科 研究生	バングラデシュ
先端技術科学教育部 博士課程 1 年	インド

### 主な教材

「みんなの日本語 初級 I」本冊・翻訳文法解説書 第 2 版 スリーエーネットワーク  
 「みんなの日本語 初級 II」本冊・翻訳文法解説書 第 2 版 スリーエーネットワーク  
 「いろどり 生活の日本語」初級 2 国際交流基金 日本語国際センター  
 「使える日本語」徳島大学国際センター  
 語彙・慣用表現 動画 徳島大学高等教育研究センター  
 文法ノート 徳島大学高等教育研究センター  
 ワークブック 徳島大学高等教育研究センター  
 漢字ワークシート 徳島大学高等教育研究センター

## 日本語研修（上級）コース

### ● 概要

- ・ 渡日前入学許可制度で学部に入学者を対象にする。
- ・ 入学年度の半年間、日本語レベルの向上を目的に集中コースを行う。日本人学生と一緒に授業を履修し単位取得ができるように、十分な日本語能力を身につける。
- ・ 日本留学試験を受け、本学の入学試験に合格している学生を対象にするため、大学の講義を聞いたり、教科書を読んで理解したりできる能力を養う。また、講義を聞くことに慣れさせるため、数学や自らの専門の学部の授業を聴講させる。
- ・ 翌年の4月から日本人学生と同じように新入生として授業を履修できるよう、日本での生活に慣れさせる。そのために、生活指導や文化体験などを行う。
- ・ 語学マイレージ・プログラムの実施により、留学生も英語のマイレージ・ポイントを取得する必要があり、そのために日本語だけでなく英語能力も向上させる。

2021 年度：受講該当学生がいなかったため、開講しなかった。

## 日本文化研究（後期）

### ● 実施概要

「日本文化研究」は、国際センターが平成 30 年度後期より開始した日本語研修コース受講生を対象としたリサーチ・ベースの授業で、留学生が各自の興味・関心に基づき設定したテーマ（特に、日本文化や社会に関するテーマ）について小規模な調査・研究を行い、それを英語でレポートとしてまとめることを目的としている。

ただ、今回、新型コロナウイルスの関係で日本語研修コース自体がすべてオンラインでの実施となったため、回数および内容を大幅に見直し、以下の内容について授業を実施した。

**開講期間：**2022 年 2 月 23 日（水）、3 月 2 日（水）、3 月 9 日（水）16:20～17:50

**授業場所：**オンライン Zoom

回	日付	時間	内容
1	2 月 23 日	16:20-17:50	Japanese Communication: Listener Responses
2	3 月 2 日	16:20-17:50	High Context and Low Context Communication
3	3 月 9 日	16:20-17:50	Cultural Adaptation to Different Culture

**受講生 11 名：**

上記日本語研修コースに同じ

**評価および所感：**

今年度も、新型コロナウイルスの関係で、従来の日本文化や日本語に関する質的調査研究ができなかったが、日本人とのコミュニケーションや異文化での適応に焦点を置いてディスカッションできたことは良かったと思う。すべての授業をオンラインで行ったが、ディスカッションの際には色々な意見が出てきて、非常に刺激的であった。



## 総合日本語

- ・ 未習から中級までの日本語学習を希望する学生、研究者とその成人家族を対象とする。
- ・ 常三島・蔵本キャンパス、あるいはオンラインで実施する。
- ・ 希望者には参加証書を発行する。

### 実施概要

- ・ 開講クラスと使用教材

クラス名	レベル	JLPT 換算	CEFR 換算	教科書
初級 1	未習者-初級	－	A1	「みんなの日本語」(スリーエーネットワーク) 初級 I 本冊・翻訳文法解説 L1～L13
初級 2	初級	N5	A1	「みんなの日本語」初級 I L14～L25
初級 3	初中級	N5	A2	「みんなの日本語」初級 II L26～L38
初級 4	初中級	N4	A2	「みんなの日本語」初級 II L39～L50
中級 1	中級	N4	B1	「みんなの日本語」中級 I L1～L6
中級 2	中級	N3	B1	「みんなの日本語」中級 I L7～L12
中級 3	中上級	N3-2	B2	「みんなの日本語」中級 II L1～L6
中級 4	中上級	N2	B2	「みんなの日本語」中級 II L7～L12
漢字 1	レベル問わない			「スーパーキット」(凡人社) 漢字プリント
漢字 2	レベル問わない			「スーパーキット」(凡人社) 漢字プリント
医学 1	初級 2 以上			「医学日本語」(徳大作成)
医学 2	初級 2 以上			「医学日本語」(徳大作成)

- ・ 使用教室  
オンライン

受講者数

開講 クラス	人数（申し込み時の人数）			
	前期		後期 2020/10/12-2021/1/22	
	常三島	蔵本	常三島	蔵本
初級 1	1 (1)		17 (17) <2 クラス>	
初級 2	1 (1)		—	
初級 3	2 (2)		—	
初級 4	4 (4)		4 (4)	
中級 1	4 (4)		2 (2)	
中級 2	3 (3)		3 (3)	
中級 3	5 (5)		3 (3)	
中級 4	—		2 (2)	
漢字 1	—	—	—	—
漢字 2	—	—	—	—
医学 1	—	—	—	—
医学 2	—	—	—	—
合計	20 (20)		31 (31)	

日程

前期	月	火	水	木	金
08:40～			中級 1		中級 1
10:25～					
12:50～	初級 3	初級 2			初級 2 初級 3
14:35～	初級 1	初級 4 中級 2		中級 2	初級 1 初級 4
16:20～		中級 3			中級 3

後期	月	火	水	木	金
08:40～	中級 4		中級 1		中級 1
10:25～	初級 4		中級 3 中級 4	初級 4	中級 3
12:50～		中級 2			中級 2
14:35～					
16:20～	初級 1-A		初級 1-B		初級 1-A, B

## アンケート結果

### 前期 (回答 18)

Q：日本語のクラスはどうでしたか。

評価	5 とても満足した	4	3 普通	2	1 全く満足しない
人数	15	3	0	0	0
%	83%	17%	5%	0%	0%

理由：

- 本当にクラスを楽しめた。先生が二人いたので、飽きずに勉強できた。
- 初めは全然日本語がわからなかったが、今は日常生活で日本人とコミュニケーションをとることができる。
- 先生は良かったが、オンラインのクラスは良くない。集中できない。
- 先生はとてもよく準備をしていた。わかりやすく、日常生活でどう使うのかがわかった。
- 日本語だけでなく、日本文化を学ぶことができた。
- 授業中、話す時間があって、楽しかった。

Q：オンラインのクラスはどうでしたか。

評価	5 とても満足した	4	3 普通	2	1 全く満足しない
人数	14	3	1	0	0
%	78%	17%	5%	0%	0%

Q：どこでオンラインのクラスに参加しましたか。(複数回答)

家 5 研究室 9  
教室 2

Q : オンラインのクラスで良かったことは何ですか。(複数回答)

教室に行かなくてもいい 9  
先生の言うことがよくわかる 7  
質問しやすい 3  
その他 電子的にメモやノートが書きやすい 1

Q : オンラインのクラスの良くなかったことは何ですか。(複数回答)

よくわからなかった・理解しにくかった 3  
機械やインターネットの問題があった 10  
質問しにくかった 1

後期 (回答 17)

Q : 日本語のクラスはどうでしたか。

評価	5 とても満足した	4	3 普通	2	1 全く満足しない
人数	15	2	0	0	0
%	88%	12%	0%	0%	0%

理由 :

- おもしろくて、楽しかった。
- ネットがつながらなかったり、先生に直接質問できなかったりした。
- 先生がしっかり説明してくれた。
- いろいろな文法や語彙を学ぶことができた。
- 先生が忍耐強かった。
- 少し難しかった。
- 先生が興味を持てるように教えてくれて、わかりやすかった。

Q : オンラインのクラスで良かったことは何ですか。(複数回答)

教室に行かなくてもいい 6  
先生の言うことがよくわかる 8  
質問しやすい 4

Q : オンラインのクラスの良くなかったことは何ですか。(複数回答)

よくわからなかった・理解しにくかった 1  
機械やインターネットの問題があった 9  
質問しにくかった 0



## 留学生のための英語

### 概要

「留学生のための英語」は、国際センターが 2017 年度より開始した留学生対象の英語補習授業で、留学生が本学の卒業要件に必要な英語力を獲得することを支援するためのコースである。「これまで英語を勉強したことがあるが、あまり得意でない」と考えている留学生、「基礎的な英語は大丈夫だけど、もう少し英語力を UP したい」と考えている留学生を対象としており、TOEIC などの語学試験にも対応することを目的としている。

「留学生のための英語」は、受講者の英語レベルに応じて、A コース（初級レベル）、B コース（中級レベル）の 2 つに分けて展開しており、A コースは TOEIC550 点未満の留学生（CEFR A1, A2）を、B コースは TOEIC550 点以上の留学生を対象としている。いずれのコースも、Reading, Listening, Writing & Speaking の英語力向上を目指した支援を提供する。

### 2021 年度前期、後期

2021 年度は、オンラインでの授業ということもあり、A コース（TOEIC550 点未満、CEFR A1, A2）B コース（TOEIC550 点以上）共に申請がなく、開講しなかった。

## 海外留学関連

### 短期海外留学プログラム（夏期・春期）

新型コロナウイルス感染拡大防止の観点により全てのプログラムを中止とした。

### オンライン留学プログラム（夏期）

新型コロナ感染拡大防止のため、夏休みの短期海外留学プログラムが中止となったため、協定大学のアメリカの南イリノイ大学（SIU）、台湾の淡江大学（TKU）、韓国の慶北大学（KNU）と夏期オンライン留学プログラムを共同開発し、2021年8月～9月に上記3つの大学とそれぞれ連携して「オンライン留学プログラム」を実施した。学生たちは自宅からオンラインで海外大学と繋がり、ネイティブ教員から外国語を教わったり、海外の大学生と異文化交流を行うことができた。

- ・説明会：新型コロナウイルス感染拡大防止の観点によりオンラインで実施した
- ・個別面談：69人
- ・奨学金：全てのプログラムで「留学支援奨学金」を授業料の半額程度支給
- ・参加者合計数：48人

本プログラムの募集にあたっては、プログラムに関心を示す全ての学生と担当教員が面談を行った。実施前には1～2回程度の事前指導を実施し、プログラム費用の支払い手続きに関する支援や外国語学習や異文化理解についての指導を行った。

実施大学	南イリノイ大学（アメリカ）
期間	4週間（2021年8月16日～9月10日）※月曜日～金曜日
参加人数	34人
時間帯	21時～23時（現地時間：7時～9時）
概要	SIU Center for English as a Second Language（CESL）の40時間の英語コースを受講（学生交流を含む）
備考	プログラム開始前に、本オフィス英語教員がディスカッション指導を2時間実施し、プログラム中にも週に2回（各30分）に外国人留学生の協力も得て、指導を続けた。また、TOEIC 100点アップを目標に持たせて、プログラム中に毎日30分の英語課題を出して英語漬けのサポートを行い、事前・事後にCASECテストを受験して効果を測定した。プログラム後にSIUとオンラインで繋いで、Closing Ceremonyを開催し、本学からは教育担当理事も参加した。

実施大学	慶北大学（韓国）
期間	2週間（2021年8月9日～8月20日）※月曜日～金曜日
参加人数	11人
時間帯	14時～18時
概要	韓国語クラス、学生交流、韓国文化体験、バーチャル旅行等
備考	特になし

実施大学	淡江大学（台湾）
期間	3週間（2021年8月16日～9月3日）※月曜日～金曜日
参加人数	3人
時間帯	9時～12時（現地時間：8時～11時）

概要	中国語クラス、学生交流、台湾文化体験等
備考	本プログラムには本学学生のみ参加した。本プログラムの共同実施がきっかけとなり、本学高等教育研究センターと淡江大学推広教育室との部局間学術交流協定が締結された。

## オンライン留学プログラム（春期）

春休みも海外へ学生たちを派遣できない状況が続いたため、協定大学のアメリカの南イリノイ大学（SIU）と連携して「オンライン留学プログラム」を共同で開発し、2022年2月～3月に実施した。

- ・説明会：新型コロナウイルス感染拡大防止の観点によりオンラインで実施
- ・個別面談：29人
- ・奨学金：全てのプログラムで「留学支援奨学金」を授業料の半額程度支給
- ・参加者数：21人

本プログラムの募集にあたっては、プログラムに関心を示す全ての学生と担当教員が面談を行った。実施前には1～2回程度の事前指導を実施し、支払い手続きに関する支援や外国語学習や異文化理解についての指導を行った。

実施大学	南イリノイ大学（アメリカ）
期間	4週間（2022年2月10日～3月4日）※月曜日～金曜日
参加人数	21人
時間帯	21時～23時（現地時間：7時～9時）
概要	SIU Center for English as a Second Language（CESL）の40時間の英語コースを受講（学生交流を含む）
備考	プログラム開始前に、本オフィス英語教員がディスカッション指導を2時間実施し、プログラム中にも週に2回（各30分）に外国人留学生の協力も得て、指導を続けた。また、TOEIC 100点アップを目標に持たせて、プログラム中に毎日30分の英語課題を出して英語漬けのサポートを行い、事前・事後にCASECテストを受験して効果を測定した。プログラム後にSIUとオンラインで繋いで、Closing Ceremonyを開催し、本学からは教育担当理事も参加した。

## その他のオンライン国際交流

実施大学	シンガポール国立大学（シンガポール）
期間	第1回：2021年4月7日、第2回：2021年4月14日
参加人数	のべ24人
時間帯	19時～20時半（現地時間：18時～19時半）
概要	日本文化をテーマとした交流（日本語を使用）
備考	シンガポール国立大学からはのべ112名が参加した。

実施大学	ヴェリコ・タルノヴォ大学（ブルガリア）
期間	2021年5月26日
参加人数	11人
時間帯	20時～21時（現地時間：13時～14時）
概要	日本文化とブルガリア文化をテーマとした交流（日本語と英語を使用）
備考	ヴェリコ・タルノヴォ大学からは8名が参加した。

実施大学	マレーシア工科大学（マレーシア）
期間	第1回：2021年6月8日、第2回：2021年6月9日、第3回：2021年6月22日、第4回：2021年6月23日
参加人数	のべ22人
時間帯	第1回・第2回：11時～12時（現地時間：10時～11時） 第3回・第4回：16時～17時（現地時間：15時～16時）
概要	日本語の授業に参加して、日本語学習の支援をする（日本語と英語を使用）
備考	シンガポール国立大学からは56名が参加した。

## グローバル・パーソン集中プログラム（第1期生）（GRIP, Global Person Resources Intensive Program）

全学的なグローバル人材育成を目的として、インターナショナルオフィスは本年度から「グローバル・パーソン集中プログラム（GRIP, Global person Resources Intensive Program）」を開始し、前期が第1期生にあたる。このプログラムは、自国および他国の文化・歴史を理解し、外国語による高いコミュニケーション能力を、多様な人と協働できる「グローバル・パーソン」の育成を目的としている。学生たちが学部を超えてお互いに学び合い、英語集中講座で英語力を上げるとともに、地域の高校生や市民とともに英語で地域の文化を学んだり、海外大学の学生とのオンラインでの協働学習をしたりする。また、アメリカ・南イリノイ大学（SIU）と共同で開発する4週間オンライン留学への参加、およびインターナショナルオフィスの英語集中講座に参加して、英語力および異文化理解を高めた。また、第1期生は、徳島大学の卒業生で国連職員の方を招いて「グローバル講演会」を実グローバル・パーソン工科大学の学生に対して英語でマレーシア文化についてインタビューした内容をまとめてオンラインで発表する「多文化紹介プレゼンテーション」を行った。詳細は本紀要論文の「徳島大学 GRIP（第1期・第2期生）の実践報告」にまとめている。

- ・説明会：新型コロナウイルス感染拡大防止の観点によりオンラインで実施
- ・個別面談：22人
- ・選考：オンライン英語テスト（CASEC）の結果および提出書類をもとに 総合的に判定
- ・奨学金：修了学生に対して「支援奨学金」をプログラム参加に係る費用の全額程度支給
- ・参加者数：14人

セッション項目	回数	時間数
オリエンテーション・事前事後指導	3 回	3 時間
異文化理解講座	1 回	1 時間
英語集中講座 (UTM との多文化紹介プレゼンテーションを含む)	12 回	6 時間
グローバル講演会	1 回	1 時間
日本文化講座	3 回	4.5 時間
SIU オンライン留学	20 回	40 時間
合計	40 回	55.5 時間

## グローバル・パーソン集中プログラム（第 2 期生）（GRIP, Global Person Resources Intensive Program）

全学的なグローバル人材育成を目的として、インターナショナルオフィスは本年度から「グローバルパーソン集中プログラム（GRIP, Global person Resources Intensive Program）」を開始した。このプログラムは、自国および他国の文化・歴史を理解し、外国語による高いコミュニケーション能力を持って、多様な人と協働できる「グローバルパーソン」の育成を目的としている。学生たちが学部を超えてお互いに学び合い、英語集中講座で英語力を上げるとともに、英語で地域の文化を学んだり、海外大学の学生とのオンラインでの協働学習をしたりする。また、アメリカ・南イリノイ大学（SIU）と共同で開発する 4 週間オンライン留学への参加、およびインターナショナルオフィスの英語集中講座に参加して、英語力および異文化理解を高めた。また、後期（第 2 期生）は、前期の内容に加えて、シンガポール国立大学の日本語履修生とのオンラインによる PBL 型国際共修や、マレーシアマラッカ技術大学の英語教員によるオンラインでの英語授業（学生交流を含む）を行った。詳細は本紀要論文の「徳島大学 GRIP（第 1 期・第 2 期生）の実践報告—全学的なグローバル人材教育プログラム—」、および「海外大学との PBL 型国際共修—地元企業と連携したグローバル教育実践—」にまとめている。

- ・説明会：新型コロナウイルス感染拡大防止の観点によりオンラインで実施
- ・個別面談：23 人
- ・選考：オンライン英語テスト（CASEC）の結果および提出書類をもとに 総合的に判定
- ・奨学金：修了学生に対して「支援奨学金」をプログラム参加に係る費用の全額程度支給
- ・参加者数：14 人

セッション項目	回数	時間数
オリエンテーション・事前事後指導	3 回	3 時間
異文化理解講座	2 回	2 時間
英語集中講座 (UTM との多文化紹介プレゼンテーション・ UTeM 教員による英語授業を含む)	20 回	29 時間
国際共修 (NUS とのプロジェクト)	4 回	6 時間
日本文化講座	3 回	3 時間
SIU オンライン留学	20 回	40 時間
合計	52 回	83 時間

## 慶北大学（韓国）交換留学

交換留学については、原則として各学部が募集・選考・派遣手続きを担っているが、慶北大学の交換留学は全学学生を対象としていることから、高等教育研究センター・国際課が各手続きを担当している。今年度は 1 名の派遣を行った。



## 個別留学相談

相談内容としては、コロナ禍の影響もあり、留学の開始時期やオンライン留学に関する内容が目立った。また奨学金に関する相談もあり、目的に合ったプログラム・行き先の選び方や留学費用に関する質問を多く受けた。

対応件数：107 件（対面もしくはオンライン面談による相談のみ）

相談内容：オンライン海外留学、GRIP、留学計画、交換留学、短期留学、私費留学、奨学金、外国語学習ワーキングホリデー、トビタテ！留学 JAPAN

## 官民協働海外留学支援制度～トビタテ！留学 JAPAN～

### トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム

トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラムの第 14 期の募集にあたり、高等教育研究センターは、国際課及び本学トビタテ生と協力して募集説明会を開いたほか、申請希望学生に対して留学計画相談等に対応した。

## その他の留学支援

### Global Space Josanjima / Kuramoto

常三島・蔵本両キャンパスに「Global Space」を設置している。学生が海外協定校や海外留学情報を自由に閲覧できるようになっているほか、海外留学相談スペースとして活用されている。



Global Space Josanjima



Global Space Kuramoto

### 韓国語サークル (Korean Club)

2020 年度韓国・慶北大学夏期オンライン留学参加者と 9 月に立ち上げて以来、週 1 回のペースで活動を行っている。オンラインや対面で楽しく韓国語を学び、学内の韓国人留学生や韓国の大学との交流も行った。積極的な活動が認められ、2021 年 12 月にサークルに昇格をした。

現在、サークル員は 10 名。



## 徳島大学外国人留学生在籍状況

【国別】2022年2月1日時点（単位：人）

区分／国又は地域名		学部学生			大学院生			研究生等			合 計		
		計	女子	国費	計	女子	国費	計	女子	国費	計	女子	国費
アジア	インドネシア	1	1	0	13	7	10				14	8	10
	インド				4	2	1				4	2	1
	台湾				6	2	0				6	2	0
	韓国	17	7	0	0	0	0	0	0	0	17	7	0
	中国	4	0	0	57	26	0	8	3	0	69	29	0
	バングラデシュ				6	1	5	1	0	1	7	1	6
	フィリピン				2	0	1	1	1	1	3	1	2
	ベトナム	6	1	0	6	3	2				12	4	2
	マレーシア	2	0	1	3	1	0	1	1	1	6	2	2
	モンゴル				18	13	3	1	1	1	19	14	4
	タイ王国				1	0	1	0	0	0	1	0	1
オセアニア	ソロモン諸島							1	1	1	1	1	1
北米	アメリカ				1	0	0	0	0	0	1	0	0
欧州	スウェーデン							1	1	0	1	1	0
								0	0	0	0	0	0
アフリカ	エジプト				4	1	0	0	0	0	4	1	0
	ルワンダ				1	0	0				1	0	0
	エチオピア				0	0	0	1	0	1	1	0	1
	ナイジェリア							1	0	1	1	0	1
	モザンビーク							1	0	1	1	0	1
	モロッコ							1	0	1	1	0	1
合計 20ヶ国・地域		30	9	1	122	56	23	18	8	9	170	73	33

【所属別】（2022 年 2 月 1 日現在単位：人）

所属/区分	学部学生			大学院生			研究生等			合 計		
	計	女性	国費	計	女性	国費	計	女性	国費	計	女性	国費
総合科学部	4	0	0				5	3	0	9	3	0
医学部	1	1	0				2	0	0	3	1	0
歯学部							0	0	0	0	0	0
薬学部	1	0	1				0	0	0	1	0	1
理工学部	17	7	0				2	0	1	19	7	1
生物資源産業学部	7	1	0				0	0	0	7	1	0
総合科学教育部				2	1	0	0	0	0	2	1	0
医科学教育部				18	11	2				18	11	2
栄養生命科学教育部				3	1	3				3	1	3
保健科学教育部				7	6	3				7	6	3
口腔科学教育部				19	10	9	0	0	0	19	10	9
薬科学教育部				7	2	3	1	0	1	8	2	4
先端技術科学教育部				33	10	3	0	0	0	33	10	3
創成科学研究科 （地域創生）				8	6	0	1	1	0	9	7	0
創成科学研究科 （臨床心理）				1	1	0				1	1	0
創成科学研究科 （理工）				22	7	0	0	0	0	22	7	0
創成科学研究科 （生物資源）				2	1	0				2	1	0
高等教育研究 センター							7	4	7	7	4	7
合計	30	9	1	122	56	23	18	8	9	170	73	33

【徳島大学における過去 5 年間の留学生受入数】各年度 5 月 1 日現在（単位：人）

区分／年度	2017 年度	2018 年度	2019 年度	2020 年度	2021 年度
国 費	12	16	18	20	26
政府派遣	5	1	0	0	0
私 費	218	247	220	184	154
計	235	264	238	204	180

## 学術交流協定校一覧

大学間学術交流協定校（42 大学）			国・地域名
1	オークランド大学	(国立)	ニュージーランド
2	フロリダアトランティック大学	(公立)	アメリカ
3	武漢大学	(国立)	中国
4	ガジャマダ大学	(国立)	インドネシア
5	慶北大学	(国立)	韓国
6	韓国海洋大学	(国立)	韓国
7	吉林大学	(国立)	中国
8	テキサス大学ヒューストンヘルスサイエンスセンター	(公立)	アメリカ
9	西安交通大学	(国立)	中国
10	南通大学	(国立)	中国
11	バーゼル大学	(国立)	スイス
12	ゴンダール大学	(国立)	エチオピア
13	モンゴル国立医科大学	(国立)	モンゴル
14	同済大学	(国立)	中国
15	南京大学	(国立)	中国
16	ハノーバー医科大学	(国立)	ドイツ
17	モナシュ大学	(公立)	オーストラリア
18	マレーシアサインズ大学	(国立)	マレーシア
19	ソウル国立大学	(国立)	韓国
20	サビトリバイ プーレ プネ大学	(公立)	インド
21	マレーシア工科大学	(国立)	マレーシア
22	マレーシア国民大学	(国立)	マレーシア
23	マラヤ大学	(国立)	マレーシア
24	国立台湾科技大学	(国立)	台湾
25	マレーシアマラッカ技術大学	(公立)	マレーシア
26	ムハマディア大学ジョグジャカルタ校	(私立)	インドネシア
27	ドンズー日本語学校	(私立)	ベトナム
28	ベトナム国立栄養院	(国立)	ベトナム
29	ベトナム国立農業大学	(国立)	ベトナム
30	キングモンクット工科大学トンブリ校	(国立)	タイ王国
31	ボルドー大学	(国立)	フランス
32	ダナン大学	(国立)	ベトナム
33	南イリノイ大学	(公立)	アメリカ
34	トリニティウエスタン大学	(私立)	カナダ
35	パラナ連邦工科大学	(公立)	ブラジル
36	ミラノ大学	(公立)	イタリア
37	時事日本語学院	(私立)	韓国

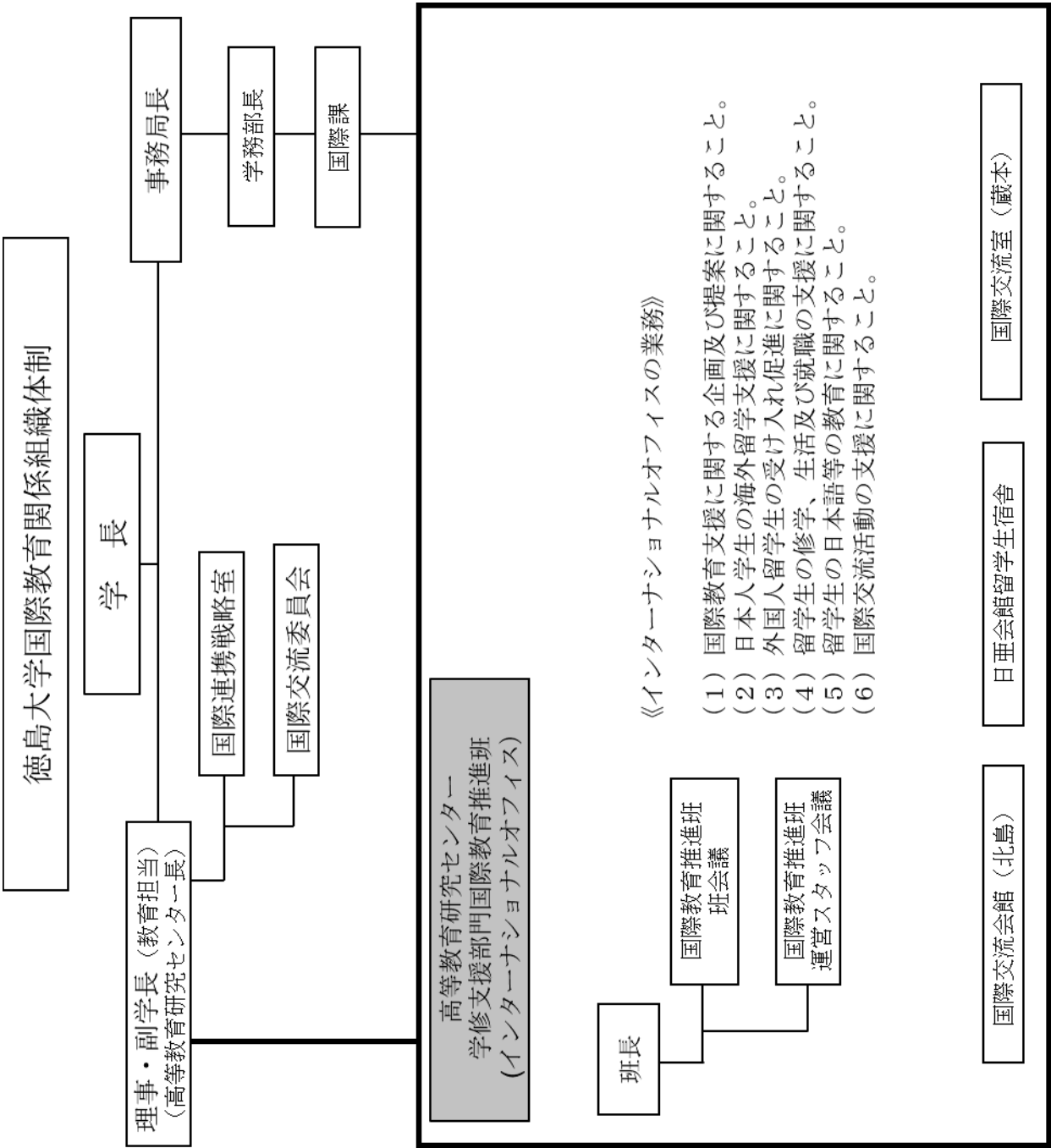
38	東国大学	(私立)	韓国
39	大連理工大学	(国立)	中国
40	テクニオンーイスラエル工科大学	(国立)	イスラエル
41	レイニアエ科学院	(国立)	ポルトガル
42	ヴェリコ・タルノヴォ大学	(公立)	ブルガリア
部局間学術交流協定校 (56 大学)			
1	トゥールーズ工科大学	(国立)	フランス
2	朝鮮大学歯科部	(私立)	韓国
3	ラインマイン応用科学大学	(公立)	ドイツ
4	中国医科大学口腔医学院	(国立)	中国
5	東義大学大学院	(私立)	韓国
6	ノースカロライナ大学チャペルヒル校エシエルマン薬学部	(公立)	アメリカ
7	南台科技大学工学部	(私立)	台湾
8	大理大学薬学化学院	(公立)	中国
9	上海交通大学医学院附属第九人民医院	(国立)	中国
10	メトロポリア応用科学大学リハビリテーション・医療検査学部	(国立)	フィンランド
11	天津医科大学薬学院	(公立)	中国
12	メトロポリア応用科学大学保健看護学部	(国立)	フィンランド
13	ルンド大学人文神学部	(国立)	スウェーデン
14	ハントゥアー大学歯学部	(私立)	インドネシア
15	延世大学バイオメディカル・エンジニアリング研究部	(私立)	韓国
16	延世大学スペース・バイオサイエンス研究部	(私立)	韓国
17	国立嘉義大学人文芸術学院	(国立)	台湾
18	トリブバン大学医学部	(国立)	ネパール
19	ドクターババサヘブアンベドカルマラツワダ大学理学部	(公立)	インド
20	フィニステラーエ大学歯学部	(私立)	チリ
21	ビショップス大学	(私立)	カナダ
22	スルタンアグンイスラミック大学歯学部	(私立)	インドネシア
23	ハサスディン大学歯学部	(国立)	インドネシア
24	ノースマハラシュトラ大学 大学化学部、生命科学部、物理科学部、数理科学部、計算機科学部及び科学技術院	(公立)	インド
25	バラティビドゥヤピース ディームド大学工学部	(私立)	インド
26	ジャダプール大学 学際的研究・法学・経営学部	(公立)	インド
27	育達科技大学人文社会学院	(私立)	台湾
28	東亜大学考古美術史学科	(私立)	韓国
29	ラトビア生命科学技術大学言語センター	(国立)	ラトビア
30	コロラド大学ボルダー校	(公立)	アメリカ
31	スマトラ・ウタラ大学薬学部	(国立)	インドネシア
32	開南大学人文社会学院	(私立)	台湾
33	プリンスオブソンクラ大学看護学部	(公立)	タイ



34	セントポール大学フィリピン	(私立)	フィリピン
35	中国科学院広西植物研究所	(国立)	中国
36	ラトビア大学人文学部	(国立)	ラトビア
37	ベトナム国家大学ハノイ校外国語大学	(国立)	ベトナム
38	ブリティッシュコロンビア大学薬学部	(国立)	カナダ
39	韓国外国語大学人文学部	(私立)	韓国
40	ザグレブ大学人文社会科学部	(国立)	クロアチア
41	ザグレブ大学クロアチア研究学部	(国立)	クロアチア
42	寧波大学外国語学院	(国立)	中国
43	マハサラスワティ・デンパサル大学歯学部	(私立)	インドネシア
44	モンゴル科学技術大学情報通信技術学部	(国立)	モンゴル
45	ウダヤナ大学	(国立)	インドネシア
46	スリハサナンバ歯科大学	(私立)	インド
47	広東海洋大学農学部	(公立)	中国
48	ゲント大学文学哲学部	(公立)	ベルギー
49	シリマン大学看護学部	(私立)	フィリピン
50	マニパール歯科大学	(私立)	インド
51	SRM 歯科大学	(私立)	インド
52	リュブリャナ大学文学部	(公立)	スロベニア
53	スリパリーロック大学	(公立)	アメリカ
54	ブルノ工科大学中央ヨーロッパ技術研究所 (CEITEC)	(国立)	チェコ
55	淡江大学 推広教育室	(私立)	台湾
56	インド国政府科学技術省生物資源持続型開発研究所 (ISBD)	(国立)	インド

(2022 年 3 月 3 日現在)

# 徳島大学国際教育関係組織体制



# 徳島大学高等教育研究センター規則

平成31年3月28日  
規則第86号制定

(趣旨)

第1条 この規則は、徳島大学学則（昭和33年規則第9号）第4条第2項の規定に基づき、徳島大学高等教育研究センター（以下「センター」という。）について必要な事項を定めるものとする。

(目的)

第2条 センターは、全学的視点から入学者選抜、教育改革、ICT活用教育、創新教育、国際教育、学生生活及びキャリア形成等の支援に関する主要施策を調査研究し、教育支援及び学生支援に係る取組を総合的に推進すること、並びに教育支援、学生支援に係る徳島大学（以下「本学」という。）の実情を調査、分析し、学修成果の把握や教育支援、学生支援に係る提言等を行い、充実・改善を図ることを目的とする。

(部門及び室等)

第3条 前条の目的を達成するため、センターに次の部門及び室等（以下「部門等」という。）を置く。

- (1) アドミッション部門
  - (2) 教育改革推進部門
  - (3) 学修支援部門
  - (4) キャリア支援部門
  - (5) 教育の質保証支援室（以下「質保証支援室」という。）
- 2 ICT活用教育、イノベーション教育及びグローバル教育を推進するため、学修支援部門にEdTech推進班、創新教育推進班及び国際教育推進班を置く。
- 3 学生のキャリア教育、キャリア形成支援、就職支援及び学生支援を推進するため、キャリア支援部門にキャリア・就職支援班及び学生支援班を置く。
- 4 第2項の創新教育推進班にイノベーションデザイン担当、イノベーション創成担当及び社会実装担当を、前項の学生支援班に学生生活支援室及び学生参画推進室を置く。
- 5 前項の担当及び室について必要な事項は、センター長が別に定める。

(部門等の業務)

第4条 アドミッション部門は、次の業務を行う。

- (1) 入学者選抜及び入試広報に係る企画及び提案等に関すること。
  - (2) 入学者選抜における調査、分析及び研究に関すること。
  - (3) 四国地区国立大学連合アドミッションセンターに関すること。
  - (4) その他入学者選抜に関し必要な事項
- 2 教育改革推進部門は、次の業務を行う。
- (1) 教育改革に係る企画及び提案に関すること。
  - (2) 教員の教育力の向上等に関すること。
  - (3) 教育改革の企画及び運営への学生の関与に関すること。
  - (4) その他教育改革に関し必要な事項
- 3 学修支援部門は、次の業務を行う。
- (1) EdTechの推進に関すること。
  - (2) 創新教育の推進に関すること。
  - (3) 国際教育支援の推進に関すること。
  - (4) その他学修支援に関し必要な事項
- 4 キャリア支援部門は、次の業務を行う。
- (1) 学生のキャリア・就職支援に関すること。
  - (2) 学生支援に関すること。
  - (3) その他学生のキャリア・就職支援に関し必要な事項

- 5 質保証支援室は、徳島大学インスティト्यूショナル・リサーチ室（第12条において「IR室」という。）と連携・協力して、次の業務を行う。
- (1) 教学データの検証に関する企画及び提案に関すること。
  - (2) 学修成果の見える化に関すること。
  - (3) 教学データの検証結果に基づく教育の内部質保証，教育改革支援及び学生支援についての提言に関すること。
  - (4) 教育組織の意思決定の支援に関すること。
  - (5) 入学前教育及び学修成果の把握方法の開発に関すること。
  - (6) その他教育の質保証の実施に関し必要な事項
- 6 前条第1項に定める部門等は、センターの目的を達成するため、連携・協力を努めなければならない。

（班の業務）

第5条 E d T e c h推進班は、次の業務を行う。

- (1) I C Tを活用した教育の企画及び提案に関すること。
- (2) 教員のI C Tを活用した教育の質向上及び普及に関すること。
- (3) I C Tを活用した学生への教育の支援に関すること。
- (4) 四国におけるe-K n o w l e d g eを基盤とした大学間連携による大学教育の共同実施に関すること。
- (5) その他I C Tを活用した教育の開発及び支援に関し必要な事項

2 創新教育推進班は、次の業務を行う。

- (1) 創新教育に関する企画及び提案に関すること。
- (2) 創新教育の実施及び教育法の開発に関すること。
- (3) 創新教育の評価方法の開発及び継続的な改善に関すること。
- (4) 創新教育の普及及び学外関係機関との連携に関すること。
- (5) その他創新教育に関し必要な事項

3 国際教育推進班は、次の業務を行う。

- (1) 国際教育支援に関する企画及び提案に関すること。
- (2) 日本人学生の海外留学支援に関すること。
- (3) 外国人留学生（以下「留学生」という。）の受入れ促進に関すること。
- (4) 留学生の修学，生活及び就職の支援に関すること。
- (5) 留学生の日本語等の教育に関すること。
- (6) 国際交流活動の支援に関すること。
- (7) その他国際交流及び国際教育の支援に関し必要な事項

4 キャリア・就職支援班は、次の業務を行う。

- (1) 学生のキャリア形成及び就職に関する企画及び提案に関すること。
- (2) 学生のキャリア形成支援及び就職支援に関すること。
- (3) キャリア教育の支援に関すること。
- (4) その他学生の就職支援及びキャリア形成支援に関し必要な事項

5 学生支援班は、次の業務を行う。

- (1) 学生の課外活動及び自治活動に関すること。
- (2) 学生の経済支援に関すること。
- (3) 学生の指導相談，健康管理及び保健衛生に関すること。
- (4) 学生の表彰等に関すること。
- (5) 学生に対する広報，調査及び統計等に関すること。
- (6) 学生の正課外教育に関すること。
- (7) その他学生支援に関し必要な事項

（職員）

第6条 センターに、次の職員を置く。

- (1) センター長

- (2) 部門長及び教育の質保証支援室長（以下「質保証支援室長」という。）
- (3) 班長
- (4) 専任教員（特任教員を含む。）
- (5) 兼務教員
- (6) その他必要な職員

- 2 前項の職員のほか、センター長が必要と認める場合は、副センター長を置くことができる。
- 3 学修支援部門に、創新教育コーディネーター及びものづくりコーディネーターを置くことができる。
- 4 キャリア支援部門に、就職コーディネーター、キャリアコーディネーター及びキャリアカウンセラーを置くことができる。

（センター長）

第7条 センター長は、学長が指名する副学長又は本学の教授をもって充てる。

- 2 センター長は、センターの業務を掌理する。
- 3 センター長の任期は2年とする。ただし、センター長が任期の途中で欠員となった場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。
- 4 センター長は、再任されることができる。

（副センター長）

第8条 副センター長は、本学の教員のうちからセンター長の意見を聴いて、学長が命ずる。

- 2 副センター長は、センター長の職務を補佐する。
- 3 副センター長の任期は2年とする。ただし、副センター長が任期の途中で欠員となった場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。
- 4 副センター長は、再任されることができる。

（部門長及び質保証支援室長）

第9条 部門長及び質保証支援室長（以下「部門長等」という。）は、センター長の意見を聴いて、学長が命ずる。

- 2 部門長等は、所属する部門等の業務を掌理するとともに、センター長の職務を補佐する。
- 3 部門長等の任期は2年とする。ただし、部門長等が任期の途中で欠員となった場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。
- 4 部門長等は、再任されることができる。

（班長）

第10条 班長は、センター長の意見を聴いて、学長が命ずる。ただし、学生支援班長は徳島大学学生委員会委員長をもって充てる。

- 2 班長は、班の業務を掌理する。
- 3 班長の任期は2年とする。ただし、班長が任期の途中で欠員となった場合の後任者の任期は、前任者の在任期間とする。
- 4 班長は、再任されることができる。

（専任教員）

第11条 専任教員は、センターの運営を補助し、所属する部門等の業務を処理する。

- 2 専任教員の選考は、第15条に規定する運営委員会の議を経て、学長が行う。

（兼務教員）

第12条 兼務教員は、専任教員と協力し、所属する部門等の業務を処理するとともに、必要に応じて、学部並びに大学院研究科及び大学院教育部との連絡調整を行う。

- 2 兼務教員は、次の各号に掲げる者をもって充て、学長が命ずる。

(1) アドミッション部門

イ 各学部から選出された教員 各1人



- ロ 教養教育院から選出された教員 1人
- (2) 教育改革推進部門
  - イ 質保証支援室の専任教員
  - ロ その他教育改革推進部門が必要と認める者
- (3) 学修支援部門
  - イ E d T e c h 推進班
    - (イ) 各学部から選出された教員 各1人
    - (ロ) 教養教育院から選出された教員 1人
    - (ハ) 情報センターから選出された教員 1人
  - ロ 創新教育推進班
    - (イ) 各学部から選出された教員 各1人
    - (ロ) 教養教育院から選出された教員 1人
    - (ハ) 研究支援・産官学連携センターから選出された教員 1人
  - ハ 国際教育推進班
    - 部局から選出された教員 2人
- (4) キャリア支援部門
  - イ キャリア・就職支援班
    - 各学部から選出された教員 各1人
  - ロ 学生支援班
    - (イ) 徳島大学学生委員会規則（平成11年規則第1385号）第3条第2号及び第3号の委員
    - (ロ) 国際教育推進班から選出された教員 1人
    - (ハ) キャンパスライフ健康支援センターから選出された教員 1人
- (5) 質保証支援室
  - イ I R 室の教員 1人
  - ロ その他質保証支援室が必要と認める者

3 前項の規定にかかわらず、センターの業務に関し専門知識を有する者で、センター長が必要と認めるときは、学長が命ずるものとする。

4 兼務教員（第2項第4号ロ(イ)の兼務教員を除く。以下この項及び次項において同じ。）の任期は2年とする。ただし、兼務教員が任期の途中で欠員となった場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

5 前項の兼務教員は、再任されることができる。

（創新教育コーディネーター及びものづくりコーディネーター）

第13条 創新教育コーディネーター及びものづくりコーディネーターは、センター長の意見を聴いて、学長が命ずる。

2 創新教育コーディネーターは、創新教育推進班の運営、教員のサポート、事務処理等の業務を行う。

3 ものづくりコーディネーターは、学生の教育研究活動に係る技術支援、学生プロジェクトのマネジメント等の業務を行う。

（就職コーディネーター、キャリアコーディネーター及びキャリアカウンセラー）

第13条の2 就職コーディネーター、キャリアコーディネーター及びキャリアカウンセラーは、センター長の意見を聴いて、学長が命ずる。

2 就職コーディネーターは、学生の就職先企業等の開拓、就職セミナー、就職ガイダンス等の企画・立案・実施及び業界の動向調査等の業務を行うほか、第4項の業務を行う。

3 キャリアコーディネーターは、学生ニーズの収集・分析、キャリア形成セミナー、キャリア形成ガイダンス等の企画・立案・実施及び学内関係部局との連携強化等の業務を行うほか、次項の業務を行う。

4 キャリアカウンセラーは、学生の就職相談及び進路相談業務並びに学生と企業のマッチング支援並びに面接前後の指導等の業務を行う。

（学外者への委嘱）

第14条 センター長が必要と認めるときは、学長の承認を得て、学外者に就職コーディネーター、キャリアコーディネーター又はキャリアカウンセラーを委嘱することができる。

(運営委員会)

第15条 センターに、センターの管理運営及び業務に関する事項を審議するため、徳島大学高等教育研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

第16条 運営委員会は、次の各号に掲げる事項を審議する。

- (1) センターの管理運営の基本方針に関する事項
- (2) センターの業務に関する事項
- (3) 教員の人事に関する事項
- (4) センターの予算・決算に関する事項
- (5) その他センターの管理運営及び業務に関し必要と認める事項

第17条 運営委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) センター長
- (2) 副センター長
- (3) 部門長等
- (4) 班長
- (5) 各学部から選出された教員 各1人
- (6) 教養教育院から選出された教員 1人
- (7) 学務部長
- (8) その他運営委員会が必要と認める者

2 前項第5号、第6号及び第8号の委員は、学長が命ずる。

3 前項の委員の任期は2年とする。ただし、委員に欠員が生じたときの後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

4 前項の委員は、再任されることができる。

第18条 運営委員会に委員長を置き、前条第1項第1号の委員をもって充てる。

2 委員長は、運営委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。

第19条 運営委員会は、委員の過半数の出席がなければ、会議を開くことができない。

2 議事は、出席した委員の過半数をもって決する。

第20条 運営委員会が必要と認めるときは、会議に委員以外の者の出席を求めて意見を聴くことができる。

(専門委員会)

第21条 運営委員会に、専門委員会を置くことができる。

2 専門委員会について必要な事項は、運営委員会が別に定める。

(連絡会議)

第22条 センターに、センターの部門等に関係する事項について連絡調整するため、徳島大学高等教育研究センター連絡会議（以下「連絡会議」という。）を置く。

2 連絡会議について必要な事項は、センター長が別に定める。

(部門会議、室会議及び班会議)

第23条 部門等の運営に関する事項を審議するため、部門に部門会議を、質保証支援室に室会議を、各班（学生支援班を除く。）班会議を置く。

2 学生支援班の運営に関する事項は、徳島大学学生委員会において審議する。

3 部門会議、室会議及び班会議について必要な事項は、センター長が別に定める。

(四国地区国立大学連携事業)

第24条 四国地区国立大学連携事業を推進するため、センターに「四国地区国立大学連合アドミッションセンター徳島大学サテライトオフィス」（以下「徳島大学サテライトオフィス」という。）及び「大学連携e-Learning教育支援センター四国徳島大学分室」（以下「徳島大学分室」という。）を置く。

2 徳島大学サテライトオフィス及び徳島大学分室の業務は、それぞれアドミッション部門及び学修

支援部門E d T e c h推進班が行う。

- 3 徳島大学サテライトオフィスにアドミッションオフィサーを置き、アドミッション部門の教員をもって充てる。
- 4 徳島大学分室に分室長を置き、学修支援部門E d T e c h推進班長をもって充てる。

(日本語研修コース)

第25条 留学生に対する日本語等の予備教育を行うため、センターに日本語研修コースを置く。

- 2 日本語研修コースの実施に関し必要な事項は、別に定める。

(イノベーションプラザ)

第26条 学修支援部門創新教育推進班の業務を行うため、イノベーションプラザを置く。

- 2 イノベーションプラザについて必要な事項は、センター長が別に定める。

(事務)

第27条 センターの事務は、学務部教育支援課が学務部各課と連携・協力して処理する。

(雑則)

第28条 この規則に定めるもののほか、センターについて必要な事項は、センター長が別に定める。

附 則

- 1 この規則は、平成31年4月1日から施行する。
- 2 次に掲げる規則は、廃止する。
  - (1) 徳島大学総合教育センター規則（平成25年度規則第81号）
  - (2) 徳島大学創新教育センター規則（平成28年度規則第49号）
- 3 この規則施行の際、徳島大学総合教育センター規則第8条の規定により任命されているアドミッション部門長及び教育改革推進部門長は、この規則第9条第1項の規定により、それぞれアドミッション部門長及び教育改革推進部門長に任命されたものとみなし、その任期は、同条第3項の規定にかかわらず、平成33年3月31日までとする。
- 4 この規則施行の際、徳島大学総合教育センター規則第8条の規定により任命されているICT活用教育部門長及びキャリア支援部門長は、この規則第10条第1項の規定により、それぞれEdTech推進班長及びキャリア・就職支援班長に任命されたものとみなし、その任期は、同条第3項の規定にかかわらず、平成33年3月31日までとする。
- 5 この規則施行後、最初に任命されるセンター長、副センター長及び兼務教員の任期は、第7条第3項、第8条第3項及び第12条第4項の規定にかかわらず、平成33年3月31日までとする。
- 6 この規則施行後、最初に任命される第17条第1項第5号、第6条及び第8号の委員の任期は、同条第3項の規定にかかわらず、平成33年3月31日までとする。

附 則（令和2年3月17日規則第64号改正）

- 1 この規則は、令和2年4月1日から施行する。
- 2 次に掲げる規則は、廃止する。
  - (1) 徳島大学国際センター規則（平成14年規則第1703号）
  - (2) 徳島大学国際センター運営委員会規則（平成14年規則第1704号）

# 徳島大学高等教育研究センター学修支援部門国際教育推進班会議規則

平成31年4月1日  
高等教育研究センター長制定

(趣旨)

第1条 この規則は、徳島大学高等教育研究センター規則（平成30年度規則第86号）第23条第3項の規定に基づき、徳島大学高等教育研究センター学修支援部門国際教育推進班会議（以下「班会議」という。）について必要な事項を定めるものとする。

(所掌事項)

第2条 班会議は、次の各号に掲げる事項を審議する。

- (1) 国際教育支援に関する企画及び提案に関すること。
- (2) 日本人学生の海外留学支援に関すること。
- (3) 外国人留学生（以下「留学生」という。）の受入れ促進に関すること。
- (4) 留学生の修学、生活及び就職の支援に関すること。
- (5) 留学生の日本語等の教育に関すること。
- (6) 国際交流活動の支援に関すること。
- (7) その他国際交流及び国際教育の支援に関し必要な事項

(組織)

第3条 班会議は、次の各号に掲げる者をもって組織する。

- (1) 班長
- (2) 専任教員（特任教員を含む。）
- (3) 兼務教員
- (4) 学務部国際課長
- (5) その他班会議が必要と認める者

(議長)

第4条 班長は、班会議を招集し、その議長となる。

2 議長に事故があるときは、議長があらかじめ指名する者が、その職務を代理する。

(会議)

第5条 班会議は、構成員の3分の2以上の出席がなければ会議を開くことができない。

(構成員以外の者の出席)

第6条 班会議が必要と認めるときは、会議に構成員以外の者の出席を求めて意見を聴くことができる。

(専門部会)

第7条 班会議に、専門部会を置くことができる。

2 専門部会について必要な事項は、班会議が別に定める。

(庶務)

第8条 班会議の庶務は、学務部国際課において処理する。

(雑則)

第9条 この規則に定めるもののほか、班会議について必要な事項は、学修支援部門長が別に定める。

附 則

この規則は、平成 31 年 4 月 1 日から施行する。

附 則（令和 2 年 3 月 10 日改正）

この規則は、令和 2 年 4 月 1 日から施行する。



# 徳島大学高等教育研究センター学修支援部門国際教育推進班運営スタッフ 会議に関する申合せ

令和2年4月1日  
高等教育研究センター学修支援部門国際教育推進班長裁定

(所掌事項)

第1 徳島大学高等教育研究センター学修支援部門国際教育推進班運営スタッフ会議（以下「スタッフ会議」という。）は、徳島大学高等教育研究センター学修支援部門国際教育推進班（以下「班」という。）の業務及び運営について必要な事項（班会議の所掌事項を除く。）を審議する。

(組織)

第2 スタッフ会議は、次の各号に掲げる者をもって組織する。

- (1) 班長
- (2) 班の教員
- (3) 学務部国際課の事務職員のうち係長以上の職にある者
- (4) その他スタッフ会議が必要と認める者

2前項第4号の委員の任期は1年とし、再任されることができる。

(議長)

第3 スタッフ会議に議長を置き、班長をもって充てる。班長は、必要に応じてあらかじめ指名した者に議長の職務を代行させることができる。

(会議)

第4 スタッフ会議は、構成員の過半数の出席がなければ会議を開くことができない。

2議事は、出席した構成員全員の同意をもって決する。

(構成員以外の者の出席)

第5 スタッフ会議が必要と認めるときは、会議に構成員以外の者の出席を求めて意見を聴くことができる。

(庶務)

第6 スタッフ会議の庶務は、学務部国際課において処理する。

(雑則)

第7 この申合せに定めるもののほか、スタッフ会議について必要な事項は、スタッフ会議が別に定める。

附則

この申合せは、令和2年4月1日から実施する。

# 徳島大学高等教育研究センター日本語研修コース規則

平成31年4月1日  
高等教育研究センター長制定

(趣旨)

第1条 この規則は、徳島大学高等教育研究センター規則（平成30年度規則第86号）第25条第2項の規定に基づき、外国人留学生で日本語能力の不十分なものに対し日本語等の予備教育を行うために開設する徳島大学高等教育研究センター日本語研修コース（以下「日本語研修コース」という。）の実施について必要な事項を定めるものとする。

(受講資格)

第2条 日本語研修コースを受講することができる者は、次の各号のいずれかに該当する者とする。

- (1) 国費外国人留学生制度実施要項（昭和29年3月31日文部大臣裁定）に定める研究留学生及び教員研修留学生のうち、日本語等の予備教育が必要であると認められた者
- (2) 日韓共同理工系学部留学生事業実施要項（平成12年8月1日文部省学術国際局長裁定）に定める日韓共同理工系学部留学生のうち、日本語等の予備教育が必要であると認められた者
- (3) 徳島大学学則（昭和33年規則第9号）第49条第2項の規定に基づく日本語等予備教育生
- (4) その他外国人留学生で徳島大学高等教育研究センター長（以下「センター長」という。）が適当と認めた者

(受講の許可)

第3条 センター長は、日本語研修コースを受講しようとする者について、徳島大学高等教育研究センター学修支援部門国際教育推進班会議（以下「班会議」という。）の議を経て、受講を許可する。

(教育期間及び開始時期)

第4条 日本語研修コースの教育期間は6か月とし、その開始時期は4月及び10月とする。

(教育課程)

第5条 日本語研修コースの教育課程は、班会議の議を経て、センター長が別に定める。

(受講の中止)

第6条 日本語研修コースを受講する者（以下「受講者」という。）が受講を中止しようとするときは、その理由を付して、センター長に願い出なければならない。

2 前項の願い出があったときは、センター長は、班会議の議を経て、これを許可する。

3 センター長は、受講者が疾病その他の理由により受講を継続することができないと認めたときは、班会議の議を経て、受講の中止を命ずることができる。

(修了証書の授与)

第7条 センター長は、日本語研修コースの教育課程を修了した者に対して、修了証書を授与する。

(受講料)

第8条 受講者については、受講料を徴収しない。

(雑則)

第9条 この規則に定めるもののほか、日本語研修コースの実施について必要な事項は、班会議の議を経て、センター長が別に定める。

附則

この規則は、平成31年4月1日から施行する。

# 高等教育研究センター学修支援部門国際教育推進班・国際課人員名簿 (2022 年 2 月 1 日時点)

## 高等教育研究センター学修支援部門国際教育推進班教員

橋本 智	班長（併）教授
金 成梅	教授
坂田 浩	准教授
Tran Hoang Nam	講師
清藤 隆春	特任助教
田久保 浩	センター兼務教員 教授（総合科学部）
安澤 幹人	センター兼務教員 教授（理工学部）

## 国際課職員

課長	大村 源一郎
副課長	真名野 佳代
係長	折野 寛子
係長	川上 ちぐさ
主任	喜多 宏子
事務員	古城 浩子
事務員	寺内 彩
事務員	竹内 光恵
事務補佐員	田村 真也子
事務補佐員	石井 詔子
事務補佐員（蔵本地区）	吉成 記子
事務補佐員（留学生県内定着促進事業）	山田 溪太
事務補佐員	安藝 紀子
事務補佐員	大塚 綾子
事務補佐員（国際交流会館）	田村 真子

**2021 年度**

**徳島大学高等教育研究センター学修支援部門国際教育推進班紀要・年報**

編集発行： 徳島大学高等教育研究センター学修支援部門国際教育推進班  
徳島県徳島市南常三島町 1-1  
徳島大学地域創生・国際交流会館 4 階  
088-656-7491  
<https://www.isc.tokushima-u.ac.jp>

発行日： 2022 年 3 月 31 日